

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十三）

鈴木 満 訳・注

\*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

*Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein*. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand, 1853. Reprint. Kabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

*Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm*. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag, 1981. Vollständige Ausgabe nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版（略称をGLとする）も参照した。

*The German Legends of the Brothers Grimm*. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここに記さず、本文に注番号を附し、「DS\*\*\*」と詳しい」と注記するに留める。
5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。
6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があるうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。
7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。
8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その一) 一—— 六〇 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号  
 一七〇—二三五ページ、平成二十四年十一月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その二) 六一—— 九〇 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号  
 四六三—五三〇ページ、平成二十五年二月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その三) 九一—— 一三四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号  
 七五—一七六ページ、平成二十五年三月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その四) 一三五—— 一八四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号  
 一五七—二八五ページ、平成二十五年十一月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その五) 一八五—— 二二五 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号  
 九五—一八〇ページ、平成二十六年三月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その六) 二二六—— 二八八 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号  
 二〇九—三三〇ページ、平成二十六年十月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その七) 二八九—— 三三九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第二号

- 『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その八) 三四〇——三九四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号 一五〇—二四六ページ、平成二十六年十二月  
一〇九八ページ、平成二十七年三月
- 『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その九) 三九五——四四四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号 一九〇—一九六ページ、平成二十七年三月
- 『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その十) 四四五——四八四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第一号 八三—一七八ページ、平成二十七年十二月
- 『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その十二) 四八五——五四四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第二号 五五—一五六ページ、平成二十八年三月
- 『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その十二) 五四五——六〇九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第三・四号 一〇九—一九〇ページ、平成二十八年三月

**\*本分載試訳(その十三)の伝説**

- 六一〇 魔法使いの少年 Die Zauberjunge.
- 六一一 アウアーバッハの酒蔵におけるファウスト博士 Doktor Faust in Auerbachs Keller.
- 六一二 ライプツィヒ近傍の女の水の精<sup>セイ</sup>の出る川 Nixenflüsse bei Leipzig. \*DS53 Der Wassermann an der Fleischerbank. / \*DS60 Die Erbjungfer und das Saalweiblein. / \*DS61 Wasserrecht. / \*DS64 Die Wassernixe und der Mühlknappe.
- 六一三 アイレンブルク伯と小人たち Der Graf von Eilenburg und die Zwerge. \*DS31 Des kleinen Volks Hochzeitfest.
- 六一四 オーシャッツとツィン各 Der Name von Oschatz.

- 六一五 ルッカの会戦 Die Schlacht bei Lukka.  
 六一六 メランヒトン<sup>メランヒトン</sup>梨 Die Melanchthons-Birne.  
 六一七 二匹の暮蛙<sup>Chamfrax</sup> Die beiden Kröten.  
 六一八 呪われて立つ Zum Stehen verwünscht. \*DS231 Zum Stehen verwünscht.  
 六一九 シュネーベルクの悪魔召喚<sup>悪魔召喚</sup>音 Schneeburger Teufelsbanner.  
 六二〇 妖精縁無し帽子小人<sup>妖精縁無し帽子小人</sup> Geist Nutzchen.  
 六二一 神の審判 Gottes Gericht.  
 六二二 修道士の口癖 Des Mönchs Sprüchwort.  
 六二三 真珠の茨<sup>真珠の茨</sup> Die Perlenschoten.  
 六二四 山の贈り物 Berggaben.  
 六二五 親方<sup>マイスター</sup>ヘンマリング Meister Hämmerling. \*DS2 Der Berggeist.  
 六二六 エルト<sup>ゲル</sup>山地<sup>エルツ</sup>の荒れ狂う<sup>ゲル</sup>同勢<sup>エルツ</sup> Das wütende Heer auf dem Erzgebirge.  
 六二七 十字架と聖杯 Kreuz und Kelch.  
 六二八 旗手の跳躍 Des Fahnenjunktlers Sprung.  
 六二九 ハンス・ヤーゲン<sup>ハンズ・ヤーン</sup>ト<sup>ト</sup>ホル<sup>ホル</sup> Hans Jagenteufel. \*DS310 Hans Jagenteufel.  
 六三〇 ドレスデンの修道士 Der Dresdner Mönch.  
 六三一 薔薇の花環<sup>薔薇の花環</sup> Der Rosenkranz.  
 六三二 聖ゲオルク<sup>セント・ゲオルク</sup>の旗旗<sup>セント・ゲオルク</sup> Sankt Georgs Panier.

- 六三三 性悪な猫ども Die bösen Katzen.
- 六三四 彷徨さまよい歩く長靴 Die umirrenden Stiefeln.
- 六三五 小人小人の悪戯 Zwergschabernack.
- 六三六 オイビンの跳躍伝説 Sprungssage vom Oybin. \*DS321. Der Jungfersprung.
- 六三七 キュナストの花嫁 Die Braut vom Kynast.
- 六三八 星占ホロスコープい Das Horoskop.
- 六三九 揺さぶり女たち Die Rüttelweiber. \*DS271. Der Nachfänger und die Rüttelweiber.
- 六四〇 山の精リユーベツァール Bergegeist Rübezah.
- 六四一 リユーベツァールのお気に入りたち Rübezahls Gunstgenossen.
- 六四二 リユーベツァールのからからの数数 Rübezahls Neckereien.
- 六四三 リユーベツァールの馬たち Rübezahls Pferde.
- 六四四 リユーベツァールの樹 Rübezahls Baum.
- 六四五 シレジアの酒豪 Ein schlesischer Zecher.
- 六四六 黄金ゲルデン・エセルの驢馬 Der güldne Esel.
- 六四七 子どもたちの信心 Kinder-Andacht.
- 六四八 ツォプテンベルクの話 Vom Zobtenberge. \*DS144 Die Männer im Zottenberg.
- 六四九 市参事会員の頭 Der Kopf des Rathsmannes. \*DS359. Der Schweidnitzer Rathsmann.
- 六五〇 ライヒェンバッハの起源 Reichenbachs Ursprung.

- 六五一 ライヒエンバッハの舞踏狂たち Die Tanzwuthigen zu Reichenbach.  
六五二 悪魔の溝 トエフエルスグラベン Teufels-Graben.  
六五三 ブレスラウの鐘の鑄造 Der Glockenguß zu Breslau. \*DS126. Der Glockenguß zu Breslau.  
六五四 忝ない ハイスタレン Habedank.  
六五五 ザガンなる名前 Sagan's Name.  
六五六 グラーツの異教の姫君 Die heidnische Jungfrau zu Glatz. \*DS318. Die Heidenjungfrau zu Glatz.  
六五七 巫女の科の木 シヒョラ Die Linde der Sibylle.  
六五八 ロムニッツの奇蹟の泉 オキホ Der Wunderbrunnen zu Lomnitz.  
六五九 トロスキイ城の姉妹 Die Schwestern von Troßky.

## 六一〇 魔法使いの少年

一七〇七年のこと、ライプツィヒのある軽はずみな徒弟が渡り者の粉挽き職人と組んで、悪魔を召喚し、宝を手に入れようともくろんだ。職人からは金と引き替えにかのファウスト博士の呪文書の筆写本と金属製の占棒を受け取り、とある週の金曜日、師匠の家の穴蔵で全て儀式に則り、魔法と召喚を開始した。三度目の呼び出しで地面から煙が立ち昇り、煙はちいぢやな小人の姿になった。全身灰色の紗を被っているみたいにぼんやりしていた。小人は二枚のニグロツシェン貨幣を徒弟に差し出し、「これで満足か」と訊ね、徒弟は「うん」と答えた。別の週の金曜、またしても召喚を行うと、同じ現象が起こった。その他に地面が開いて、財宝が見えた。精霊はこの時思い掛けなくブランドンブルク十六グロツシェン貨幣を一枚差し出し、またしても「これで満足か」と訊ねた——もつとも灰色小人は少しも身動きせず、唇も動かさなかつたのだが。徒弟はやはり「うん」と答え、お定まりの儀式に全て従い、蠟燭を消し、後ずさり穴蔵から退散するなどした。これは十月二十八日のこと。そして十一月四日にこの若い魔法使いは再びもつときつい召喚をやらかし始めた。するとまたしても魔物が姿を顕したが、今度はごろごろという物凄いな音を立てながらだった。そして地面はすっかり開き、釜が一つせりあがって来た。これに刻印を打たれた貨幣がぎゅぎゅ詰まっていた。けれども金の上には鞭みたいな物が乗っていて、頭がその先についており、これはひっきりなしに動いていた。この強力な召喚の際、魔法使いの少年が聖なる三位一体を否定すると、黒枠付きで両側に赤い字が書かれている、縦長に切られた全紙半分の紙片一枚が、「尖端を」逆に削がれた黒い羽根洋筆と共に出現。そして例の灰色小人は——最初とその次に現れた時もそうだったのだが——その紙片と

同じの判の細長い本で土地台帳みたいなのを小脇に抱えていた。更に穴蔵の天井から一粒の砂か一滴の水のような冷たい物が魔法使いの少年の片手に落ちた。若者が手を挙げて、見ると、それは血だった。若者は思いきって紙と洋筆を取り、血を洋筆に含ませ、J—Oと書き始めた——（彼はヨハネス Johannes という名だったのである）。その時、だれかが早足で穴蔵の階段を下りて来るような気がした。朋輩だな、と思ったが、振り返るわけには行かず、洋筆を落とす、急いで蠟燭を消し、それを水樽に投げ入れ、魔法圈をしつらえた糸を引きちぎり、後ずさり穴蔵から出ると、邪魔しに来た者を見定めようとしたが、だれもいはしなかった。一週間後魔法使いの少年はまたもや穴蔵に入ったが、一番下の段に来た時、言い知れずぞぞつとし、下りきることがどうしてもできず、そこから引き返した。次の金曜日、また地下へ行つて仕事を続けようと思つたが、親方に教会へ行かされた。そのまた次の金曜日には穴蔵で壁工職人が働いていて駄目だった。——しかし若者は四六時中安らく暇がなかった。あの灰色小人が付き纏い、「やいやい」と言い続けて止まなかつたのである。そこで彼はすっかり錯乱し、酔つ払つたようなていたらくで、目は涙で一杯になった。親方は徒弟を厳しく問い詰めたが、若者は何も白状しなかつた。親方が、聖餐拝領の準備をしろ、と繰り返し忠告すると、魔法使いの少年はそのたびに、「聖餐は戴けません。命に関わるんでさ」と答えるのだった。とどのつまり、若者は召喚の書を取つて引き裂き、火に投げ込んで逐電し、ある友だちのところへ発見された。この友だちが若者の主人に事のしだいを打ち明けた。そこで親方は若者の聴罪師に来てもらった。若者はなにもかも懺悔したが、その際ひどい不信心者であることを告白、穴蔵へ行きたくて堪らなかつた、でも、しょっちゅう見張られていて邪魔が入つた、とも言った。その後彼はすっかり改心して聖餐にも与つた。ただし親方は徒弟の残りの年季を免除してやり、奉公の契約を解き、父親を呼び寄せて身柄を引き渡し、厄介払いができたのを喜んだ。なにしろ丸三週間こやつたことで散散気苦勞を重ねた後のこととて。



## 六一一 アウアーバッハの酒蔵におけるファウスト博士

ファウスト博士——げにも夥おびただしい不幸を惹起し、げにも夥おびただしい人間の分別と魂の安息を詐取したかの呪文書の著者と名指される——がヴイッテンベルク(9)に住んでいた折、何人もの家柄の良い大学生——彼らは湯水のように金を浪費した——と知己となり、もろともそこに遊んだが、ある時速い馬車に乗り込み、丁度大市(10)が開かれているライプツィヒへ赴いた。この馬車旅にはほんの数時間しか掛からなかった。(11)翌日一行は市街と大市の雑踏を見物したが、やがて泊まった旅籠屋(12)の向かいに酒蔵があるのに気付いた。葡萄酒運搬人——白上(13)つ張りともいわれる——が四人か五人掛かりで満杯の八桶樽(14)を運び出そうとしていたのだが、結局できないで中止、もっと何人かが来て力を貸してくれるまで待つていたのであった。するとファウストはおちやかすような口ぶりで運搬人らにこう声を掛けた。「そんな樽を相手にどうしてまあそうだらしが無いんだね。あんたらそれほど掛かってたかが樽一つに言うことを聞かせられんのか。全くの話、伎倆(15)さえありゃあ、一人でだつてそれくらいのことではできるつてのに」。この運搬人たちは腕つ節の強い連中で、口も拳固(16)も容赦がなく、ファウストのことは知らなかったから、こうして嘲弄(17)に対して黙つてはいなかった。「わつちらの仕事に旦那(18)がつべこべ(19)嘴(20)入れるこたああんめえ。この樽を一人で担いで階段を持ち上げられるつてほど旦那が学問をしこたま仕込んでんならよう、そのわざつてえのを見せてもらおうじゃあねえか。ありとあらゆる悪魔の名にかけて運び上げてみな」。ファウストがこんな具合に運搬人連の鄭重(21)な挨拶(22)を承つてるところへ、アウアーバッハの酒蔵(23)の亭主がやって来て、事のしだいを耳打ちされ、悪口雑言の理由を知ると、むつとしてこう言った。「あんたらのだれかが、この樽を一人で運び上げられないのはおか

しいって思うほど力持ちの巨人だつちゆうなら、やってごらんせえ。おできになったら、樽を進上しませえ。」  
 そうこうする内更に何人もの大学生が現場に行き合わせて、立ち止まっていた。ファウストは学生たちを呼び寄せ、酒蔵の亭主の言葉の証人になってもらい、酒蔵へ下りると、馬に乗るみたいに樽の上に臂を据え、「進めえ」と言った。——それから、衆人が仰天したことに、樽に跨って階段を上がった。一番仰天したのは亭主で、「こいつあ真つ当なこつちやない」と叫んだが、後悔先に立たず。後でファウストと大学生たちは樽の飲み口を開け、最後の一滴が流れ出るまで酒盛りをやらかしたが、こちらの方はまことに真つ当な所業だった。

## 六一二 ライプツィヒ近傍の女の精の出る川

ライプツィヒ近傍を流れる静かな小さな河川、エルスターとかプライセには女の水の精がいくつも棲んでいて、毎年生贄を要求する。河を渡ったり、水浴びをしたりしない方がよい、と言われるのは特に洗礼者聖ヨハネの祝日である。だれかが溺死するたび、女の水の精たちが河面で踊っているのがしばしば目撃される。ライプツィヒでは町の通りで女の水の精の娘っこに会うことがよくあった。背負い籠を担ぎ、農家の女たちに混じって、食料品を買いに来るのだが、だれとも一言も喋らないのだった。品物を指し、値段を聞くと、値切ってそれより少なくて金を出し、結局手に入れて、立ち去る。挨拶をしても、返礼されない。ある時二人の女がそうした奇妙な娘っこの後ろを歩いていて、娘が小さな水溜まりに背負い籠を置くのを見た。すると電光石火、娘は籠ごと消えたのだ。女の水の精の跡を追うと、点点と道に水が滴っていたものである。なにしろ纏っている服の裾が手幅二つぶりほどぐつしより濡れているからで。——同じ話が至るところで語られている。河川や湖があるほとんどあらゆる場所

で。こんな伝承も一般的である。女の水の精が肉屋の店へやって来て、親指を肉塊の上に置くと、肉屋がそれを切り落とす。その血の痕を辿ると湖畔ないし川辺に達する。さてこの肉屋がこの非道な行為を命で償わなければならぬのは確かである。女の水の精が岸辺に坐つて髪を梳つてゐるのを見て、銃を撃ち掛けたあの粉挽きの小僧のように。女の水の精は急いで川の中に身を躍らせ、憤然と指を振って脅かした。三日後小僧は水浴びをして行方不明になった。ライプツィヒの近くのローゼン谷の奥深く、草原に縁取られ、森のざわめくエルスターとプライセの岸辺を遡ると、大層神秘的で不気味な静けさに満ちているので、旅人はなんとも知れずぞくぞくする。ひそやかな流れの中から女の水の精が姿を現すのを見掛けても、不思議には思ふまい。

### 六一三 アイレンブルク伯と小人たち

ザクセン地方のアイレンブルク——現在はプロイセン領——では城の下に小人たちが棲んでいた。彼らは婚礼の祝宴を催すことになり、老伯爵が高い天蓋付き寝台で眠っている広間でそれをやろうとした。そこで鍵穴、扉の裂け目、窓の隙間などからボンボンバラバラ跳び込み、その音といったら脱穀場に豌豆が振り撒かれるようだったので、伯爵は目を覚ました。すると伝令官のような身なりをした小人が歩み寄り、極めて鄭重に、祝宴を挙げることをお許しくださいますよう、またこれにご臨席くださいますよう、しかしながらご家来衆その他どなたにせよ覗き見なさつてはなりません、と頼んだ。これはかの小都市ロイエンブルクのプラッセン城でア、「傍点訳者」イレンブルク男爵がちび指族(「の王」)への「息女の」嫁入りの際に要請されたのと同じ条件である(DSB二七三)。伯爵は、目を覚ましてしまったのだから、お付き合ひいたそう、と承諾した。となると小人たちは伯爵の許にとても

ちっばけな踊り相手を連れて来たので、伯爵は舞踏の際相手を見失わないよう苦労した。舞踏は蟋蟀楽団の澄んだ高らかな演奏で始まった。ちいちゃな娘つこの踊りぶりはなんとも敏捷で、老殿様の周りをぐるぐる旋回したので、こちらは息が止まりそう、かつ、胸はどきどき。羽根のように軽かったからしつかり掴まえておかねばならなかった。——しかし突然音楽は途切れ、舞踏は止み、大混乱とあいなった。だれもかれも怯えて広間の天井を見上げたり、隙間という隙間から逃げ出したり。天井には穴が一つ開いていて、そこから老伯爵夫人——上の広間で寝ていたのである——が浮かれ大一座を見下ろしていたわけ。この窃視に小人たちはいたく憤慨、その場に留まっていた連中のいわく。

大工を呼びにやろうじゃないか。

踊り場の穴を塞がせなくちゃ。

踊り場の床にや穴がある。

そして一人の小人がふうつと上へ向かって息を吹き掛けた。さて例の小人は伯爵に身を屈め、礼を述べてからこう言った。「天井にござるあの老耄れのせいので我らが華燭の典の飲びにも我らが舞踏にも飛んだ邪魔が入り申した。されば殿のご一門が一度に七人以上になることは決してござりませぬぞ」。——それからそれまで居合わせた者たちもさっと消え失せ、大広間はしんと静まりかえり、伯爵は独りぼつねんと取り残された。翌朝伯爵夫人が起きると、昨夜下を覗き見した方の目に膜が懸かっていた。以来アイレンブルク伯爵家で七人目の男子が誕生すると、存命している六人のだれかが死ぬのだった。

ゲートルがその祝婚歌——「我らは非にかの伯爵の事どもを歌いかつ語らん」——の下敷きに部分的にもせよこの伝承を用いたのは疑いない。この伝説の変化形で、東プロイセンのロイエンプルク——現在は村、かつては小都市——でオイレンプルクEulenburg——この名はロイエンプルクLeuenburgの綴りの中に字母を置換して含まれている——一門のある御仁が、ザクセン地方の老アイレンブルク伯——この一門の名はかつてオイレンプルクとも書かれた——と同様の運命に見舞われる話があるのは奇妙である。

## 六一四 オーシャツツという名

ライプツイヒとドレーズデンの間にある小都市オーシャツツ(22)についてはこんな言い伝えがある。いわく。町が建設されたもののまだ名無しだった時、ザクセン邦の支配者はこの町が大層お気に召し、お妃と共に近くのカルヴァリ山山頂ベルクに立ち、そこから町を遠望し、お妃に、命名するよう、との御意を伝えた。奥方は困って目を伏せ、さうなことはできません、と答えようとし、おすおすと「おお、あなた……」と言ひ掛けた。すると君侯たる背の君は妻の言葉を遮り、「奥や、相分かった」と叫んだのだ、と。そういうわけでこの町は以後オーシャツツと呼ばれるようになり、今日に至るまで変わることなくオーシャツツという名なのである。

## 六一五 ルツカの会戦

テューリンゲン方伯ラントグラフにしてマイセン辺境伯マルククラウである、頬ほほに嚙かまれ傷のある、また楽デア天家とも添え名されたフリード

リヒが、〔ドイツ〕王アードルフ・フォン・ナツサウ——方伯の父、ろくでなしのアルブレヒトが二東三文でテューリングン邦を売り渡した相手——と戦った折、フリードリヒは、弟である善良な辺境伯ディーツマン——同年中にライプツィヒで暗殺され、フリードリヒをいたく悲しませた——と同盟、闘い取ればの話だが、兄弟共にマイセン邦とプライセン邦の支配者たらんとした。というのはこれらの領邦もアードルフがシユヴァーベンから駈り催した幾つかの部隊で占領していたからである。フリードリヒは果敢にも一軍を糾合、強行軍でザクセンに向かい、プライセ川流域はルッカとグロイツチュの曠野なるライプツィヒとアルテンブルクの間で敵に挑んだ。配下の軍兵に大将がそれとはつきり分かるよう、磨き上げた胄の上に、マイセン邦、プライセン邦およびテューリングン邦を表す三つの胄飾りを付けた。これらは今日なおどの紋鑑にあっても三領邦の紋章胄の上に描かれている。プライセン邦は芸香葉飾りのある斜め中帯に添えて孔雀の尾を飾った高い帽子、テューリングン邦は緑の和蘭紫雲英をあしらった白銀の角笛、マイセン邦は赤白縞の帽子と衣装を着けぬっと突っ立っている男——俗称ユダヤ人頭。フリードリヒはこれら三つの胄飾りを自分の一つ胄の上にしつかと結び付け、加えてこんな言葉を口にしたという。

今日我の戴くは

マイセン、テューリングン、プライセン。

なべて祖先の授かりし邦ぞ。

神よ、我が征旅にご加護を授けたまえ。

そして神はご加護を授けたもうた。シユヴァーベン兵は撃破され、逃げられる限りどこまでも落ち延びた。この連

中、戦の始まらぬ内は大言壮語していたので、彼らを笑い種くまにしてこんなからかい文句ができた。だれかが、どうもうまく行きそうもないのにそれをやってみせる、と言った場合——。

まあさ、おまえは首尾良くできるぞ。

ルツケ（「ルツカ」）のシユヴァーベン人みたよにな。

## 六一六 メランヒトン梨な

ライプツイヒとグロイツチュの間にあるペガウの教区監督館庭園には梨の樹が一本あり、その果実ときたらなんとも一種独特な風味を持ち、メランヒトン梨なと呼ばれている。その由来を同市の教区監督バイスレインシュテットを務めた（メランヒトンの）同時代人M・アンドレーアス・ゲヒ（32）が真情籠めて書き残している。この梨の品種は元来ライプツイヒとメルゼブルクの間（33）に位置するツェッセン（ツェッシェン）——M・ゲヒはもともとこの牧師だった——地生えのもので、そこではレーヴォッツ（レーヴィッツ）梨で通っていた。熱心な果樹栽培家でもあったゲヒ師は後にペガウの教区監督になったわけだが、ペガウでもこの梨を育てようと、接つぎ枝を運ばせたもの。とりわけ素晴らしい品種のこの梨は片側には紅色の、片側には黄色の斑点が散っており、瑞瑞ハインリッヒしく、とびきり美味で、プファルツ女伯梨に似ている。ある時フィリップス・メランヒトン殿がザクセン選帝侯アウグスト（34）から、ご来駕ライを乞う、と要請された折、ツェッセン経由で道中し、この町の牧師殿の客となつて一息ついた。牧師殿はこの訪問を大層ありがたがり、名士のおもてなしに逸品の梨も供した。フィリップスはこの梨に殊の外感じ入ったので、ほぼ一シヨック（35）贈呈され

た。そこで彼はこれを選帝侯および侯妃へのお土産としたのだが、たまたまブランデンブルク選帝侯も侯夫妻を訪ねて来て賓客となっていた。これを好機に、メランヒトンがやんごとなきご主君に仕事熱心なツェッセンの牧師殿をご推輓すいあん申し上げると、この推輓は殊の外うまく行き、「ザクセン」選帝侯は牧師殿に優渥ゆうおくなる恩寵を垂れたもうたばかりか、その子どもたちをも君侯立学校フュルステンシューレ<sup>(36)</sup>に給費生として入学させてやった。M・ゲヒはこのことを感謝してある本に記し、自分の後継者に対し、家のすぐ傍に立っているメランヒトン梨の樹——なにしろこの果樹栽培家は一五六〇年この樹をそう名付けたのである——をいたわり、育はぐみ、この品種を絶やさないように、と頼んでいる。これはその後忠実に守られた。

## 六一七 二匹の墓蛙むかまゐる

ルッカとマイセンの間にある小さな都市ライスニヒ(37)——小さいながら、マイセン邦の脂穴シニツツクルーベ<sup>(38)</sup>との名があつた——の市教会の傍らに、男の子二人を向こうに回し、両手を脇腹に当てて肘ひじを張っているように見える男の石像が長いことあつた。これにはこんな伝説がある。男はできそこないの倅せがれを二人持った父親だつた。そうして男は、倅どもがろくでもないことをやらかして手に負えなくなるたび、それ相応にけじめを喰くらわせてやればよかつたのだが、そうしなかつた。それ、諺ことわざに申す通り、「子どもに咎とがを惜おぼしまぬ人は、神のお手数省おぼきます」。さてこそ、こんなしまつになつた。ある日のこと、男の子兩人がまたしても悪事を働いたので、父親が叱りつけると、子どもらは罵ののり返し、犬さながらにぎゃんぎゃん吠はえ立てた。その上それで止めはせず、いやもう、あろうことかあるまいことか、父親の顔に唾つばを吐き掛けるという見下げ果てた所業に及んだ。そこで老父は天にまします神に、こんな非道の





が少年の体を走ったかと思うと、全身が硬直、立ちっぱなしで動けなくなった。今度は言われた通りにしようとしたのだが、びくりともできない。父親は息子に跳び付いてそこからもぎ放すか歩かせようとしたが、どうにもならなかった。少年は立ったまま、床板にびったり呪縛されて全く無力だった。人人は彼を持ち上げよう、運び去ろう、と試みたがいずれも徒勞で、少年の足は床に根を生やしてしまった。こうして彼は三年もの間、一つ場所——<sup>だんろ</sup>煖炉と扉の近くに立ち尽くし、部屋に出入りする者の邪魔になった。置いてもらった斜面机で頭と両手を支えることができたが、眠るのも立ち眠りで、これを見るのは両親には苦しみの種、町の衆には驚きの種だった。聖職者たちが彼の救済を求めて祈りを捧げ、遂に総力を挙げて体を持ち上げ、さほど邪魔にならない部屋の別の隅に移そうとした。これには成功したが、それから少年はそこに立ち続けた。床板には足跡が深く刻み込まれた。他の場所に運ぼうとすると、痛がって大きな叫びを挙げ、狂ったように暴れるのだった。こうしてこの己が不従順の償い人は、<sup>カマシ</sup>帳に隠され、憂愁に閉ざされ、顔は悲哀に満ち満ちて、インドの苦行者よろしく立ち通し、とうとう神がその傍らに設えられた寝台に横たわるのを許したもうまでまたまた四年の歲月が必要だった。この時彼は慎ましやかにへりくだり、恭謙溫和に自然死を遂げたのである。その足跡は長いこと煖房部屋とその隣の小部屋（後で壁で仕切られたのだ）に見られ、言うことを聞かないとどうなるか、両親が子どもたちを戒めたければ、近場で事足りた。

## 六一九 シュネーベルクの悪魔召喚者

悪魔召喚や宝探しが疫病さながらに蔓延<sup>まんえん</sup>、あのイエナの降誕祭<sup>ククリストナハト・トゥンゲルディエ</sup>の夜の悲劇が演じられた時代のこと、ザクセン領エルツ山地縁辺<sup>ゼリルン</sup>の町シュネーベルク<sup>シュ</sup>に有象無象が相集い、精霊を呼び出し、その助けを借りて宝物を見つけよう

とした。張本人は通称農夫バウアーシユヌルなる男。こやつが幾人かの仲間を語らつたのである。麦芽貯蔵庫の広い屋根裏で大仕事が始まつた。外縁三十四肘尺エーレにも及ぶ三重の環わが白墨で引かれ、環の内部に十字、聖句、諸惑星の徴しち、符号が幾つも描かれた。環の真ん中には血を振り撒かれた白布で覆われた卓子ダイプルが据えられ、その上には磔刑像が一つ、〔旧約〕聖書、詩篇、福音書が載つていた。卓子の下には石炭と薫香の入った香炉が一つ。環の入口として九肘尺エーレの開口部が一箇所あつたが、これは四福音史家ならびに使徒たちの肖像画と〔旧約〕聖書一冊で閉ざされていた。その外側には一脚の木製長椅子が据えられた。これは精霊の頭分かしぶんが腰を下ろせるようにという礼儀上の計らひだつた。思慮分別ある精霊が現れると考へたのである。更にまたある子ども——この子はしばらく前に行方不明になつたのだ——の頭蓋骨ずがいこつもあつた。精霊召喚儀式が始まつたが、まことに恐ろしい限り、その伎倆わざは壮大で、妖術使いの呼び出しは完璧かんぺいだつた——しかしながら、何も来なかつた。魔降ろしの呪文はますますもの凄まじくなり、麦芽貯蔵庫屋根裏の梁はりも屋根もびりびり震えんばかり。とうとう得体の知れぬものが出現しようという気配があつた。何かが階段をがたがた登つて来た。幾つもの大刀や拍車バシユルがちやがちや当たるかのごとき音。精霊のこうした接近ぶりは主役の魔法使いにして精霊召喚者たる農夫シユヌルにはどうも好ましくはなかつたらしい。この御仁、屋根の隙間から抜け出し、家家の屋根伝いに猫のごとく逃げ去つた。次なる者も同じ径路でこれに続いた。残りの面々はもつと沈着冷静を決め込み、その場を動かすにいたが——階段を登つて来たためだき町シユネーベルクの誉れ高き警察という〔僕の精霊ならぬ〕公僕らにすぐさま絡め取られ、拘禁された。一人はアイゼナハの技工で、その技術はシユネーベルクの麦芽貯蔵庫屋根裏で行き止まりとあいなり、いま一人はヴェルデンフェルスの粉挽こなひきで、その碾ひき臼うすはどうやら水から穀物、それから麵麩パシへという三つの行程を終了しようだし、三人目の鍛冶職人かじは、己おのが幸運の鍛冶屋(46)にならうと志し、熱い内に鉄を打とうとしたのだが、今や冷たい鉄に繋がれたらしい。なお

うまうま逃げ果せた男はハンス・ティーツエなる名で、ザンガーハウゼンの者だった。土地柄すつ跳び伯ルートヴィヒの話をよく心得ていたわけである。かくしてイエナの降誕祭の夜の悲劇と対を成すシュネーベルクのこの事件は一場の悲喜劇として幕を降ろした。

## 六二〇 妖精縁無し帽子小人

フライベルク近郊にちよつとした雑木林があり、いけすの藪で通っている。その昔ここに縁無し帽子小人——この名はかの名高い家精帽子小人を思い起こさせる——と呼ばれる悪戯妖精が棲んでいた。この妖精縁無し帽子小人は魔物おんぶ小人の仲間である。おんぶ小人は旅人とか森に生業を営む人たちにおぶさり、相手が疲労困憊、息も絶え絶えになつてくずおれるまで遠道を運ばせた。背中に乗られた者がもうこやつを運ばなくなると、突然びよりと跳び下り、手近の木にするする登り、からからと哄笑を投げ掛けるのだった。妖精縁無し帽子小人はとりわけ一五七三年にこうした悪洒落を繰り返し、おぶさられた人人がたくさん病氣になつた。縁無し帽子小人はあらゆる点でワーンスラントのオッシュャルト(DSB一四九)に似ており、姿を見せようという氣になつた折には、なんとも奇妙奇天烈な響めつ面をしてのけた。ある牛酪売りの女だがいけすの藪で素晴らしい乾酪の塊を見つけ、拾い物にほくほく、これがどれくらい值钱になるか皮算用し、背負い籠に入れた。すると籠がひどく重くなつた。重荷に潰されてへたへたと膝を突いた彼女が籠を抛り出すと、籠から石臼が藪の中へごろごろと転げ込んだ。そして藪から縁無し帽子小人がげらげら笑いながら顔を覗かせた。そういうしだいだからからげらげら大笑いする者のことを「悪戯妖精のように笑う」と言う。また縁無し小帽子はこの妖精を見えなくする隠れ頭巾の名称でもある。妖精

がこれを脱ぐと、姿が現れるが、しばしば、また突然これを被れば、瞬時にして消え失せるのだった。そこでこんな言い回しができた。だれかが何かを探していて、ある場所に見えたと確信したのに、やっぱり見つからなくなつた場合、こう言う。「ははん、ここにあることはあるんだが、縁無し小帽子を被つてるんだな」。縁無し小帽子とは、つまり、小人の姿を隠すちいちゃい隠れ頭巾のことである。

## 六二一 神の審判

スラヴ人の使徒と謳われた聖ベンノ——マイセン近傍の聖者の谷で蛙どもが鳴かないようにした例しがある——は神の僕であり、四十年に亘りマイセン司教職を務め、大いなる奇蹟を行つた。支配者たるマイセン辺境伯オットーは教会の所領を接収した。地上の富は教会のものではない、教会には天上の富で満足してもらおう、と考えたからである。聖ベンノは辺境伯に向かいにこやかに、かようなご所業は罪でございます、召し上げられたものを教会にお返しになるべきです、さもないとあらゆる不正をみそなわし、報復なさるか公正な審判者を恐れる羽目になります、と説いた。こう意見されて辺境伯オットーはめっぽう機嫌を損ね、手を挙げて司教の頬に猛烈な横びんたを喰らわせた。すると聖ベンノは「神はこの打擲の報復を一年後の今日そなたになさるであらうぞ、辺境伯」と叫んだ。——けれども辺境伯は笑い飛ばしてこう嘲つた。「してみるとおぬし、どうやら、主なる神の相談役で天国の国事尚書とでもいう格らしいな」。司教は沈黙し、気色を害し、その日から悪い始め、その後間もなく敬虔に祈禱を捧げながら亡くなり、聖人として尊崇され、哀悼された。この歳一〇六年が移り行き、例の日が再び巡つて来たが、辺境伯はびんしゃんしており、何も悪い徴候はなかつた。そこでこの日がほとんど過ぎ去つた

時、伯は司教とその威嚇の予言を想い出していわく「はて、ベンノの予言はどこへ行つたのやら。あの予言は壺の中へ落ちたのだ<sup>(55)</sup>」。辺境伯がこう言った途端、急激な死の手がぐいと彼の骨髓を掴んだので、突然ぼったり倒れ、「助けてくれい、助けてくれい」と叫ぶばかりとなった。けれど助ける者も助かる道もなく、全能の死の手が伯を神の審判へと拉致し去つたのである。

## 六二二 修道士の口癖

マイセンの聖アフラ修道院にいたある修道士だが、この御仁、並外れた女嫌いで——かのシユヴァルトブルク伯(DSB五九〇)のように——厭わしい口癖が慣わしとなつていた。女兒に洗礼を施さねばならないか、女兒に洗礼を授けるため教会に連れて行く洗礼行列に行き合つたりするたび、「洗礼済んだら、溺らせちまえ」と口ずさむのだった。こうした不条理な嫌悪とこうした憎まれ口はかなり高齢になるまで変わらなかった。ある日マイセンのエルベ橋——木製に過ぎなかったが、当時はドイツ全土で最も工匠の伎倆を尽くしたものと讃えられていた——を渡っていると、大勢の随行者と傍を押し合いへし合いして来る物見高い連中を従えた洗礼行列にまたしてもぶつかった。修道士は脇に身を避け、橋の欄干に凭れて呟いた。「また女か。へん、洗礼済んだら、溺らせちまえ。それがなによりなのじゃがなあ」。この時欄干が壊れ、修道士は真つ逆さまに流れに落ち、無様に溺れ死んだ。一五〇五年のことである。その後修道士は——ドレーステンの修道士と同様——長いことエルベ橋に幽霊となつて出没する羽目になった。

六二三 真珠の莢まゆ

上オペーエルツ山地ゲルンにあるノイシュタット・ヴィーゼンタール(72)である時大いなる死(「黒死病」)(73)が流行はやった。その頃この小さな山の町にミヒエル・ローデルフアーというボヘミア地方はルーティツ出身の亡命者(74)が住んでいた。彼は、三十年戦争が勃発した折、宗教上の理由で妻と七人の子どもを連れてザクセン邦へ逃れて来たのである。男には七歳になる女の子がいたが、この子は壊された古い穴蔵の塵芥ごみの山で甘藍カプザイトの種(75)(カプスは甘藍キャベツ)のくつついている莖を拾い集め、父親の菜園の土に播まいた。種はここでちゃんと根付き、花が咲き、熟(76)した。小さい莢が熟すと、子どもはそれを摘み取って叩いた。すると銀色に輝くちいぢやな粒が出て来た。子どもはこれを集めて父親のところを持って行き、こう言った。「見て、父ちゃん、あたしが見つけたもの。父ちゃん、きれいなおねんず(「念珠」)(77)。父親が見ると、これらが本物の真珠だったので、びっくり仰天した。自分でも調べると、どの莢にも幾粒かの真珠が入っていた。子どもと一緒に集めたら、小さな乾酪鉢チーズ鉢一杯になった。ローデルフアーに真珠を見せられた人人は皆目を瞠みり、本物だと認めた。とりわけやはりボヘミアから亡命、ヴィーゼンタールに滞在していた何人もの貴族たちが。ハウエンシュタイン伯爵夫人などはわざわざアンナベルク(78)から馬車でやって来て、ローデルフアーの家に立ち寄り、女の子に幾つかの莢を開けてもらい、これまた、本物の真珠であることを認めた。夫人も自ら莢を開いたところ、これ以前に試みた他の者たちの場合と同様、真珠が露の滴つゆながらころころ指の間に転げ出た。「なんとまあ」と伯爵夫人いわく。「これはこの至福の子が授かった素晴らしい天分、素晴らしい恩寵です。わたくし、お父さんさえよろしければ、この子を引き取らせていただきたいわ」。別のさるボヘミア貴族も父

親を七人の子どもらともども招いて、この奇蹟<sup>まげ</sup>を目の当たりにし、子どもらの服を新調してやった。真珠を見つけたこの女性は七十四歳になってもまだこの話を物語った。

## 六二四 山の贈り物

エルツ山地<sup>ゲレヒツ</sup>のアンナベルク近傍にシュレットケン山<sup>ベルク</sup>がある。その銀生産量が豊富だったのでまず同地で美しい貨幣が鑄造された。これはシュレットケンベルガーと呼ばれ、価値は三グロッツエン半ないしマイセン鑄造グルデン銀貨の六分の一に相当した。片面にはザクセンの紋章<sup>(紋)</sup>を持つ天使<sup>エンジェル</sup>が刻まれているので、天使グロッツエンともいう。この山はまたその胎内<sup>す</sup>に棲まう山の精たちと森林に出没する妖怪どもによっても名高い。アンナベルク近傍にはシャイベン山<sup>ベルク</sup>と同名の村がある。山上はやはり不気味な気配で、これまで数多くの不可思議なことが起こった。一六〇五年シャイベンベルク村にM・ラウレンティウス・シュヴァーベなる牧師がいたが、その妻の許<sup>もと</sup>にアンナベルクの女友たちが何人かやって来た。そこで牧師夫人はこの嬉しいお客様たちをシャイベン山の山頂やら周辺やらを案内し、山の竹<sup>たけ</sup>まいとそこからの景色を見せようとした。一行は道端に泉のような窪み<sup>くぼ</sup>を見つけた。段段が三つ付いていて、穴の底には黄金<sup>きん</sup>のようにピカピカキラキラ明るく輝く何かの塊があった。ご婦人連は訝<sup>いぶ</sup>しがり、またいくらかは怖がりもし、それに何かを投げてみようという勇氣も出なかった。で、急いでシュヴァアーベ師のところに戻り、見たものの話をし、穴を見つけた森の中へ連れ立って引き返したが、いくら探しても、あの窪みを見つめることはできなかった。

シャイベンベルク村の若い恋人同士がある婚礼に招待されたが、ひどく貧乏で、慣わしとなっているご祝儀を新



郎新婦に贈ることができなかつた。そこで結婚式には行かないつもりにしていた。二人がシャイベン山に出掛けたところ、偶然、柏製の扉の付いた縦坑を見掛けた。底まで数段の階段が下っていた。彼らはこんな坑道をこれまで見たことがなかつたので、階段を下り、中を覗いた。一番下の段には狐が一匹横たわっていたのにどつきりしたけれども、狐が身動きしなかつたので、若者は一蹴りしてみた。すると狐は死んでいることが分かつたが、死んでからまだそう経つてはいなかつた。「いやあ」と若者。「狐が死ねば、皮残す」。で、これを担いで家に戻り、皮を剥いでお金に換え、愛しいひとと一緒に婚禮に出席、そこで楽しい時を過ごした。若者はその後縦坑の入口を再び探し出そうとしたが、どんなに努力しても叶わなかつた。

## 六二五 親方ヘンマーリング

多くの採鉱場には山の精が現れる。修道士の恰好だつたり鉱夫姿だつたりだが、大抵は巨大な身の丈で、目は皿のように大きく、燃えるようである。人間を助けてくれることがしばしばで、実直な鉱夫に好意を持ち、守護してくれる一方、悪い連中は虐げ、処罰する。罵詈雑言を憎み、これにはこの上もない罰を与える。こうした山の精を鉱夫らは親方ヘンマーリング、あるいは修道士の恰好で出て来るところでは山の修道士と呼ぶ。常に単独で出現し、山小人、地中の山の精——小人族に属し、しばしば集団で現れる。他方伝説に登場する巨人は普通一人、せいぜい二人である——と取り違えられることは決してない。シュネーベルクの聖ゲオルク坑にはかつて黒衣の修道士の姿をした精が現れ、深い縦坑の中で不作法な振る舞いをした鉱夫に襲い掛かり、体を持ち上げ、昔は銀がどつきり採れた鉱坑にしたたかに落としたので、臀当て革が弾け飛び、肋骨が悉く折れてしまった。

アンナベルクには数珠ロゼンクラウツという名の坑道があつた。ここで十二人の鉱夫が働いていたが、彼らはお互い同士ふざけたお喋りをし散らしたあげく、相手を例の山の精で怖がらせようとし、とうとうこれを、あんなのはあほらしい案山子かかしみたいな代物さ、と否定した。すると面前に頸の長い、額に火のような目玉を付けた馬が出現、一同を死ぬほど驚愕きょうがくさせた。次いで馬は本来の山の修道士ベルク・メンヒに変わり、黙ったまま鉱夫たちに近寄り、一人一人にふつと息を吹き掛けた。しかしこの息は坑内に発生する有毒瓦斯ガスのようなもので、鉱夫たちは精の息吹いぶきに当たってばたばた斃たおれた。ただ一人がやがて意識を取り戻し、やつとこのことで出口に辿り着き、事のしだいを話してから、これもやはり死んだ。それから銀の富鉱リッチだったローゼンクランツは廃坑となり、もはや掘削されることはなかった。

## 六二六 エルツ山地の荒れ狂う同勢

シュレットケン山ベルク、シャイベン山ベルクの頂きや、エルツ山地ゲゼルツの尾根へ向かつては、やはり荒れ狂う狩りが行われ、ほっほいの掛け声、角笛の吹鳴、猟犬どもの吠え声とともに中空なかぞらと山峽やまがけを駈かり立てて行く。ある宵の口のこと、年老いた司祭牧師が馬車でヴァーゼンタールからアンナベルクへ赴むかこうとした。小さなヴァイパートの町まで道はザクセンとボヘミアの邦境くわんがけにびったり沿って森また森の中を通っていた。お坊さんの旅は宵もまだごく早い内だった。すると森の奥でピシリパシリ、どうどうざわざわと狩猟の大音響が挙がった——それなのに勢子せこも猟師も姿を現わさないのである。これまで聴いた例たしのないこうした物音に怯おびえた司祭は、あの騒ぎはいつたい何であろう、と馭者ぎよしやに訊ねた。すると馭者は「ご心配なさることはございませんですよ、神父様。ありやあ荒れ狂う同勢ダス・ウニエチン・ヘルトでして。神の御名なの下に旅をしてるあつしたちはそつとしいてくれます」と答え、しつかり馬車を進めた。

ハンマーグート・デルセルの莊園主、ルードルフ・フォン・シュヴェーアツィンゲなるお家柄の郷士がある日の夕刻アンナベルクで——クロイツブルクのトレフフルト近くでのヘラーシュタイン騎士ヘルマンみたいに——かなり酒を聞こし召した。そしてご同様、ご機嫌でただ一人家路を目指した。ブーフホルツを左手、デルセルを右手に、シュレッタウを通つて駒を進め、下シヤイベンベルク管轄区を抜けシヤイベンベルクの水車小屋への道を取ろうと思つた。するとフィヒテル山へと連なる高みの上で角笛の吹鳴と獵犬の吠え声という狩獵の物音がするのを耳にし、これを長いこと追っている内、とうとうすっかり迷つてしまい、乗馬が湿地に嵌まり込んだ。やつとこさつとこ身一つでもがき出るのに成功、分農場に辿り着き、人手を駈り催して、綱や棹で馬を泥沼から引つ張り出した。

ヴィーレナウエン山の麓で馬一頭を使つて畑を耕していたある男のところに突然馬具を着けた見知らぬ白馬が走つて来て、もう一頭の馬と自分から一連となつ「て犁を牽いた。そこで野良仕事はおそろしく速く歩つたが、農夫はなんだか悪い予感がしてならず、どうしたものやら途方に暮れた。正午になつたので、馬たちを犁から外そうとしたところ、見知らぬ馬は牽き具に繋がれたまま農夫の馬をむりやり道連れにして逸走、近くの沼へと駈けて行つた。仰天した農夫も一緒に走り、怒鳴つたり祈つたりした。結局例の馬は牽き具から体を挽ぎ離し、沼地に跳び込んだ。農夫は自分の馬を捉えたものの——いやもう驚いたのなんのつて。

## 六二七 十字架と聖杯

アンナベルクの下手、チョパウのせせらぎの畔に小都市ヴォルケンシュタインがある。そして高い巖上から同名の城がこの町を見下ろしている。さすらいの旅人はこの険しい巖壁に大きな十字架と聖杯が深く刻まれているのを

目にする。これには次のような言い伝えがある。いわく。一四二六年アウスイヒ近郊でのフス派との会戦——ザクセン軍にとつてこれは壊滅的だった——が行われたあの時代、敵勢はザクセン邦に闖入、エルツ山地にも侵攻して地域を荒廃させた。この時フス派は小都市ヴォルケンシュタインをも包囲して奪取、それから城に攻撃をしかけた。城では一人の司祭が雄雄しく防禦するよう守備隊を鼓舞した。司祭は片手に剣の代わりに十字架を持ち、昔ながらの信仰のため言葉の剣で戦った。遂に城塞が占拠され、勇敢な司祭が敵に捕らえられると、フス派の頭領は、聖杯の兄弟たちの仲間になって命を全うするよう迫った。しかし司祭は毅然として、昔ながらの信仰のために生き、かつ死ぬ、と答えた。後者、すなわち死はただちに彼に与えられた。敵勢は司祭を十字架もろともヴォルケンシュタインの垂直な巖壁から突き落としてこの敬虔な人の五体を激しい衝撃で碎き、それから歓呼しながら城壁越しに聖杯を描いた方旗を翻した。やがてフス派がこの地域から立ち去った後、信心深い者たちが殉教者の記念に十字架と聖杯を巖に刻んだのだ、と。

## 六二八 旗手の跳躍

エルベ川左岸、マイセンを見晴るかす眺めの好い山上にシャルフェンベルク城の廃墟がある。築城を始めたのは皇帝ハインリヒ一世で、皇帝オットー一世がこれを完成した由。城はその後次々と幾つかの著名な騎士一門の封地となった。フィッツトゥーム・フォン・エックシュテット、フォン・シュライニッツ、フォン・ミリティッツなどである。ミリティッツ家の一員ハウボルトは三十年戦争後間もなく城を全く新しく造営した。けれども一七八三年八月落雷により火災が起き、炎上して廃墟と化した。三十年戦争中城には守備兵が置かれていたが、敵の奇襲があ

り、弱小な城側部隊を制圧した。軍旗を掴んだ旗手は一步一步防ぎつつ闘いながら後退——仲間が次次に斃れた。しっかと軍旗を護持した旗手は遂にたった独りとなり、激しく挑み掛かる敵に囲まれた。「おれが生きている限り、この旗はおまえらに渡さぬぞ」と彼は叫んだ。戦闘が上階の一部屋まで移り、危険が頂点に達した時、一陣の突風が部屋——ここまで来ると旗手は防ぐのももうやつとだった——の観音開きの鎧戸を押し開けた。旗手はこれを天のお告げと受け取り、旗を結びつけた槍の一撃で二人の敵を突き伏せるなり、ぱつと身を翻し、旗を外へ抛つやいなや、神に身を委ね、窓を背にして深い崖下へと跳躍した。すると奇蹟的に旗ともども無疵で下に着いた。後に広まった伝承では、シャルフェンベルク城正面にある紋章旗を捧げる騎士の像こそこの雄雄しい戦士のもので、その勳を永遠に記念しているのだ、ということになった。

## 六二九 ハンス・ヤーゲントイフェル

ドレースデンでのことだが、一六四四年十月十三日の日曜日、ある女が娘ともども森に行き、昼の十一時まで柏の実を拾った。説教を告げる鐘の音が聞こえたので、既に結婚していた娘は母親と別れて町へ帰って行った。激しい雨になった。十五分後母親はラーテベルク街道の左手、水無し川と呼ばれる場所の近くの森の隅にいた。すると狩りの角笛の吹鳴が高らかに響き、次いでどつと木が倒れるような音がした。そこで女は、森番が来たのではないか、と思い、柏の実を詰めた袋を繁みに隠した。それからもう一度角笛の響きが聞こえ、その直後葦毛の馬に乗った頭を持たぬ獵人が姿を現した。獵銃、鹿獵刀、狩獵喇叭といった諸道具を携え、灰色の長上着を纏い、長靴を履き、拍車を着けている。初めはいくらか速歩で進んでいたが、やがてゆっくりとなり、ひそやかに通

り過ぎて行つた。そこで女はかなり遠くまで見送ることができた。そのあと女は柏の実探しを続け、午後になつてやつと家へ歸つた。九日後この女は独りで森に出掛け、また柏の実を集め、ラーデベルク街道の右手、フュルステン山麓の繁みの中に腰を下ろし、林檎の皮を剥き始めた。すると背後でだれかがこう言うのが聞こえた。「おまえ、袋は一杯なのか。没収されなかつたのか。森番たちは人が好いようだな」。彼女は「森番さんがたは信心深いお人らで、あたしにや何もしやしません。ああ、神様、あたしみたいな罪人にもお慈悲を垂れたまえ」と答えて、見上げると、この前と同じ男が傍に居るのが目に入った。もつとも今度は馬はいなかつた。男は茶っぽい縮れ毛の頭を小脇に抱えており、こう言つた。「罪人の赦しを乞うたのは結構なことだ——わしはさようにまいらなうが。森番たちも結構なことだ。貧乏人にあまり辛く当たらんとあらばな。そのせいでわしは百三十一年間というもの呪われて来た。わしの父、おお、わしが父の跡継ぎだつたとはなあ、わしの父はわしと同じくハンス・ヤーгентイフェルというた。わしは父の一人息子だ。わしら兩人はこの森番だつた。人人に告げてくれい。悔い改めよ、と。神はドレースデンに大いなる罰を下したもうぞ——やがて新規に軍勢が二つ襲つて来る。して一つは既に近づいておるのだ。神は墓掘り人が間に合はぬほどの大いなる死（「黒死病」）もて脅したもうである。悪行を止めよう人人に言うがよい。さすれば神は来年あらゆる種類の果物の豊作をお恵みくださるであらう。こう聞かされて仰天した女は口も利けず、震えるばかりだつたが、「告げるつもりがあるのか」と男に念を押され、「も、申します」とどもりどもり答えた。「それなら「約束の徴として」わしの手を握れ」。そこで女が仕方なくそうすると、男の手は雪のように冷たかつた。女はひどくぞつとびくつと手を引つ込めた。しかし男はまたしてもこう言つた。「怖がることはない。おまえ、どうやらわしの手が冷たいと感じたな。ところがわしにはこの手は永久に果てることなく灼けるように熱いのだ。——わしはだれをも苛むことはない。おお、わしは自分自身に苛まれているの

だ」。そう洩らすやいなや、安息を得られない亡霊ハンス・ヤーゲントイフェルは消え失せた。女は体験したこの出来事を確かに町の衆に告げたが、彼らはろくすっぽ改心などせず、やりたい放題に振る舞い、自身ヤーゲントイフェルのままだった。

### 六三〇 ドレースデンの修道士

その昔ドレースデンに跣足修道士(80)の修道院があった。これはマイセン辺境伯(マルクグラーフ)ハインリヒ高貴伯が居城の隣に建立したもので、その頃この派の修道士たちは木靴ないし「革」涼鞋(ザレンク)を履いていたため、パタパタ修道院(ロスタク)との名もあつた。修道院は城と「地下」通路で結ばれており、今日タツシエンベルクと呼ばれている地域の傍に立っていた。時が経ち、修道院が「宗教改革の結果」廃止されても、まだ跣足修道士が一人残っていて、灰色の僧衣を纏(まと)い、片手に角灯(ランタン)を携えてあちこちに出没した。小脇に何か抱えていたが、この何かは修道士の頭だった。なぜ、またいかなることがあつて、この修道士があるべき場所から自分の頭を失ったのか、もはやだれも知らない。とにかくこの御仁はこんな風に一種の夜間巡視を行った。まず出現するのは城の近く、それから旧市街を囲む市壁と稜堡(りょうぼう)を歩き回り、市内にもやつて来た。徘徊(は徘徊)は真夜中のみのもので、哨兵たちもこれに慣れていて、危害を加えられた者はおらず、修道士がどこから出て、どこへ消えるのか見届けた者もない。短い間隔で何度も姿を見られる時は、いつも選帝侯家のだれかが死去する、あるいはその他の災難に遭う前知らせだった。一六九八年十月五日全ての市門、とりわけピルナーイッシエス門(トリアア)に現れた。もつともその四年半前、一六九四年四月二十二日にもまざまざと見られた。この時（四月二十七日）ザクセン選帝侯ヨーハン・ゲオルク四世(世)が痘瘡(とうそう)で亡くなった。一六九八年に

は十一月九日、雨暴風と雪嵐(8)の最中、雷がドレーステンの城の塔に落ち、これを炎上させた。その翌日ザクセン(9)アイゼナハ公ヨーハン・ゲオルク(10)がこられた痘瘡で死んだ。多くの者が修道士の出現を前兆と見なした。このような修道士の出現は過去現在に亘り決して吉事を意味しないのである。

### 六三一 薔薇の花環

エルベ河畔のピルナ(11)——免罪符売りヨハンネス・テッツェル(12)はここで生まれた——で、教会の祝祭の際、だれか敬虔な乙女が咲き誇る薔薇の花環——もしくは薔薇の枝——を教会の壁に吊し、何か誓いを立てた、あるいはその誓いと密接に結び付く願い事を唱えた。花環はとつくに枯れてしまっても取り去られず、だれももう注意しなくなった。ところが一六三四年のこと、こんなことが起こった。大層高齢の婆ばあさま様が教会に詣で、熱烈な祈禱きとうを捧げて神に懇願した。「ああ、お恵み深き神様」と老女は祈った。「七十年前このあなた様の神殿では非にと頼みまいらせたわたしの願い事をあなた様は叶えてくださいました。今一つのお願いをなにとぞご嘉納かのうあそばして、ご恩寵とご憐憫れんみんの証あかしをお示してください。我らがこの小さな町を荒れ狂う戦いくさの災いから守り、町には平和、わたしには平穏な至福の死を与えたまえ」。——するとなんとということ、婆様があのかさかさになった薔薇の花環——七十年前自分の手で壁のあの場所に懸けた——に目を向けると、おお、なんとということ、花環は緑になり、若い蕾つぼみを膨らませ、薔薇の花が咲いたではないか。婆様はというと、永遠の安らぎに赴いた。それから彼女の最後の願いも成就した。すなわちまさに同じ時、ピルナにおいて皇帝とザクセン選帝侯邦の間で和議が講ぜられたのである。



### 六三二 聖ゲオルクの旗

テューリングン方伯ルートヴィヒ温良方伯がフリードリヒ赤髭王・帝やその他多くのドイツ国諸侯らと共に、聖墓を手に入れるため再び渡海しようとした時、こんなことが起こった。聖者騎士ゲオルクの旗が神の御手により、アイゼナハの町に天から送られたのである。この都市は聖ゲオルクを守護聖人とし、棕櫚と十字盾と旗旗を持ち、鎖帷子を纏った聖者を大印章の図柄にしていた。方伯はこの神聖な方旗を掲げ、皇帝軍の真つ先駆けて数数の勳を挙げたが、配下の皇帝の封臣と彼自身は二人ともドイツの故郷と再会することはなかったため、帰還した騎士たちが聖ゲオルクの栄光に満ちた旗旗をテューリングンに持ち帰り、ヴァルトブルク城にしつかと安置した。やがて年移り、マイセン辺境伯がテューリングン邦の君主として昔日の方伯に取って代わると、このような君主のいずれかの時代に、理由は不明だが、聖ゲオルクの旗旗が持ち去られ、マイセンのターラント城——ドレースデンから程遠からぬ——に運ばれ、ここに長いことあった。しかしある時この城に火事が起こり、炎上したが、その折城の窓の一つ——東方を向いている——からかの旗旗が飛び出して天高く翻り、東天の輝きの中に消えるのが目撃された。その後二度と発見されていない。

### 六三三 性悪な猫ども

ザクセンの小都市ブーフホルツ——アンナベルク近傍にある——郊外に猫の粉挽き場と呼ばれる粉挽き場があ

る。これを初めて建てた男はなんとも奇妙奇天烈な目に遭った。さればかくなるしだい。粉挽き場はできたものの、穀物が挽けなかった。そもそも経営して行くことができなかつたのである。なにしろ悪魔もしくはその同類の意地悪な妖魔コウモリが棲すみ着いていたので。こやつ、厩うまに家畜が、中庭に犬や雄鶏おんどりが、屋根に鳩がいることも許さなかつた。そして装置が動き出すたび、何もかもばらばらに弾け飛ばんばかりに、ドンドンガタガタ音がした。そこで粉挽きは大層窮乏かつ心勞し、家屋敷を明け渡すか、留まつたまま自滅する羽目になるかだと恐れた。するとある時こんなことがあつた。幾頭かの大きな熊を連れて村から村へと渡り歩き、若者たちのお慰みに獸を踊らせる熊使いの二人組が夕刻粉挽き場に來た。そしてこの日はもうそれ以上先に行けなかつたので、ここに一晚泊してもらえまいか、と粉挽きに声を掛けた。粉挽きは余所者よそものらに向かつてこう言つた。「なるほどうちの厩は空いとるが、あすこにゃ妖あましいことが起おこるでう。飼かい物はいたたまれないで、暴れたり、嘶いえたり、蹴かつたりするだ」。けれど熊使いたちいわく「わつちらの飼かい物はそんなに怖がりでもねえし、そんなに感じやすくもねえです。どうか宿らせておくんなせえ」。そこでそういうことになり、熊使いたちは連れている熊たちともども粉挽きの厩うまに寢支度を調えた。——夜中に突拍子とつぱしもないどたばた騒さわぎが厩うまに勃発はつぱつ、粉挽きはそれで目を覚まされ、おつそろしく心配になり、余所者らの頼みをおいそれと引き受けてやったのを後悔、あの連中に怪我災難があつたら、わしの親切のせいだ、と思つた。しかし一番鶏いちばんどりが刻とまを作ると騒さわぎは収まり、朝方、熊使いたちはけろりとして厩うまから出て來た。粉挽きが、夜はどんな具合だつた、と訊きねると、返辞こたへはこう。「まずまずつてとこでござんした。もつとも熊のやつらあ、ちつとばかり落ち着きやせんでしたがね」。——それから彼らは粉挽きにもてなしの礼を述べると、熊たちと立ち去つた。その日粉挽きは近くの村で用事があつた。そこで村を指して谷間を歩いて行くと、繁しげみの後ろからだれかが首を突き出して、粉挽きをぎろぎろ凄うすい目付きで見詰めた。粉挽きはすぐこれが例の悪魔もしくは悪

魔の眷属だと見て取った。こやつはこう訊いた。「おい、粉挽きやい、あのでつかくて性悪で乱暴な猫どもはまだおまえの厩におるんか」「おるとも、おるとも」と粉挽き。「あすこにおる。それもこれからずうつとな」「うっひゃあ、なんと、なんと。それじゃ、おいら、どうしようもねえべ」。妖魔はこう叫ぶなり消え失せた。以来粉挽き場は平穩無事に稼動、家畜は厩で、犬や雄鶏は中庭で安泰に過ごし、粉挽きは裕福になった。

#### 六三四 彷徨い歩く長靴

ラウジッツ地方のラウバン——かつてはリュッペンと呼ばれた——で三十年戦争時代以下に述べるようなことが起こった。ゲルリッツからバトラー指揮下の龍騎兵一個連隊がやって来た。到底上上の連中とは言いかねたから、市民はこれを憚って戦戦兢兢、更には横行跋扈される苦痛にも耐えねばならなかった。こうした無頼な徒党の一人でびつくりするほどの背高のつぼが靴屋にやって来て、乗馬用長靴——彼ら戦慣れしたごろつきが履くようなカノイシ——を一足欲しがり、見事なできの長大なやつを見つけた。これはこの男にびつたり合った。なにせ三十年戦争時代の兵士なんてのは、自らを称して「あたしやあ身なりには重宝な体をしとりません。なんでもあたしにやあびつたり合います」と言う古着屋稼業のユダヤ人と同様だったのでね。で、おつかない古兵はその長靴に足を突っ込み——代わりに憐れ憫然たるぼろぼろの長靴を脱ぎ捨てての上だが——、古い方に付いていた拍車を外して新しいのに取り付け、「この新品の長靴はいつてえいくらだつてんだ」と訊いた。靴匠が値段を言うと、龍騎兵は提げていた斬撃剣をざらりと引き抜き、靴屋の腕を掴むなり、かわいそうな市民が要求したシュレッケンベルガー銀貨の数だけ口に出して数えながら平打ちを喰らわせた。こちらは苦痛と恐怖と驚愕のため抵抗できないでい

たが、やっとこさ体を振りほどき、声を挙げてこう呪った。「やれまあ、この長靴とこれを履いているあなたの足が決して安息を見出せないように。あなたが生きていようが死んでいようがな」。なすすべもない激しい怒りに身を震わせている靴屋に哄笑を浴びせた乗馬兵は、ラウバンのごろた石舗装の通りをチャリンチャリンと拍車を響かせてよろめき去った。こんな舗装とこんな石を供給した山を罵りながら。その後間もなくこの龍騎兵連隊は他へ移動を命じられた。——ところが後にリュッツェンの会戦が行われた折、スウェーデン軍の砲弾が馬身を貫き、この龍騎兵の両足を挽ぎ取り、彼は戦場で失血死した。その後二つの長靴が休むことなく、また持ち主もなく、ただし靴の中に血まみれの足の残り株を入れて、行進してゆくのが目撃された。長靴はリュッツェンからマルクアンシユテットへ、次いでリツパツハ——この地でその名も高き不滅のハンス・フォン・リツパツハ殿などは我と我が目でこれを実見した——を通過してライプツィヒへ向かい、ライプツィヒからヴルツェン、オーシャッツ、ツエーレン、マイセン、それからドレスデンへ、そこから休むことなくピシヨーフスヴェアダ、パウツェン、レバウ、ライヒェンパツハを通過してゲルリツツへ、そこから漸く大急ぎでラウバンを目指し、まことに長い行程をひたすら進み続けた。で、この小都市に踏み込むと、例の靴屋に願ひ事が成就したのをお目に掛けようとしてもいうかのように、その家の傍を通った。そしてそこからぐるりと向きを変え、龍騎兵が罵つた舗装の父たるシユタインベルクに登り、その稜角鋭き玄武岩柱上に出没するようになった。どすどすと聲音を立てるのも聞こえた。長靴が姿を現すのを見掛けて——これはだれにでもあることではなかったが——追い掛け、捉まえようとした者は、蹴飛ばされてごろた石の上におつ倒れ、肋骨をへし折った。長靴は自分の物だから、と取り戻そうとした靴屋さんは真つ先にこうした憂き目に遭つたそう。

## 六三五 小人の悪戯

ツイッタウ近傍(地)にあるブライテン山(山)にはおとなしい小人(小人)らが棲すんでいて、しばしば町や周辺の村村に現れ、人間たちが援助を惜しまず、また好んで——目には見えなくても——人間たちの喜怒哀楽に関わりを持った。宴会などがあると、これをよいことに大いに愉たのしんだが、自分たちが頂戴ちょうだいした分は別の形でお返しした。ある日、ある女が家を出て行く亭主に「急いで、すぐ帰って来てね。あたしたちが婚禮(婚)に遅れないように」と後ろから声を張った。これを幾人かの小人(小人)らが聞き付け、仲間——静かな人たち——に、婚禮(婚)があるつてよう、と触れを回した。即座に一群れが集まり、揃そろって出掛けようとした。ところが彼らの相談をブライテンベルクの麓(麓)で働いていた男が耳にし、「おぬしたちが目に見えないように婚禮(婚)に行くちゆうなら、おいらも一緒に連れてけや、なあ、お友だちさん(お)がた」と呼び掛けた。小人(小人)らはいささかたじろいだだが、それでも男の望みを叶かなえてやる、と承諾した。「だども、条件が一つあるだ。好きだけ飲み食いしていいけど、懐(懐)に突っ込んで持つて帰ろうなんてことたあ、絶対しちゃなんねえ」。——こうして一同うち連れ、姿を消して婚禮(婚)がある家にやって来ると、なるほどもうお客で一杯だったが、ちっちゃい小人(小人)たちはろくすつば場所は取らないので、めいめいお客とお客の間に坐すわり込んだ。彼らが連れて来てやった田吾作(田吾作)くん(田吾作)は一人前の席を占めたが、もとより婚禮(婚)の晴れ着を纏まとっていたわけではないので、だれかに見咎みとがめられたら、招かれざる客として追っ払われたことだろう。男はしたたかに飲み、がつがつ食ったが、女房が傍(傍)にいないのが残念でならなかった。なにせこの御仁、根は優しい性分なので、自分一人で愉たのしみたくはなかったのだ。そこで女房可愛さのあまり約束を破り、隠カケしにちよいと何か入れた。これを見た小人(小人)たちは気を悪く



Zwergshabernack.

し、そそくさと席を立った。そして田吾作どんのすぐ傍にいたのが隠れ頭巾ネーベルカッペをその頭から引つ掠さらい、他の仲間もろとも消え失せた。そこで田吾作どんは汚い上つ張り姿で口一杯はおぼり、もぐもぐやりながらその場に出現したわけ。満座の衆はこのへんてこりんな客を凝視した。この御仁、まだ今日のように有名人になつていなかった。田吾作どんはあつかましく手を伸ばし、器の中のものを嚙かんで呑み込み続けた。小人の帽子は軽やかなので、これが自分の南瓜頭かぼちから失なくなったことに一向気付かなかつたのでね。しかしやがて八方からひつぱたかれるは、小突こづかれは。そして焙やき肉の後から羹汁スープが出た。つまり拳骨羹汁げんこつスープのおもてなし。「||さんざんぶん殴ぶられた」。それから家から叩き出され、はて、こりやまあいつたいなんのこつちやいなあ、と痛む体を抱えて首を捻ひねるままにされた。

その後小人ツメルクらはブライテンベルクから退去した。ボヘミアなるリユーベツァールリュウベツァールの領国に入ったのだ、と言われる。また、こうも言われる。小人ツメルクらを駆逐したのは、夥おほたしい鐘の響きと夥おほたしい犬どもなのだ、と。上および下オオハイルバースドルフウルバースドルフの農夫たちが飼っている犬どもである。ここいら一帯では家数と犬数が際限もなく増え続け、どの家からもワン公が跳び出して、オイビンからの徒歩旅行者に咬かみつくように吠ほえかかるとだ。ハイネヴァルデハイネヴァルデの農夫だが、二台の馬車で小人ツメルクの一群とその財宝全てを運んでやり、たつぷり礼をもらったそう。小人ツメルクらはこう言った由。ザクセンの邦くにがボヘミアのものになれば、つまりオーストリア領になれば、わしらはまた戻つて来る、と。実際戻つて来るかどうかは分かりつこない。

### 六三六 オイビンの跳躍伝説

高峰オイビンハイゲン——ツイッタウから一時間半、それからこれを測つた狐きつねが更に付け加えた分の行程——は素晴らし

い山地の環のただなかに毅然かつ堂堂と聳え立っている。昔ここにクヴァール・フォン・ベルカなる騎士によって建てられた狩猟の家があった。それから盜賊城があったが、これはライツパの殿たちの所有だった。皇帝カール四世は御自ら攻囲して破却するという大いなる栄誉をこの城塞に与えた。高みには更に二つの巖、皇帝の寝台、皇帝の椅子が見える。陛下はこの上で休息し、堅固な山城の壊滅を眺めた。並びにかの信心深いお方はこの山の佇まいが修道院造営に絶好と思い、これを創建、十二名のケレスティン会派修道士を置いた。この天に近い居所は坊様がたのお気に召した。周辺の村村が悉くオイビン修道院に仔羊飼とミカエル鶏を貢租として数限りなく納めねばならなかったからなおさらのこと。当時華麗で装飾豊かな修道院教会が建立されたが、その側壁の一つはまると巖から斫り出されたものだった。教会の横手のある場所まで道が通じているが、ここからぞっとするような深い谷を見下ろせる。この絶壁は乙女の跳躍という。昔追いつめられた乙女が谷底へ驚くべき跳躍を敢行、操を守ったお蔭で奇蹟的に助かった。ケレスティン修道会士のどなたかがこの無邪気な仔羊を自分が所有権を持つ貢租の鶏と見なし、それゆえに追い掛けたのか、それともどこかの騎士が獵師かが——アルンシュタット近郊の乙女の跳躍のように——非騎士的に振る舞って罪のない少女をこうした危険に曝したのか、伝説は明らかにしていない。あちらの乙女の跳躍にもすぐ近くに王の椅子なる巖山が、そしていくらか離れて騎士巖なる巖がある。

### 六三七 キュナストの花嫁

ヘルムスドルフ——ヴァルムブルンから程遠からぬ——を見下ろすキュナスト城にクニグンデという騎士令嬢がいたが、このお姫様、激烈な男嫌い。求婚者全てに度胸試しを課したのだけれども、これが危険極まるもので、無



事にやつてのけるなんてまずできつこなかった。求婚者たちは城郭をぐるりと取り巻いている高くかつ幅の狭い城壁の上を騎馬で廻らなければならなかった。進み出して初めはまあうまく行つても、今日なお奈落と呼ばれる、険しい絶壁が深淵に落ち込んである場所にさしかかると、人馬もろともに目が眩み、深い谷底に顛落して微塵に碎け散った。これこそがクニグンデの望みで、彼女は夫など毛頭欲しくはなかったのだ。夥しい騎士たちがこのように惨死したのだが、それでも求婚者たちが皆そうした噂にたじろいだわけではない。クニグンデの冷たい美貌に惹かれて、もしかすると姫の幾つもの櫃や手箱に詰まっている冷たい金銀にもっと惹かれて、彼らは瞞着された犠牲の数を増やし続けたのである。するとこんなことが起こった。あるテューリンゲン方伯——アルバートとする説とその子息の樂天方伯フリードリヒとする説がある——が、居城のヴァルトブルクで危険な芸当の練習に励んだ。彼は居城の城壁を毎日一回騎馬で一周し、忠実で伶俐な愛馬を着実な目配りと足並みに習熟させたのである。なにしろヴァルトブルク城の古く荘嚴な城郭は断崖上に屹立しているのだ。それから遂に方伯は武装した一隊を引き連れてシレジアへ騎行、山城のキュナストへ立ち寄り、これは一介のテューリンゲンの騎士にて候、と名乗り出た。この素晴らしい男性を見たクニグンデはなんとも妙な気持ちになった。さしもの剛い情がなくなると和らぎ、まだ若しい騎士に惚れ込み、騎馬での度胸試しをしないよう切願する始末。しかし相手は申し出を翻すことなく、騎乗の一周を敢行、危険な冒険を無事に成し遂げた。クニグンデは歓声を挙げ、飛び立つように迎え、「わたくしの切ない物思いは悉く癒やされました。わたくしは喜んであなた様だけのものになりたい。あなたを熱愛する妻になりとうございます」と言った。しかし方伯は峻嚴な眼差いで彼女の抱擁を拒み、次いで掛けた言葉は彼女を心底震駭させた。その中の「わたしは既に幸せな結婚をしているのだ」という宣告は姫にとって最も苛酷なものだった。——方伯があれば多かつた犠牲者の復讐を成し遂げて立ち去るや、クニグンデ姫は城壁に登り、目路の限りその姿

を見送り、それから奈落（ハレ）の底へと我と我が身を投げた。深刻なこの伝承を滑稽化（こっけい）した者もいて、いわく。クニグンデは衝撃のあまり醜い木像に変身したのだ、と。これは「キユナストの花嫁」といわれてなお現存、接吻（くちづけ）してください、と旅行者たちに差し出される。しかし接吻するのが厭（いや）ならば——なにしろこの木像、髪と眉毛の代わりに針鼠（はりねずみ）の皮が貼つてあるという代物でしてね——小銭を幾何（いくばく）か厭（いや）じてご勘弁願わねばならない。——この伝承はテオドーア・ケルナー（註）、フリードリヒ・リュツカート（註）、その他ドイツの文人が譚詩（バラード）の素材としている。

### 六三八 星占（ホロスコープ）い

山城キユナストには小さい頃から馴（な）らされた狼（おおかみ）が飼われていて、番犬（ばんいぬ）ながら駈（か）け回（まわ）っていた。いや、それどころか、犬並みに幾つかの芸当を仕込まれてもいた。一六三五年三月二日、城主にして伯爵領領主シャーフゴツチエ伯ヨーハン・ウルリヒ（註）は夥（おびただ）しい友人を迎え、上級家臣を招いて、自身の誕生祝いを開いた。これにはキユナスト城のすぐ下にあるギアース村（ドルフ）の司祭ヨーハン・アンドレーアス・ティーメ（註）も参加していた。この人は占星家（アストロロジ）で、三十年戦争時代にはまだ尊重されていた学問の信奉者だった。評判の予言者が居合わせたので、その伎倆（わざ）が客人たちの話題に上り、伯爵の誕生日ということから、天宮図で伯爵の運命を占つてもらおうということになった。ティーメはそうした。とつくり調べ、計算し、幾つもの徴（しるし）を描き、それから物思わしげにこう発言した。「伯爵閣下におかれましては、冷たい鉄により横死を遂げられましよう」と。満座は仰天し、こんな言明を非難した。伯爵自身もこれを甚だ喜ばなかったが、厭（いと）わしい予言にもなんとか泰然自若と構え、この知ったかぶりの坊主めをちよいとからかってやろう、と考えた。一匹の仔羊（こひつじ）を部屋に連れて来るよう手配し、客たちを集め、司祭にこの仔羊の運勢を占

星図ですぐさま占うよう命じ、これは何者が食べるのだ、と訊いた。自らの伎倆をこのように嘲弄された占星術師は気を悪くして、言い付けに従うのを随分拒んだ。ティーメ師はこの術を崇高なものだと考えていたのだ。なにしろ聖書でたびたび言及されており、その地位は深遠な意義を有しているではないか。イザヤ書が主の来たれる日をこう予言しているように。すなわち、天の諸の星とほしの宿は光をはなたす日はいでてくらく月はその光をかがやかさざるべし、と。けれどもとうとうティーメは仔羊がいた群れの羊飼いの許に人を遣り、その誕生の日時を問う質し、これを聞き知ると、またしても計算して、びっくりするような発言をした。「この仔羊を喰らうのは狼でしょう」と。これを耳にした者は悉く哄笑、伯爵自身からからとうち笑いながら「我ら自身がその狼になろうではないか。料理番に、すぐさまこれを殺して焙り、我らが狩りから戻ったら、夕餉の食卓に上せよ、と申せ」と言った。料理番は仔羊を殺し、焙き串に刺した。事の経緯はまるで知らなかつたので、何気なく例の馴れた狼の前脚に串の回転を委せ、ちよつとの間厨房を離れた。ところがこの狼、誕辰の賀宴のお客様がたとおもてなしのせいで、食餌係の下僕からすっかり忘れられていたものだから、これぞ真正正銘である狼の空きつ腹(「物凄い飢餓感」に駆られていた。ぎゃんぎゃん吠え立てる胃袋を抱えながら、他人様のために焙き肉の串を回さなければならぬなんて、狼にとつて厭で堪らぬ労役だったし、でなくとも長いこと新鮮な肉を賞味したことがなかつた狼君、仔羊の焙き肉をこの上もない大満足で貪り喰い、空腹をとことん鎮めた。料理番が戻つて来てこの燔祭供犠に邪魔を入れ、散散にぶん殴つてせつかくの焙き肉の風味を塩辛く(「台無しに」するまでね。とにかく起こったことはいたしかたない。どんなにひっぱたいたところで狼が平らげた仔羊が元通り跳び出して来るわけじゃなし、予備の仔羊はなし。というしだいで料理番は別の焙き肉の準備に取り掛かつた。こうして晚餐は善美を尽くして調えられた。客人たち——ティーメも再び陪席していた——は伯爵と共に食卓に着き、もう何品もの馳走が運ばれ、下げ

られたが、伯爵はいらいらと戸口を見遣り、給仕の近侍に「あの仔羊は早く参らぬのか」と訊ねた。近侍は人をやつて料理番に問い合わせた。すると料理番自身が周章狼狽の態で現れ、「御前様、伯爵様、お赦しくださいまし。そのう、あの仔羊にはちと障りが生じまして。あれは……串から……落ちてしまいました」と口籠もつた。「なんと、串から落ちたとな」。「さようで、御前様……あんちくしょう、焙き肉回しめが……あの狼が……喰っちゃまったんでございます」。——一同驚愕してしんと静まりかえつた。伯爵は小刀と肉叉をはたと置き、「主の御旨が行われますように」と唱え、食卓を立ち、怏怏として引き揚げた。

その後まる五箇月と経たない内に、シャーフゴツチュ伯ヨーハン・ウルリヒは皇帝の命令によりレーゲンスブルクで首を刎ねられた。

### 六三九 揺さぶり女たち

キユナスト一帯を、それから最寄りのリーゼンゲビルゲ方向へと、荒れ狂う獵師がもろもろの眷属を従え、轟轟と巡行する。住民はただ単に夜の獵師と呼ぶ。あの界限でも、フォイクトランドのように、荒れ狂う獵師は若男若女や森小人を狩り立て苛む、と信じられている。人人はちいぢやな若女を揺さぶり女と名付けている。若女たちが夜の獵師に追われて捕まるのを免れるには一つだけ方法がある。木を伐る男が木が倒れる時「神よ、御心のままに」と唱えた木の幹に辿り着けば、もう安全でのんびりできるのだ。けれども唱え詞が「御心のままに、神よ」と、倒れている木の幹は若女を救ってはくれないので、更に更に遠くまで夜の獵師から逃れねばならない。あの辺りの子どもが駄駄をこねて泣き喚いたりすると、こう言い聞かせる。「好い子にしな。夜の獵師の

音がするべえ。あれが来るだぞ。おとなしくしていやあ子は、あれに連れてかれちまうだに」。

#### 六四〇 山の精リユーベツアール

キユナストからリーゼンゲビルゲまではそう遠くない。ここが広くその名を謳うたわれる山の精リユーベツアールの領国である。かくも多くの民間伝承——古くからある本物やら新たな創作やらいろいろ——に登場する精霊はまたとない。あの山地にはリユーベツアールの名が付いている場所が夥おびただしい。村でもあり磐類ばん鉱山でもあるシユライバースアウからエルブ滝、ツアッケン滝、カッヘル滝、それから大ラート山、コッペ山へと登ってみるがよい。途中リユーベツアールの砦、その球、階段、石の説教壇、穴蔵、庭園、池、玉座、その他彼がおみこしを据えた所が数数見つかる。リユーベツアールはドイツ・スラヴ神話におけるプロテウス的存在である。遍く知られていながら、いまだにはつきりと正体が掴めないのだ。コーボルトの性格で、善良にして意地悪、陰険というより悪戯好き。しかしながら怒りっぽい質で、からかいに掛かるとしばしば残酷になる。森で暮らしを立てる人人のあらゆる姿を取る。鉱夫、猟師、木樵、炭焼き、行商人、案内人、飛脚など。ただし修道士やら若男キースマンになったり、獣に化けたりしたこともある。彼は地水火風の四大および地中のあらゆる財宝——彼はこれら財宝守護者の頭である——を支配している。周知の話だが、この精はリユーベツアールなる名を我慢できず、彼をこう呼んで嘲る連中に手ひどく仕返しをする由。これを咎めだてはできない。どんな物分かりの良い御仁でも、そんな所らの洒落者風情に誉れある名前を汚され辱められたら、堪忍袋の緒を切る道理だもの。もつともこの森の精の本当の名を知る者はいない。そこで人人は山地の主、山の主と呼んだ。また葉草探しの男女は彼をヨハンネスのご主人様と唱えて崇め

た。なにしろ彼は薬草採りたちに実に効き目のある草根類香草類を教えたし、愛いやつ、何か遣わすだけのことがあるわい、とお気に召せば、綺麗な貴石をいろいろ拾わせてくれもしたからである。スイスのピラトゥス湖、ないしポヘミアとバイエルンの境をなす山岳地帯にあるバイエルン湖——地元では「あの世の」と呼ばれる——が石を投げ込まれると轟轟荒れ狂い、大浪を立ててそれを吐き戻すように、山地の精は綽名を言い囃されると隠忍自重してはおられず、彼を怒らせ、煙突の下の下まで掃除させよう（「憤懣をとことんぶちまけさせよう」とまで挑発した無礼ながさつ者どもにこっぴどく思い知らせることがしばしばだった。これについては語り種が多多あるう。明明白白自分を罵ったこういう粗野下賤な者どもを彼はどうしたか。ある者には芻をともしなう嵐をその襟首に送り付けたし、またある者の場合は堆肥熊手でそやつ煙突を掃除した。植物採集をしていた医学生は頸根っこをへし折った。ある羊飼いの頭に牡牛の角を二本生やした。シユネーベルク市参事会の下役人の両耳を高高と引つ張り上げたので、かの黄金の驢馬の耳さながら長くなってしまった。ある飛脚は早暁から真つ暗暗の夜を籠めてどうとう翌朝になるまで魔法の掛かった古城の廢墟の中をぐるぐる引き回された。ある農夫は天狗鼻にされてしまい、洩をかもうとするたび、腕を伸ばせるだけ伸ばして顔から手中を遠ざけねばならなかった。森で山の精をおちやらした唄を歌っていた草刈り娘にこちらは恋人に化けて近づき、顎の下に手をやって、山羊の髻を貼り付けたので、娘は生涯それを生やしていなければならなかった。精を莫迦にした農夫たちが納屋で打穀していると、そんなつもりはありやしないのに、穀棹を穀物ではなくお互いの頭や背中に打ち下ろしてしまい、お蔭で糶より青痣の方をしたたかにこしらえた。精は、旋毛を曲げると、こうした処罰をしばしば、そしてしこたま下したものである。

## 六四一 リューベツアールのお気に入りたち

山地ゲゼルンの主ぬしの愛顧は気前の好い人助けといった形で示されることが多いが、時時は意地悪な喜びがちよっぴり、いくらかの無愛想が加味される。愛顧を与える場合、結構気紛れなことも珍しくない。それでも人人をたくさん幸せにした。ある貧しい小百姓が山地に入つて山林橋やまりんこを集めようとした時、山の精は煤すすだらけの炭焼きの姿で現れ、それとなく自分の庭園園へ案内し、山林橋をやつたが、多過ぎるほどではなかった。農夫はそれをもたらつて背負しょつて帰り、冬まで取つておいた。そしてこれを子どものためちいぢやな降誕祭クリスマスツリー祭樹に吊したら、ひどく重たかつた。一つ剝むいてみると、芯しんと種は純金きんだつた。この幸せ者はドウカーテン金貨五十枚を取り出したのである。

葉草採りの女が山地で迷つた。精は農夫の姿で現れ、道を教えてやつたが、女の背負しょい籠かごから女がせっかく集めた葉草を出して投げ捨ててしまい、木の葉を枝から払い落として、これを籠に詰め込んだ。案内人が女を残して立ち去ると、女はまだ道端にあつた入用な葉草を見つけ、木の葉を籠から振るい出した。で、僅か数枚の葉っぱが籠の中に引つ掛かつて残つただけだつた。しかしこのほんの数枚が、家に帰つてみると、純良なドウカーテン金貨になつていた。女は走り戻り、捨ててしまつた葉を探そうとしたが無駄むだだつた。

またある貧しい女が骨を折つて癩肌いんわをあちこちよじ登り、野薔薇のばらの繁しげみから実——ハーネブツテと呼ばれる——を摘んで集めた。これをしまつておいて、別の時にヴァルムブルンの旅籠屋はたごやの亭主——湯治客に出す美味な葡萄酒羹汁ツァインズツペを作るのに必要とした——の許もとに運んで行こうとしたところ、ハーネブツテが黄金きんの粒つぶに変わつてゐるのを発見した。

また別の女が接骨木の果醬——これを用いるとしたたかに発汗し、水腫を治す効能がある——を作るために接骨木の実を摘み、山から下りると、どの房にも実ではなく純金の褐色の粒がぎっしり下がっていた。

母摘みに出掛けた貧しい娘が家に帰ってみると、壺には母の代わりに三プフェニヒ銀貨、グロッシエン銀貨、ドゥカーテン金貨がぎっしり詰まっております、素晴らしい持参金になった。

手職人の若者が山の精——例の綽名自体精がいくらかは畑仕事に携わっていたことを示している——の豌豆畑に出くわして、すてきな未熟青豌豆にありつき、飢渴を鎮めたが、その際いくらかが隠しに落ちた。もう随分精の領国から遠退いてから、たまたま隠しに手を突つ込むと、豌豆があつたので、茨から出した。うわあ、驚いた——豌豆は黄金の粒だった。さあ、若者は我と我が身を引き裂きたくなくなった。お伽話のルンペルシュティルツヒエンみたいに怒りのあまりいっそ真つ二つになれたらなあ、ってね。そうすりゃ先刻貪り喰つて体に入れたお宝を取り戻せたかも知れないもの。さはさりながら一旦呑み込んだものは再び帰らず。若者は尻に帆掛けて引つ返し、豌豆畑を探し、摘んで貯えにしよう、と思つたが、いやあ、おあいにく様でした。

喉が渴いた旅人が——人呼んでリユーベツァールスの池という、なかなか簡単には行き着けない——あの黒黒とした池の畔にやって来て、たっぷり飲み、冷たい水晶のような水で携えていた水筒を満たした。かなり歩いて中身を飲もうとすると、壺がとても重い上、一滴も水が出て来なかった。石みたいに堅い塊が中に入っているようなので、旅人が硝子壺を壊してみると、中からは黄金のように燦めく、頗る純粹な黄玉が出て来た。旅人はこれを持って金をどつさり手に入れた。

極貧の女が乳壺を抱えて山を下りて来る農夫の恰好のリユーベツァールに出逢い、なんぞお恵みを、と声を掛けたところ、相手は壺ごとそっくりくれ、その乳は少しだけ飲んで、残りは酸っぱくなるまで置いといて、それで



乾酪チーズをこしらえな、と忠告した。女は言われた通りにした。乾酪チーズが熟成して美味おいしそうに黄色くなるまで随分時間が掛かったが、できしてみると、乾酪チーズは純金(16)だった。

手職人の若者が三人、豪勢な馬車に乗ってやってくるどこかの殿様に山地で出くわし、おねだりをしたところ、殿様はめいめいに志しつをよこしたが、これは入念に紙でくるんであり、次の宿に落ち着くまで包みを開くでないぞ、とのお指図付きだった。それなのに、一人は好奇心に駈かられて、馬車がまだ見えている内に開けてしまった。——すると出て来たのは、なんにも買えつこない古ぼけた数取り用の模造貨幣レプリカモナエが二枚。「もつと後で開きはしたが」言われた時まで待ちきれなかったもう一人が見つけたのは古いポヘミア・グロッツェン銀貨(16)が二枚。ちゃんと宿まで待った三人目はドウカーテン金貨を二枚授かった。

薬草根掘りが雪隠黄金虫(16)を一山見つけ、ヒルシュベルクの薬剤師のところを持って行けば、この虫どもを蒸溜して肺の病に効く水薬を作るだろう、と考え、集めて背囊はいのうに入れた。——ところが甲虫かぶちしはカサカサゴソゴソおぞましく這はい回り、加えて背囊がどんどん重たくなったので、男は腹を立てて目論見もくろみを諦め、途中で甲虫を払い落とし、たまたま何匹かが背囊の襷ひたに引っ掛かって残っただけ。けれどもこの僅かなやつが、家に戻ってみると、金貨に変わっていたのである。(16)

馬具職人が六頭立ての見事な馬車に行き逢った。しかし、どの馬にも脚が二本しかなく、馬車の車輪は一つだけ、それからへんてこな鳥たちが馬車の周りを翔とび回っていた。車輪に付いた轍なまの汚泥が黄金のように光っていたので、馬具作りは指でそれをいくら掻き落とした。けれどもそれは——失礼サルツァーノホドオ許シアレ——糞くそ、ありきたりの糞だったので、職人は古い檻褌布ぼろふになすりつけた。でも宿に入ったら、汚れた布切れにドウカーテン金貨が六枚くっついていた。

山の精がご機嫌麗しく結構な贈り物をしてくれたという伝説はこんな具合で、多分何百何千とあるだろう。

#### 六四二 リューベツアールのからかいの数数

リューベツアールのからかいを体験し、我慢しなければならなかった者は少くない。からかいといつても悪ふざけとそう違わないことがしばしばである。

ある薬草根掘りが、脚部痛風患者に頼まれて山地でちよこちよこどん〔「足痛風」に効く根っこを探したが、一向見つからないでいた。すると別の薬草根掘り——山地で仕事をしているのに出くわしたのだ——が場所を教え、その上たつぷり大人の腕ほども長い、黒い根っこを掘り出すのに手を貸してくれた。で、こちらは喜んでそれを注文主の許に運んで行った。——ところが、わあ大変、根っこが突然全部蛇に変わった。やれま、痛風患者が寝床から跳び出すの速かったのなんのつて。脚は元通り、そして走れたのだ。患者はそれつきりちよこちよこどんと縁が切れた。

リーベタールのある仕立屋のところへ田紳姿の山地の主がやって来て、服地を持参した上、上品な衣装を一着作って欲しい、と注文した。仕立屋は服地を大層鷹揚に裁断したが、結局、「裁ち台の下」端切れ入れにちよこちよこ分だけでは満足できず、あろうことか服地を掬り換えて、より品質の劣った服地で在郷の旦那のに着をこしらえ、これを指図された住所に送った。ところが……である。仕立屋が、これで自分自身のために晴れ着を縫おう、と横領した上物の服地を取り出してみると、なんとまあ、古腐った蘆の筵で、中にはまだいろんな生き物が蠢いていた。——その後間もなく仕立屋が山地越えをしなければならなくなった時、例の田舎貴族にばったり出逢っ

た。郷士は牡山羊にまたがっていたが、この山羊、ひつきりなしにメエメエ啼いていた。郷士は「親方、織物を拘り換えたあの上着の仕立賃を取り立てにわしんとこに参ろうちゅうのかのう。親方、新しい上着を蘆の筵で作成中のう。親方、それじゃあどんな釦を付けることになるんかのう」と問い質し、それから、どんな犬もおぬしの手から餌をもらうまいぞ「おぬしはだれにも相手にされないだろう」と嘲った。以来仕立屋は牡山羊のメエエという啼き声に我慢がならなくなった。「親方、親方」と詰問しているかのように思われたからである。

ある織物商人が山の精——商人は相手を問拔けな田舎郷士と思つた——にまことに粗悪な布地上物と偽り、ドウカーテン金貨五十枚で売りつけた。家へ帰つて財布を引つ張り出し、せしめた金貨を手箱に入れようとした時、財布の中から生きた二十日鼠が五十匹跳び出し、家中に散らばり、このいかさま師にとつて五十ドウカーテン以上になる上等の織物をめちやめちやに喰ひ破つた。自分を騙さなかつた他の三人の織物商人を山地の主は太つ腹なご機嫌でからかつた。彼はピカピカのドウカーテン金貨で支払つたが、三人が家で見ると、真鍮の数取り用の模造貨幣だつた。三人はびつくり仰天、山地へ引き返し、山の殿様が丁度馬車で出掛けようとしていたのに行き逢い、文句を申し立てた。見掛けは贗金である代物——本当はたつぷり重みのある純良なドウカーテン金貨だつたのだが——を突きつけられた精は織物商人たちに向かつて、今度は銀貨で支払おう、と申し出、金貨の方はまた取り収めた。おちやらかされた三人がライヒスターラー銀貨を携えて帰宅すると、財布の中でへんでこりんな音がするではないか。調べてみると、古い壺のかけらだつた。わあ、大変。彼らにはもう一度引き返す元気ななてありやしない。けれども翌日陶片はライヒスターラーに変わつていた。

欲張りな探鉱者が嚴の割れ目に火のように燦めいている金塊を発見。慌てて手を伸ばして掴んだら、これが火。蛙。触つたせいで手の皮膚が真っ黒けになつてしまつた。そこで皮膚を「ごしごし」こそげ取る羽目に。とこ

ろがこそげ取った皮膚が純金の薄板に変わったのだ。これでこの男、これからはとことん好いやつになろう、と思つた。

ある時ご機嫌になった山地の主は靴屋に化けて近くの市に出掛けて屋台店を出し、豪華な靴の数を法外な安値で売つた。特にご婦人がたにね。この肌触りの良い、柔らかく、しなやかな緑色の靴の履き心地ときたらなんとも素晴らしかった。ただ残念なことに、ちよつと経つたら、日に当たつた牛酪バクイみたになつちやつた。材料の布と革は山の牧場で集められた代物、革の製造元は牝牛めうしどもだつたんで。

あるいはまた寝間帽子ナイトキャップ作りになつて売り弘めたこともある。大層な商いをしたもの。しかし後でこれらはあちよいと口では言えない白い物で作られていることが分かつた。この原料、昔薬局で白龍胆しろりんどうの名で取り引きされたが、この名の薬草の根とは全くの別物のあれだつた。

からかい好きの精がヴァルムブルン(18)で理髪師兼髪師(19)の店を出したことがある。瞞だまされて髪を買つた人は、翌朝鬘(20)台上(21)、針鼠はりねずみの皮、鵲かきつばたの巢、弁髪(22)の代わりに尻尾がだらりとぶら下がっている驢馬ろまの皮でできた髪、その他いろいろな動物の巢を見つけた。

派手好きで男の気を惹きたがるお洒落婆おぼさんに精が紅べにを一箱売りつけた。その色は紅苔(23)が、香りは山地の高い尾根にある童巖すみれいわが付けたもの。しかしご婦人がこれで化粧すると、棒状硝酸銀(24)に腐蝕かじくされたみたいに肌が黒褐色に染まってしまう、死ぬまでそのまま、森の精ツァーレトユートさながらでいなければならなかつた。

ヒルシユベルク(25)のある市民の許もとへ精が薪割り人の姿でやって来て、薪割り仕事をさせてくださいと申し出た。労賃としては担げるだけの薪が条件。市民は、四棚(26)の薪を割ってくれ、と言ひ、それから——男が斧おのを持っていないものだから——「しかしなあ、あんた、いったい斧はあるのか」と訊きいた。「あいさ、持っておりやす」——精

はこう答えて——左足を体から引つこ抜き、凄まじい勢いで薪を割り始めたので、市民はいやもう啞然茫然、うちの中庭からさつさと退散してくれ、と叫んだ。「うんにや、そうはいかねえ」と精。「おらあ、まず骨折り代を稼がにゃなんねえ」。そして切つたり割つたりを続け、とうとう材木が全部細かい薪になった。それから精は体をどんだん大きくし、恐ろしくでつかくなつて、背中にぱつと四棚の薪をなんてことなく担ぎ上げ、げらげら笑いながらいなくなつた。

クルムヒューベル(註)のある農夫の許へ山の精が肉屋になつてやつて来た。農夫は豚を潰したかつたところだつた。農夫が、労賃はいくら欲しいのか、と訊ねると、「ああ、労賃なんてようがす」とふざけ屋の精は答えた。「わつしが満腹するだけの腸詰めを喰わせてくれればええ」。こう言われて農夫はほくほくした。だつてねえ、こう考えたのだから。——聖書にや書かれとるでねえか。「穀物を碾す牛に口籠をかく可らず」となあ。こいつはその牛みたいなんだて、と。さて、豚どもが皆解体されて、腸詰めが茹でられ、食事にあいなると、山の精は饗宴をおつた。腸詰めを一本ぱくり。もう一本ぱくり。さらにまたぱくり。——とうとう農夫は、これで充分だらう、と思つたのだが、さにあらず。肉屋はまだまだ長いこともう結構とはせず、喰らいに喰らい続け、百と五十本の腸詰めを平らげ、もつと無いか、と後ろを振り返つたが、何も見つからなかつたので、口を拭いていわく「わつしらがあれつばかりしか腸詰めを作らなかつたのはなんとも残念さね。もうすぐまた豚公を潰さなにゃならねえだな」。そして消え失せた。——まんまと瞞くらかされたのに気付いた農夫とのおかみさん、それから子どもたちは、失くなった見事な腸詰めを惜しがつてわいわい泣き喚いた。でもその後、煙製室へ豚の塩漬け腿肉を運んで行くこと、なんとまあ、百五十本の腸詰めがぶら下がっているではないか。実に壮観だつた。一同大喜びした。

## 六四三 リューベツアールの馬たち

山地の主が、他の独裁君主と同様、六頭立ての馬車に乗るのを好んだことは既に触れた。ある時、白馬を揃えたこうした仕立ての馬車で進む精に、あるスウェーデンの副連隊長（「陸軍中佐」）が行き逢った。頃は三十年戦争の最中。スウェーデン兵なるものは、クロアチア兵と同様、自分の所有でない物をなんでもひどく欲しがった連中だが、あいにくその節は休戦中だったので、副連隊長殿はあえておおっぴらに巻き上げようとはしなかった。彼は側近の部下を従え、シレジアの貴族のだろうと推量した馬車の扉際に馬を乗り付け、羽根飾り付き帽子をちよいと持ち上げて言った。「御前、いかがでございますよう、御前の白馬を我らの輜重馬と取り替えて戴けませんでしょうか。我らはまだまだ何哩も行軍せねばなりません、馬どもは疲れ切っております。御前はお近くの町へ行かれるだけでございましょう。お帰りの砌、我ら、お馬と我らの馬匹をまた取り替えまするが」。いかにも雅やかな礼儀作法を心得た貴紳然とした山の精は、こちらにも被っている三角帽に手を触れて会釈を返していわく「わしの白馬どもは貴官のご随意にお使いくだされい。交換の儀は一向構いませぬ」。そこで副連隊長はこっそり指図して、輜重馬の内最も憐れ憫然たる六頭をこの田舎貴族の馬車の前に繋がせ、今や我が物となった見事な白馬たちを眺めてお腹の中で大笑いした。だつてねえ、これをまたさちんとご返却つかまつらうなんて夢にも思わなかったのだから。それから双方とも鄭重に挨拶を交わして別れた。ところが翌朝宿営先で、副連隊長の部下の兵站車輛長が白馬たちに再び馬具を着けようとした時、銅葉桶に結ばれていたのは六つの大きな藁束で、白馬たちは人知れずおさらばを決め込んでいた。

## 六四四 リューベツアールの樹

ある農夫に地主貴族が殿様として、大きな柏を一本森から運んで来るよう命じた。農夫は馬を一頭荷馬車に繋いで森の中へと出掛けたが、太い柏の巨木を車に載せるなんて、いわんや一頭立てでそこから運び出すなんて、できっこないことにすぐ気付いた。けれども無慈悲な領主の怒りと罰も恐ろしく、さながら木木に向かつて、助けにくれえ、と懇願するかのように、森の中でわいわい嘆き悲しんだ。すると獵服を着た男が森から出て来て、農夫に何を嘆いているのか問い質し、安心しろ、と慰め、空手で家に帰るがいい、自分が配下の獵師助手や木樵たちの手を借り、無報酬で、ただちに樹を郷士の許に届けよう、と言ってくれた。農夫は胸の重荷が取れて浮き浮きと家に帰った。一方山の精は夜更けに例の柏を遅い大枝も何もすっかり丸ごと背中に背負って郷士邸の玄関前に運んだ。でっかいその幹が玄関の扉をがちり押さえたので、だれ一人出入りができなくなった。郷士が窓から奉公人たちに、すぐ樹を片付けろ、と言いつける様子は愉快な眺めだった。しかし樹は鉄でできているかのようにとどっしり動かない。そこで郷士は、樹を鋸で挽き切り、斧で割って、扉の前を空けろ、と怒鳴った。しかし斧という斧は相手が響岩でもあるかのようにぼろりと砕けてしまい、鋸はどれも歯が欠けて、鋭さは提琴の弓以下になるといふ始末。柏は石となったのか、石みたいになったのか、いずれにせよ殿様邸の前に転がったままでびくともしない。そこで郷士は玄関を新たに開けさせねばならず、この小改造は建築職人、壁工、大工、指物師、錠前師、漆喰屋を大勢必要とし、柏の値打ちの三倍も物入りだった。

これとそっくりの伝説がオランダにもあり、これは、あるお助け妖精が苛酷過ぎる郷士の玄関前に樹を一本投げ

出し、だれ一人出入りできなくなつた、というもの。

リユーベツアールの伝説は広く流布していて、あまりにもその数が多いので、その紹介はまずまあこんなところで良しとしよう。周知の「蕪数え」<sup>(リユーベツアール)</sup>に関する言い伝えはこれには入らない。この物語は近世の所産である。民衆は近世の幾つかの本や旅人を通じて初めてこれを知るのであり、リユーベツアールについて述べている古文獻には一言半句も言及されていない。

## 六四五 シレジアの酒豪

ヴァルデック騎士ボース(DSB八〇)や最後のクレッテンベルク伯(DSB三九七)が酒道に精進して雄雄しく勳<sup>(いさお)</sup>を挙げたように、神の嘉<sup>(よみ)</sup>したもう邦<sup>(くに)</sup>シレジアもまた勇猛果敢なご同輩に事欠かなかつた。彼らはやはり長靴片つぽ丸丸でもへいちゃらだつたのである。とりわけこうした人人を生み出したのはシュヴァインハウス<sup>(SH)</sup>を居城とするいとも高貴なる一族シュヴァイニヒエンの殿たちである。その始祖たるや膂力<sup>(りよく)</sup>はアナクの子のごとく、強い獵人としてさながらニムロ下のごと<sup>(SH)</sup>しだつた。彼は自分目掛けて突進して来た荒れ狂う牡猪<sup>(おすのし)</sup>の両耳を引つ掴み、すっかりおとなしくなるまでぐいぐい振り回し、それから粉袋みたいに肩にどざりと懸け、担いで戻つた。その報償としてポヘミアの女王リブツサの義兄となつた——ありがたいことに女王の姉姫カーシャが結婚を承諾してくれたのである。この始祖の後裔<sup>(こうえい)</sup>の一人ハイインリヒ・フォン・シュヴァイニヒエンは——古記録によれば——剣にも槍にも「神聖ローマ皇帝の」追放令にも「教会からの」破門宣告にもびくともしなかつたが、「その父親たちなりしロイブス城およびグリュツサウ城の酒蔵主任にのみ<sup>(SH)</sup>これがしばしば成功せり。彼らの至高至上の力を根気よく行使するこ



とによりて」。けだし酒樽さかだるの中に憩さかうている力である。更に後世の子孫の一人ブルクマン・フォン・シュヴァイニヒエン——シュヴァインハウス、コルプニッツ、ホーエンドルフ、ヴォルフラムスドルフ、リーベナウ、ホーエンフリートベルクの殿——は愛用の酒杯さかを持っていて、これには丁度一カンネさか入ったが、こんな乾杯の辞が記されていた。

ひたすらに名誉たのを待うめ我が族さか

彼自身名譽けんぎよを、劍戟けんげきを、そして酒道さかを待うみとし、百十歳まで生きた。ハンス・フォン・シュヴァイニヒエンは自身が綴つづった自伝で、自分は「古い豚館アレンライヒヤゼン」——一族の根城たるシュヴァインハウスを民衆はこう称した——なる幹から程遠とほからぬところに落ちた真正まことの林檎りんごである（「紛まうかたなきシュヴァインハウス家の血筋である」）、と宣言している。ヴォーラウ近郊（近）のヘレン（近）モツチエルミツツ城（近）に蟠踞ばんきょした——そしてどうやらしばしば酔よって寝ねつ転てがりもした——ゲオルク・ヴィルヘルム・フォン・シュヴァイニヒエン殿は伝統あるドイツ酒豪道さかにおける手練てれの傑物たけものだった。ある時この貴族は大勢の酒飲み仲間と共に宴席さかに就ついていた。お客の中にポーランド人が一人いた。この御仁ごにん、見事な太刀捌さばき（「飲のみつぷり」）を見せたが、あの民族特有の大言壮語ごうまんすごをもこととした。で、傲慢不遜ごうまんふそんな口調で「それがし、いかなるシュヴァーベン人たりとも飲のみ潰つぶしてみせましようぞ」と言い出したものである。つまりポーランドの衆しゆつてのは、ドイツ人を十把じっば一絡いっかつげにシュヴァーベン人と片付けて、心底軽んじていたわけ。この宴さか会（近）はもう四時間も続いており、一同、頭あたまがかつかと火照あつつていた。館いんの主人は、ドイツ国民の榮譽えいりやうを擁護ようごせねばならぬ、と感じ、こう言った。「伯爵殿は賭かけをなさろうとな。しからばドイツとポーランドの飲のみ較くらべと参

ろう。貴殿の六頭立て豪華馬車（ユキバシマ）に対しドウカーテン金貨一千枚じゃ。「決まりだ」とポラック（ポラック）。「トカイを四十本卓上へ運べ」とゲオルク・ヴィルヘルム・フォン・シユヴァイニヒエンは叫んだ。酒壇（サカ）が林立すると、朴直（ハツチキ）なドイツ人は飲み始めた。トカイを一本、ポーランド人の健康を祝して飲み乾す——ポーランド人が楽しげにそれに応える。二本目、三本目、四本目、五本目——ポーランド人が乾杯を返す。もう一度五本、それから再び五本、またまた五本——ポーランド人は落ち着き払って献酬。闘士はいずれもそれぞれ二十本の壇を平らげてしまった。ポーランド人は剛毅（ゴウキ）に返杯を果たし、負ける気配は露ほども。敵ながら天晴れ、と誉め讃えざるを得ぬ。「年代物のライン葡萄酒（ラインブドウ）をこれへ」とゲオルク・ヴィルヘルム・フォン・シユヴァイニヒエン殿が叫んだ。「壇ではあまりにまだるっこい。馬の水桶（ウマノミヅバケ）になみなみと持て」。ライン葡萄酒が満杯の樽（タン）から桶の縁まで注がれた。ゲオルク・ヴィルヘルム殿は桶を力強い手でしっかと掴み、口許（クチノヘ）まで持ち上げると、息もつかせずぐうつと飲み乾し、ラインの美酒をハンガリア生まれの益荒男（マサアラオ）と女夫（メオト）にした。

並み居る貴頭の男女らは

仰天するやら震えるやら。

しかして殿は悠悠と桶を元にぞ戻しける。

改めてライン葡萄酒（ラインブドウ）が滔滔（トウトウ）と桶の中へ迸り、ゲオルク・ヴィルヘルム殿はこれを持ち、「しっかとしたる足取りにて」、一滴たりとも零すことなく、敵手に向かつて歩み寄り、酒戦（サケケン）の飲み物を差し出した。ちなみにこの愛国の壮拳（ソウケン）が行われたのは城館の中庭。ポーランド人の顔は死人のように蒼くなり、つと十字を切ると、片手を挙げて別



Ein schlesischer Zecher.

れを告げ、ひっそりと徒歩で城門から出て行った。ゲオルク・ヴィルヘルム・フォン・シユヴァイニヒエン殿は桶を腕に抱えたまま礼儀正しく貴賓を送って行き、賭けで贏ちえた素晴らしい六頭立て四輪馬車を、愛する祖国ドイツの酒豪の誉れの救済者として心楽しくうち眺めた。

後にこの名勝負はその全ての景物もろとも見事な彫刻となり、ヘレンⅡモツチエルミッツ城の厩舎上に飾られ、シユヴァイニヒエン家の一員が成し遂げた偉業の証として今日まで残っている。

## 六四六

### 黄金の驢馬

小さい町町は小さいなりにそれぞれ、諸民族は大きいなりにそれぞれ、お互いを綽名で呼んで誉めたり貶したりすることがしばしばである。スイス人を乳搾りとかなんとかという具合。シレジア人もご多分に漏れなかったが、これがあまり結構とは申し兼ねる。昔彼らは驢馬喰いと言われた。彼らは邦に初めて入って来た驢馬をでつかい兎と思ひ込み、潰して、焙いて、平らげちゃったとかがその理由。けれどもこのちよいと粗野な揶揄にはまるきり別の由来・起源もあるそう。オーダー河畔のブリーク近くに豊かな金鉱を持つ山並みがあり、黄金の驢馬と呼ばれる。ひとえにこの金鉱のお蔭でたっぷり飲み食いできた連中なら、驢馬喰いと言われても仕方あるまい。この山には——伝説によればだが——本当に黄金でできた驢馬が埋まっている由。テューリンゲン山地のゴルトラウター近くなる黄金の牡角鹿伝承と同じである。大勢がこの驢馬つ子を発掘しようと試みたが、皆目見つからなかった。三十年戦争時代、ブリークに宿営したスウエーデン軍の一連隊長（「陸軍大佐」）がこの財宝のことを聞き付け、せっせと掘らせた。シレジアから黄金の驢馬つ子を連れ出し、スウエーデンに乗って帰ったわけ。すん

でのところでこの黄金、連隊長殿の指に触れそうになった。人足たちがある穴蔵の深い通路で実際驢馬の皮を発見したのだ。そしてこの皮にドウカーテン金貨が何百枚も包まれていた。しかもこんな文句が記されて。いわく。

金貨がおいらの餌えきのさ。

近くにいるぞよ、母ちゃんは。

そこで、この素晴らしい驢馬つ子の傍にその母驢馬を見つけようと更にしゃかりきとなり、一同いやもう掘りに掘った。すると突然壁ががらがらと崩れ、穴掘り人夫たちと財宝を埋めてしまった。——フィツシュバツハ村の傍にキットナー山ベッセルがあるが、この山中にも黄金の驢馬が埋もれている。だれかが見つければ、フィツシュバツハは都市になり、驢馬の発見者は初代市長になる。黄金の驢馬でなければならぬのが残念だ。

#### 六四七 子どもたちの信心

既に中世テューリンゲンで子ども十字軍——これについては既に回顧してみた（DSB五八八）——が、訳の分からない衝動——これは突然自覚め、子どもらを大挙して異常かつ奇妙な行動に走らせた——に駈かられて立ち上がったように、ずっと近世ではあるがシレジアでもこれが起こった。信心に燃え群れを成して礼拝しようという熱病・衝動が一七〇八年突然子どもたちを襲った。この邦くにのさまざまな諸侯領、伯爵領、貴族領で、同一の日、しかもまだ氣候厳しい季節である二月の十四日に発生したのだ。子どもたちは朝まだき町町村からどつと野外へ繰り

出した。だれに誘われたわけでもない。六歳から十四歳までの男の子・女の子で、幾つも幾つも仲間の集団を作り、集団ごとに聖歌指導者を選んだ。これが終わると、それぞれの聖歌指導者の合図で子どもたちは地面に伏し、顔を下に向けたまま、静かに主の祈りを唱えた。それから再び立ち上がり、聖歌の内でも最も美しい唄を歌い始めた。「最愛のイエスよ、我らここに集いて」とか「時は確かに至れり」とか「悲しむなかれ、イエスがそなたを愛する限り」など。それから小さな聖歌指導者は詩篇や祈禱書から世相にぴったり合った説教をし、祈禱を捧げもした——しかも跪いて。それから祝福が行われ、閉式の聖歌が歌われた。解散に当たり、翌日の午前十一時および午後三時と次回の集會が決められ、全員に告げられた。この熱烈な信心熱は子どもたちの心をしつかり縛ったので、彼らは大人の言い付け・意向に逆らってさえ礼拝を行い、家から逃げ出した。そこでこのなんとも奇妙な野外集會を禁止、子ども狂信者たちをそれぞれの家、学校、教会での礼拝に引き戻すという強制措置を執らざるを得なくなった。——この事件で思い出すのは一四四八年シュヴェービッシュ・ハルの少年たちが巡礼熱に罹ったこと（D S B 八七九）である。

#### 六四八 ツォプテン山の話

都市シュヴァイドニッツ近郊に突兀たる一山塊がある。これは恐ろしくも絵のように美しい自然の景観に溢れており、もろもろの口碑に満ちている。このツォプテン山、あるいはツォプテン山にはシレジアの風見鶏の名がある。山の胎内は途方もない財宝で一杯だそう。かつて盗賊城が山頂に築かれていた。居を構えていたのは鉄鎚打者（ハンマーシュネー）としか呼ばれぬ騎士だった。この男、剣は用いず、鉄鎚を揮って人人を打ち殺したのである。最初の一撃を免れて

も、三度目で生き残れる者はいざ無かった。とうとうシユヴァイドニッツの市民たちが身を守ろうと敢然と立ち上がり、城は攻略され、城主と一味徒党の頭分どもは瓦礫の下に埋もれた。以後彼らは城の奥底で己の非道な所業を悔悟している。一五七〇年の昔、こんなことがあった。ある日曜日、ヨハンネス・ペーアなるシユヴァイドニッツの市民が、これまでしばしばしていたように、ツォプテン山頂へ散策をした。すると偶然以前には目にした憶えない洞窟に行き当たった。中から風が吹き出していた。彼は訝しくてならなかったが、中には入らず、帰途に就いた。しかしこの穴のことは日夜脳裡から去ることがなかった。次の日曜日ヨハンネス・ペーアはまたツォプテンに登り、例の洞窟を見つけ、勇気を出して中に踏み込んだ。巖の通路を歩いて行くと、巖窟部屋のようなものがあつた。硝子窓を通して中から明るい光が射して来る扉を三度叩いて歩み入つた。巖窟部屋には鍵盤が金銀の小型風琴があつた。ペーアが弾いてみると、まことに素晴らしい荘重な音色だつた。それから巖窟の中央に丸卓子があるのに氣付いた。卓子には丈高く、色蒼褪め、極めて痩せ衰えた三人の老人——騎士の普段着を纏い、平底縁無し帽を被っている——が懊悩の態で体を震わせながら坐っていた。三人の前の卓上には黄金の補強金具が付いた黒天鵞絨装幀の大判の書物が置かれていた。ヨーハン・ペーアは男たちに「アナタガタニ平安アランコトヲ」と声を掛けた。男たちはそれに対しぞつとするような声音で異口同音に「ココニ全ク平安無シ」と応じた。ペーアは男たちに近づきながらもう一度「主ノ御名ニオイテアナタガタニ平安アランコトヲ」と言つた。しかし老人らは疲れた声で震えながら「ココニ平安無シ」と囁いた。そこでペーアは丸卓子の間近に寄り、もう一度「主ナル我ラガイえず・インリヌトウスノ御名ニオイテアナタガタニ平安アランコトヲ」と言つた。老人たちはそれに全く応答せず、黒い書物を指し示し、それを開き、その書名を指差した。それには『服従ノ書』(『贖罪の書』)と記されていた。「あなたがたはだれなのです」とペーアが問うと、「我らは自らを知らぬ」と相手は答えた。「あなたがたはここで何をしているの

す」と更に問うと、「我らは最後の審判と我らの所業の報いをここで怖じ懼れながら待つておるのだ」との返辞。「どんな所業なのです」と訊き返すと、彼らは脇の巖窟部屋を指した。ヨーハンが帳を引き退けると、中には殺人の武器、頭蓋骨、ばらばらの骨、丸ごとの骸骨が累累と床に積まれたり、壁に下がったりしていた。「あなたがたはこうした殺人を犯したと認めるのですか」。——「そうだ」。「それは良いことです、悪いことですか」。——「おお、悪い、悪い」。「あなたがたはそれを心から悔いているのですか」。——「我らには分からぬ。もう訊きな」。老人たちはそれだけ言うと、前にも増して激しく体を震わせた。ヨハンネス・ベアは心底ぞつとして、急いでツォプテンベルクの洞穴から立ち戻った。彼には二度と洞窟が見つからなかった。

#### 六四九 市参事会員の頭

シユヴァイドニッツの市庁舎に石像の頭部が長いことあった。もしかするといまだに見られるかもしれない。これはある恐ろしい処罰を偲ぶ徴である。昔同市に強欲の悪魔に取り憑かれた年寄りの市参事会員がいた。鴉を一羽飼っていたが、老人は、これが自宅の窓から翔んで行って、壊れた硝子窓から市庁の計理室へ入り込み、金——部屋が嚴重に守られているので、しばしば錠の下りる金庫に入れず机上に放置されていることがあった——をくわえてまた戻つて来るよう仕込んだのである。この泥棒は長い間気付かれずにいたが、しよつちゅう帳尻が合わないのと、とうとう窃盗行為が判明した。そこで印を付けた貨幣を置いておくと、鴉はやはりこれを次次に運んで行った。これが証拠となつて市参事会員の犯行があつさり明るみに出た。そこで彼は——もう高齢ではあつたが——驚くべき刑を言い渡された。市庁舎塔の高い塔冠へ登らされ、自力でそこから下りて来るか、それができなければ、



高みでそのまま飢え死にせよ、というのである。参事会員は怯え震えながらよじ登り、それから危険な下降に掛かった。ほんの僅かな距離はなんとかなったが、ある石の手摺りまで来ると、それ以上は前にも後ろにも進めなくなり、そこで立ちすくんでしまった。雨露も凌げず、飲み物も食べ物もなく、遂には狂おしい飢えに駆られて我と我が肉を噛み割き、死が彼を憐れんでくれるまで——というのも人人は憐れんでくれなかったからだ——十日十夜立ち尽くした。その後老人が死んだその場所にその像が鴉付きで据えられたが、やがて嵐がこの前代未聞の残酷さの記念碑を塔から吹き飛ばし、その頭部だけがそっくり残って保存された。

### 六五〇 ライヒエンバッハの起源

オイレン山地とツォプテン山の間(20)に位置する都市ライヒエンバッハの起源はごく昔である。既に我らが主のご生誕後三〇〇年にルカ(もしかするとマイセン地方のルカの創設者か)なるローマの将軍がフランク族とヴェンド人を従えてこのシレジアの地に入つてここに陣営を張り、古きスラヴの神スヴァンテヴィイトの像が立っていたある森に神殿を建立した。ドイツに侵入して掠奪を恣にしたファン族の徒党が、九二五年メルゼアルクの勝利の会戦後、アスカニアのドゥーノとリンゲルハイムのジークフリートによつてここまで追跡され、ほとんど完全に殲滅されたのもこの平野である。ファン族どもは逃れられないと見て取るや、所持の財宝をクリンケン川に沈めた。しかし皇帝ハインリヒ一世の将軍の一人——その名はフンケンシュタイン——はこれを知り、主君に命じられて川を浚い、そこに町を建設した。川で豊かな財宝が発見されたのにちなんで、この町は豊かな川と呼ばれるようになった。

## 六五一 ライヒエンバツハの舞踏狂たち

舞踏狂とか跳躍狂といった民衆病は、中世には聖フアイトの踊りとか聖ヨハンニスの踊りとか名付けられ、その後も異なる時代、異なる地域にしばしば出現して人人を愕然とさせたものである。一〇二一年コルベック（コルビツヒ）での踊り手たち（DSB三一四）、一二三七年エアフルトの子どもたちがアルンシュタットへ踊りながら行った事件（DSB五八八）、一二七八年ユトレヒトでの踊り——これは橋の上でのことで、橋は崩壊し、踊っていた者たちは全て溺死した。一三七四年アーヘンで踊りながらの行進が発生、低地地方全体に蔓延した。同時期のケルンおよびメッツ——両市はごたまぜになった狂気と熱情に恥も外聞もなく支配された——における舞踏狂者ら。その他一四一八年シュトラースブルクその他での舞踏病、ボヘミアにおけるアダム派の踊り（DSB六八〇）等等。この民衆病が十六世紀になってからも起こった。それもシユヴァイドニツツから二哩のライヒエンバツハで。フィアシエリヒという男に子どもが五人いた。この内年高の子どもたち、バルバラという十三歳の女の子、九歳の男の子、それからもう一人七歳の女の子が、一五五一年の棕櫚の日曜日、三人同時に舞踏狂に取り憑かれ、見たことも聞いたこともない奇妙奇天烈な様子で踊ったり跳びはねたりし始めた。そして連日七時間か八時間、なんとも合点の行かないことだったが、あちこちそこいらじゅう、部屋から家へ、家から部屋へ絶えず跳びはね、旋回しながら踊って歩き、疲労困憊し、ヒイヒイ喘ぎ、その場でぱったり倒れて死んでも何の不思議もない状態だった。疲れ切って立っていることができなくなっても、踊り続けたい、といった具合に地面で頭を回したりうごめかせたりした。そしてとうとう暫く横になって死んだように眠った。それからたびたび、何か食べさせて、と頼み、

次いでまた跳びはねたり踊ったりし始めた。昼も夜も子どもらはろくすっぽし喋らず、時時皆一緒にげらげら笑い声を立てた。ある牧師(牧師)が聖句の助けを借りて癒やそうとし、九日間自宅に引き取ったが、全く徒勞に終わった。

## 六五二 悪魔の溝トイフエスラーム

シレジアなるシュトレレーレン(25)とヴァンゼンの間に位置するラツパース村(ドルフ)の近くに深い溝がある。オーラウ川(26)に流れ込むクルーン川へと延びている。人呼んで悪魔の溝。ある農夫だが、畑があまりにもしげしげ溢水の被害を蒙り、水があまりにも長く畑に滞留しているの、ある宵のこと、なんともやりきれず絶望して所有地の際に佇み、この苦難をどうしたら凌げようかと考えあぐんでいた。すると薄明かりの中を黒装束の余所者が近づいて来て、「なんで溜息ついてるんだね。水が多過ぎるってわけだな。あんたにやあ多過ぎても、貰えりやあ嬉しがる者もないさね。あんたとこの下男を七人、おいらに委せりや、その加勢で白白明けまでにやあ排水してやるぞ」と言った。これは農夫には願ったり叶ったり。早速七人の下男を呼び出して、余所者の配下に就くよう言い付けた。選んだ七人は性分の知れている連中ばかりで、ひどい悪態屋、手のつけられない博打好き、底抜けの大喧らいといった面。下男たちはぶつくさ文句を並べ、夜だから働きたくない、と逆らった。そこで農夫は「おまえら、わしの言うことが聴けねえなら、悪魔のところへ行くなええ」と怒鳴った。——すると彼らは出て行った。翌朝大きく、幅広く、長い排水溝が完成しており、畑からはすっかり水が引いていた。けれども工事をした者たちは戻って来なかった。ケツヒエン村(ドルフ)からバンカウまでの幾つもの畑に五体ばらばらの彼らが見つかった。彼らは悪魔の許へ行ったのである。

## 六五三 ブレスラウの鐘の鑄造

シレジアの目の一つ——往古この都市はそう謳うたわれた（もう一つの目はリーグニッツ）——であるブレスラウ（28）で、聖マゲダレーナ教会の鐘樓の鐘が鑄造されることになった。鑄造の準備が万端調つたが、親方は暫時その場を離れる時、徒弟に、何かに触るな、まして溶けている金属を断じて鑄型に流し込むな、と厳命した。しかし若者は怪しからぬ好奇心に衝つき動かされて栓栓をいじくり回した。すると思い掛けなく溶融した金属が流れ出し、鑄型に入つて、それをすっかり満たした。死ぬほど仰天した若者は震えながら親方の許もとに飛んで行き、一部始終を白状した。親方はかつと逆上し、剣を引き抜くなり、若者を刺して斃たおした。——アッテンドルンの鑄物師いもじが自分の職人を撃ち殺したように（DSB二八八）。それから急いで鑄造小屋に行き、鑄造は台無しになったに決まっている、と思ひながら仔細しさいに検分した。けれども、なんとまあ、素晴らしい仕上がりだった。そこで、怒りのあまり早まった所業に及んだことをつくづく後悔した。とは言え、今となつては隠おぼし果せぬ。その後すぐに彼は入牢し、判決が下された。死刑執行人の剣による死だった。彼が拘禁されている間に鐘は鐘樓に引き上げられていた。哀れな罪人は刑場へ引かれて行く時、どうかお慈悲ですから、末期まごにわしの鐘の音を聞かせてくださいと懇願した。そこでそういうことになったが、この鐘はあのクレンペンの鐘のように「哀れや若者、哀れや若者」（DSB一九九）と響いたかも知れない。以来だれか哀れな罪人が市庁舎から刑場へ連れて行かれるたび、いつも鳴らされる慣例になった。これは大きく重たい鐘で、五十回綱を引いて打たれると、更におのずから五十回揺れて鳴るのである。

ブレスラウの大聖堂には、司教座聖堂カテドラル参事会員の一人が死ぬことになる、常にひとりりで鳴る鐘があった。そ

の折には聖堂内陣に置かれた椅子の内その参事の席に白薔薇が一輪見つかるのだった。

## 六五四 忝ない<sup>ハイスゲン</sup>

皇帝ハインリヒ五世<sup>(世)</sup>がポーランド王ボレスラウスと交戦、ポーランド人をその笏の下に屈従させようとした時のこと、ポーランド人は錚錚たる人士から成る使節団を皇帝に派遣、講和を求めた。皇帝は使者たちを手厚くもてなし、とりわけ所有の宝物まで見せた。しかしその際いくらか尊大さをちらつかせ、「これなるはポーランドの衆を抑えるための貯えでな」と言った。こうした広言は誇り高きサルマティア人(「ポーランド人」を立腹させ、耐え難い思いをさせた。そこで使節団筆頭のスカルビク伯は指から高価な指環を抜くと、「黄金ハ黄金ノ許ニ置カレテコソ」と言いながら、それを皇帝の宝物箱に投げ入れた。こうして、ポーランド人もポーランド人の王も戦を行う黄金は何不自由無く持っているが、恃むのは黄金ではなく剣である、と仄めかしたのである。皇帝にも伯爵の言葉の意味がよく分かり、いかにも従容として「忝ない、忝ない」と応じ、宝物箱の蓋に錠を下ろした。これが由来で以降このポーランドの伯爵はその後裔ともどもハーベダंकなる添え名で通った。

## 六五五 ザガンなる名前

シレジアの西の外れの国境沿い、ポーバー河畔<sup>(地)</sup>居住のある男がこの地方を支配、ポーバー川の渡し場を監視し、旅人たちから税を取り立てた。シエルデ河畔の巨人(DSB一三七)のごとくまずは不当な行為だった。旅人

がやつて来ると、男は必ずこう叫んだ。「申せ、いずれから参った。申せ、いずれへ参る。申せ、荷物は何か」。――そこで男は周辺地域の人人からザーク・アン殿と呼ばれた。この場所は見事で稔り豊かだったし、他にも開拓者が移住、皆ザガン殿の良き隣人となり、段段に村ができ、村は都市に成長、そしてこの都市は今日に至るまでザガンなる名前を冠している。この都市がザガン公爵家を戴くようになってから、グログハウの司教座聖堂卿たちが公爵の一人を破門したことがある。この公爵に従いたくなかったのです。すると公爵は聖堂卿たちに和解を申し入れた。参事会員諸卿におかれては破門された者の城へ行くことは許されず、よし、許されたにしても来ようとはなさるまい、との理由で、公爵は彼らを、「ザガン市の」ボーバー橋上で話し合いをいたそうではござらぬか、と招いた。聖堂卿らが橋上に出るやいなや、その背後で橋板が水中に落ちた。公爵の命令で橋の下に何人かの漁師が隠れていて、準備万端調えていたのである。それから公爵は司教座聖堂参事会員に向かつて厳かに口を切り、こう問い掛けた。「さて、諸卿、手短に仰せられよ。示談を受け入れるやいなや、歌いたいか、跳びたいか。「歌いたい、殿、歌いたい」。うろたえた聖堂卿らはそう返辞して、和議を受け入れ、己が身を解き放つために公爵を破門から解き放ち、聖堂内陣で時禱、徹宵の祈り、晩禱、弥撒を歌い上げる暮らしに戻った。

## 六五六 グラーツの異教の姫君

異教時代のこと、グラーツの町と地域の女領主として一人の姫君が君臨していた。彼女は奢侈な生活を送り、女魔法使いだった。加えて力が強く、しばしば退屈凌ぎに頑丈な蹄鉄を両手でぐいと折つてのけた。また練達の射手でもあり、背に負うた弓を引き絞ればグラーツの城から国境のアイファース村近傍の大きな科の木を射当てること

ができた。ある時彼女は、どちらがより遠矢とひやを射ることができるか、弟と競きそつて高額の品を賭けた。姫が射通した距離は弟の倍で、矢が落ちた場所には記念として先の突った二つの石が置かれ、これはその後長いこと立っていた。もつとも姫の生活ぶりは悪評あふん芬ふん芬ふんだったので、命を狙ねらわれたが、その魔力によって仕掛けられた罠わなから逃れたものである。けれどもとうとう捕らえられ、下城ニゲレシロヌから上城オホシロヌに通じる城門脇の大広間に壁で囲まれて閉じ込められた。彼女の像が石に彫られ、その壁に嵌はめ込まれたが、これはいまだにある。かつては城の緑の広間にも姫君の肖像画が描かれていたし、異教時代からある古い小さな礼拝堂にはその髪が収められていた。髪は美しく、黄色で、床に立った長身の男がやつと届くほどの高さの釘に吊ぶりかかっていた。この異教の姫君は城中を亡霊となつて徘徊徘徊し、しばしばその姿を見られた。しかし嘲あざわらつたり侮辱したり、是非とも髪を引ひき抜ぬいてやろうなどと思わなければ、何も害は加えられない。こんなことを企てたある兵士は冷たい手で彼女から横よこつ面に平手打ちを喰くわされ、片頬かほが「瘡あざになつて」生涯真つ青なままだつた。本当に毛を引ひき抜ぬいたもう一人の兵士は姫の亡霊に搔かきむしられたりして散散さんさんひどい目に遭あはされた。これはこの兵士に懇願された朋輩が髪を前述の場所に持つて行つて吊るすまで続いた。このお姫様がそもそもどういう身分の人だったのか、名は何だったのか、研究者たちは大層頭を悩ました。ポヘミアの女王リブツサではなく、またその姉カーシャあるいはテトカテトカでもないことは幸い分かつた。ポーランドの女性支配者ヴァンダヴァンダ——キリスト紀元七二八年等等に支配した——でもないそう。ポヘミアの乙女戦争戦争の発頭人はつちうじんである魔法使いのヴラスカヴラスカだったかどうかはなんとも決しかねる。これを要するに、かの姫君がだれだったかなんてことは、シナイ山の高さその他もろもろと同様同様、土台分つちだいぶんかりっこないのである。

## 六五七 巫女の科の木

アイファース村——グラーツの城なる異教の姫君が矢を放ってここまで届かせた——はグラーツからたつぶり一ボヘミア哩離れて小さなビーレ川河畔にある。この村にはかつて至極古い科の木の大樹があり、辺り一帯で有名だった。この樹はグラーツの城の異教の塔と同じくらい歳経している由。あまりにも樹齡が古いので時時枯れるのだが、それでも再三新たに芽吹いたのだ。この科の木の樹上に巫女が住んでいて、グラーツ市の未来のこともをたくさん予言した。いわく。グラーツ目指してトルコ軍が襲来するだろう。そして石橋を通り、環に兵を進めるが、大敗北を喫するだろう。キリスト教徒軍が城から打って出て、市の立つ広場で彼らを斃すからだ。しかしこのようなことが起こる前に、鶴が一群れ、麴麴屋の麴麴置き台を翔び抜けるだろう、と。——グラーツの異教の姫君がこの巫女だったかも知れない、と姫の出自やら名前やらを穿鑿した人人には思い付かなかったらしい。それにしても、巫女とトルコ軍についてのその予言という話や伝承がドイツの民衆の中で結び付いているのは奇妙なことである。なにしろ巫女が、ここで最後のトルコ兵が打ち倒されるだろう、と予言した、という市町村が幾つもあるのだ。とりわけ、テューリンゲンのザールフェルト近郊のアイバでは、最後のトルコ兵が麴麴焼き竈で焼き殺されるだろう、となつているし、ヴェラ谷ではボルヒフェルト橋の上で最後のトルコ王が死ぬだろう、である。フォイクトラントやライン河畔等等でもこうした伝説は生きている。バンベルクには、トルコ兵どもがライン河で駒に水飼うだろう、神よ、守りたまえ、という伝説が行われている。シュヴァーベンにも巫女の洞窟なるものがある。



## 六五八 ロムニッツの奇蹟の泉

グラーツからさほど遠からぬハーベルシュエアーアト山地(ゲゼル)の麓、小エルベの諸泉から僅か二哩(アウ)のところ(1)にグロムツィ(1)という奇蹟の泉がある。異教時代既に夥(おびた)しい人人が巡礼しにやつて来た。この泉はありとあらゆる奇蹟の徴(しよ)を顕(あらわ)したからである。この邦(くに)が平和に恵まれるであろう、とか、豊作となるであろう、という時には、水面(みなも)には小麦、燕麦(えんはく)、柏(アイヒ)の実が一杯浮かび、巡礼たちの目と心を喜ばせた。しかし、戦と死が到来する場合には、戦と死の恐ろしい象徴である血と灰が泉に浮かぶのだった。そこで奇蹟の泉の周囲には次第に村ができた。この村が古ロムニッツ(1)で、お馴染みの語源穿鑿(せんさく)学によれば、村名はグロムツィから来ているのだそう(2)な。グロムツィ、ロムツィ、ロミチ、ロムニッツとね。しかしむしろエルベ(1)タイニッツ(1)から二哩(アウ)の、ブデイン郡にあるフルメッツ市(1)の方がこの泉にちなんで名付けられているのかも知れない。しかし古文獻は、水量豊かな奇蹟の泉グロムツィはグラーツ近郊(1)に湧(わ)いていた、とはつきり語っている。

## 六五九 トロスキイ城の姉妹

フルメッツにはベルカ・フォン・ドウクスおよびライパー(1)一族の殿たちが居を構えていたが、彼らの一人がフルメッツのオットー・ベルカ・フォン・トロスキイ(1)のことを記録している。トロスキイは巖城(1)であつて、その巨大な巖角(いわかど)は城壁によつて互いに結ばれていたし、現在もそうである。二つの巖角の内、より高いのはバーバ(1)(母さん)、

もう片方はパンナ（嬢ちゃん）と呼ばれている。昔これらの巖角上に二人の姉妹が住んでいた。彼女たちがいともしく愛しく愛し合うことさながら犬と猫のごとしで、宗教も仲を割いていたからなおさらだった。二人は毎朝塔の窓から顔を出してドイツ語とポヘミア語で罵詈雑言をぶつけ合い、舌を突き出し、拳を振り立てた。彼女らはトロスコヴィッツの村にそれぞれ別別に教会を建立した。顔を合わせずに済むようである。これらの教会ないし礼拝堂は山上の巖角——現在は塔の廃墟がある——と全く同じ距離離れている。姉妹たちは死後も安息を得られず、深沈と静まりかえった夜、山上の塔の窓穴からがみがみ声が巖角の間を越え、また山下へと、いまだに響き渡るのだ。

訳注

- (1) ライプツィヒ Leipzig 現ザクセン州の大都市。現地ではライプツシュと呼ぶ。州都ドレーズデンより人口が多い（現人口約五十四万五千）。九〇〇年頃バルテ川とエルスター川の合流点近くに作られたソルブ人の居住地が元。一〇一五年に「ウルプス・リプツィ」Ulps Litz (「科の木」の町)。ソルブ語 Ulpsa, || 科の木) とした文献がある。一一六五年マイセン辺境伯オットー富裕伯が都市権と市開権を与えたのが都市の起源。これと共に二つの大教会——聖トーマス教会と聖ニコライ教会——が建立され、ドイツ人東方進出の重要拠点として発展する。また、神聖ローマ帝国の二つの大街道「王の道」Via Regia——フランクフルト・アム・マインからシレジアのブレスラウ（現ポーランドのヴロツワフ）に至る——と「帝国の道」Via Imperii——ローマからオグダー川河口シユテティーン（現ポーランドのシユチエチン）に至る——との交叉点に位置する地の利にも恵まれた。一四〇九年末、ドイツ最古の五大学の一つ（他はハイデルベルク、ケルン、エアフルト、ヴェルツブルク。ライプツィヒ大学はハイデルベルク大学に次いで古い。）であるライプツィヒ大学——ゲートは十六歳の時同大学で法学を学び、約三年で病氣退学している——が創立される。一四三九年マイセン辺境伯領はザクセン選帝侯領（一三五六年以降）、次いでザクセン公国に所屬、同公国は更にザクセン王国（一八〇六一—一九一八）となった。一五三九年ルターとユーストウス・ヨナス（DSB五二六注参照）によってライプツィヒに究極的に新教が導入された。一五四六年、四七年シユマルカルデン戦争に襲われる。三十年戦争の災禍は極めて大きく、人口は大幅に減少、一六三一年から四二年に掛けて五回も攻囲され、一六四二年から五〇年まで同じ新教徒であるスウェーデン軍に占領された。ファウスト博士の呪文書 Doktor Fausts Hollenzwang DSB六〇八注参照。

- (3) 占ワシム棒ワシムツク Wünschelrute. DSB四八八注参照。
- (4) 二枚のニクロッシェン貨幣 zwei Zweigroschenstücke. 銅貨であり、価値は低い。徒弟が満足したのは、これが「子こ解げ銭ぜに」Hecke(groschen) (DSB八六本文、DSB六〇八注参照)だからであろう。
- (5) ブランデンブルク Brandenburg. ホーエンツォレルン家のブランデンブルク辺境伯領＝選帝侯領は一六一八年、神聖ローマ帝国の域外にあったプロイセン公国(一七〇一年王国)と同君連合領となる。一七〇一年以降プロイセン王国の一部のように扱われ、一八〇六年神聖ローマ帝国が解散すると、プロイセン王国ブランデンブルク州。
- (6) ブランデンブルク十六グロッシェン貨幣を一枚 ein brandenburgisches Sechzehngroschenstück. 銀貨。ターラー(＝グルデン)銀貨一枚は三十グロッシェン。
- (7) (尖端せんたんを) 逆さかに削くがれた黒い羽根はね洋筆えんぴつと共に nebst einer schwarzen Feder. verkehrt geschnitten. 紙片は悪魔との盟約書で、これに自分の血——この伝説ではそうではないようで些か疑問——で署名すると、盟約が成立する。そこで筆記用具も禍禍しい。悪魔はなんでも逆さま事や左が好きなので、この場合も「逆さかに削くがれた」ペン先。鶯うす鳥どりなどの左の翼から切り取った羽根は、羽根のカーヴが右利きの書き手に使い易いが、これをわざわざ逆さかに削くって左利き用に仕立てたものか。
- (8) 聴罪師 Beichtvater. 聴罪司祭。懺悔聴聞僧。「聖体拝領」といい、「聴罪師」というからには、この徒弟も親方もカトリック教徒なのである。新都市ライプツィヒでは珍しい。本来魂を担保にして悪魔と盟約ができるのはカトリック教徒に限られるようだから、これはこれで自然なのかも知れない。尤もDSB六一八では新教徒が精霊ガイスト＝魔物デーモン召喚をやるうとしているが……。こうしたことどもについて識者のご高教を戴ければ幸いである。
- (9) ヴィッテンベルク Wittenberg. 現ザクセン＝アンハルト州の都市で一九三八年以来正式にはルターシュタット・ヴィッテンベルク(現人口四万七千弱)と呼ばれる。一五〇二年ヴィッテンベルク大学創立。ルターはここで神学教授となった。一八一七年ハレ大学と合併、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg となり、現在に至る。
- (10) 大市 Messe. ライプツィヒの大市 Leipziger Messe (大定期市)は極めて有名で、その起源は遠く十二世紀中葉に遡る。ためにライプツィヒはフランクフルトと並び交易都市として栄えた。
- (11) この馬車旅にはほんの数時間しか掛からなかった und brauchen zu dieser Fahrt nur wenige Stunden. ヴィッテンベルク・ライプツィヒ両市間の現在の距離は約六十六キロ、自動車で約一時間。近世初頭のドイツの街道(概ね悪路)を数時間馬車で揺られるだけで済んだのであれば、極めて速かつたと言える。
- (12) 八桶はちかめ樽 Achmeimerfaß. ハアイマー＝約四八〇リットル入りのワイン樽。

- (13) アウアーバッハの酒蔵 Auerbachskeller. 普通「Auerbachs Keller」と表記する。天井が穹窿になっている地下ワイン酒場で、ライプツィヒで最も著名かつ二番目に古い店（一五二五年創業。旧市街中心部、現在はアーケード街メードラー・パッサージュ Märlterpassage の下にある。ゲーテ『ファウスト』第一部で、ファウストを連れメフィストフェレスが現れ、とぐろを巻いていたライプツィヒ大学の学生たちをからかう場の舞台。メフィストとファウストが消え失せた後、ワイン樽に乗って戸口から出て行くのを見た、と学生の一人が言う。現在酒場の入り口には老ファウストとメフィストの銅像が立っている。「アウアーバッハの酒蔵」はDSB一四一で名称のみ初出。
- (14) エルスター Elster. ここではチェコに源を発し、現ザクセン州と現テューリンゲン州を流れる白エルスター川のこと。全長二五七キロ。ザール川の右（東）の支流。ハレで合流。
- (15) プライセ Pleiße. 白エルスター川の右（東）の支流。ライプツィヒで合流。
- (16) 洗礼者聖ヨハネの祝日 Johannistag. 六月二十四日。これまでも今後もDSBに再再出。
- (17) アイレンブルク Eilenburg. 現ザクセン州ノルトザクセン郡の都市。ライプツィヒ北東約二十キロ、ムルデ河畔に位置する。山城のアイレンブルク（オイレンブルク Eulenburg とも）城（九世紀から十世紀に掛けて築城。本質的部分は保存されている）がある。貴族アイレンブルク（オイレンブルク）家発祥の城。ラウジッツ辺境伯（一〇八一年以降）、マイセン辺境伯（一〇八九年以降）となつたハイน์リヒ一世（大ハイน์リヒ Heinrich der Ältere. 一〇七〇頃—一〇三）は元来アイレンブルク伯。出身はヴェッティン家 Wettiner。アイレンブルクは一八一六年ウィーン会議の決定によりザクセン王国——ナポレオン支配下のフランセンと同盟したお蔭で一八〇六年公国から王国に昇格していた——がプロイセン王国に割譲しなければならなかつた北半部（プロイセンと同盟したセン州となる。南半分、約五分の二がほぼ現ザクセン州）に属した。ベヒシュタインが「現在はプロイセン領」とわざわざ断つているのは、彼がDSBを執筆した当時はザクセン王国領でなくなつてからさして歳月が経っていないかつたからである。
- (18) 伝令官 Harold. 中世ヨーロッパ封建君主の公式使者。外交官の前身。王侯家によつてそれぞれ特殊な装いを凝らした。小都市ロイエンブルク Stadtlein Leuenburg. DSB七三三では明らかに同じ町を指しながら「ラウエンブルク」Laenburg としている。「ロイエンブルク」は未詳だが、「ラウエンブルク」は現ポーランドのレンボルク Leborg で、DSBが執筆された当時はプロイセン王国ボンメルン州ラウエンブルク郡郡庁所在地ラウエンブルク・イン・ボンメルン。ただし「小都市」などではない。
- (20) ア「傍点訳者」イレンブルク男爵 Freiherr von Eilenburg. DSB二七三では「オイレンブルク男爵」Freiherr von Eulenburg である。ベヒシュタイン自身もこの話の結びで「オイレンブルク」としている。どうも迂闊な人ですな。
- (21) 老毫れ das alte Fell. 俗語 die alte Haut（年寄り）の更に粗野な表現。

- (22) その祝婚歌——「我ら是非にかの伯爵の事どもを歌いかつ語らん」 seinem Hochzeitlied: „Wir singen und sagen vom Grafen so gern.“ の物語詩は「かにも以下の詩句で始まる。
- „Wir singen und sagen vom Grafen so gern. / Der hier in dem Schlosse gehauset. / Da, wo ihr den Enkel des seligen Herrn. / Den heute vernählen, beschnauset.“
- (23) オーシヤッツ Oschatz. 現ザクセン州ノルトザクセン郡の都市。「ザクセン心臓部の都市」 die Stadt im Herzen von Sachsen とされる。
- (24) マイセン辺境伯 Markgraf von Meissen. マイセン辺境伯領の成立は一四二三年。
- (25) …… 類に噛まれ傷のある、また楽天家とも添え名されたフリードリヒ Friedrich …… mit dem Wangenbid, auch der Freudige genannt. D S B 四六八参照。また D S B 四六九、D S B 四七〇注にも記したが、「向う見ずのフリードリヒ」 Friedrich der Freidige であって、「楽天家」ではない。マイセン辺境伯 (在位一二九二—一二三三)、テューリンゲン方伯 (在位一二九八—一三三三) フリードリヒ二世。
- (26) 「ドイツ」王アードルフ・フォン・ナッサウ König Adolf von Nassau. D S B 四六九注参照。ルッカの会戦の一方の当事者は彼ではなく、彼を殺した対抗王アルブレヒト一世である。なるほどアードルフもドイツ王に選ばれてから、テューリンゲンやマイセンに干渉しようとしたが……。
- (27) 方伯の父、ろくでなしのアルブレヒト des Landgrafen Vater. Albrecht der Entartete. D S B 四六八注参照。
- (28) 二束三文で um einen Pappentiel. 二万銀マルクで売った (D S B 四六九参照) とか。一重量マルクは「ケルンマルク」 Kölner Mark であればほぼ二三四グラム。現代の銀価格なら二万円余。これで計算すると二万銀マルクでも四億円余に過ぎない。
- (29) 弟である善良な辺境伯デイツマン seinen Bruder: den guten Markgrafen Diezmann. D S B 四六八にフリードリヒの弟として名が出る。デイツマンとも呼ばれるデイトリヒはラウジッツ辺境伯 (デイトリヒ四世。在位一二九一—一三〇三)、オストラント辺境伯 (在位一二九一—一三〇三)、一二九八年以降テューリンゲン方伯 (デイトリヒ一世)。ドイツ王アルブレヒト一世 (ハプスブルク家出身でアードルフの対抗王。一二九八年ゲルハイムの会戦でアードルフ・フォン・ナッサウを敗死させた。D S B 六注参照) が大軍を率いてオストラントに侵攻した時、デイトリヒとフリードリヒは武装した市民、農民およびブランシュヴァイク騎兵集団の先頭に立ち、一三〇七年五月三十一日、ルッカ Lucca——現テューリンゲン州アルテンブルガー・ラント郡の小都市——近郊の会戦で完膚無きまでに打ち破った。かくして中部ドイツにおけるヴェッティン家の支配権が確立された。しかしながらデイツマン＝デイトリヒは同じ一三〇七年十二月ライプツィヒで死んだ。後世の——不確実な——伝承によれば、一三〇七

- 年十二月二十四日ないし二十五日、フィリップ・フォン・ナッサウなる人物によりライプツィヒの聖トーマス教会で暗殺された、  
 というが、死去はおそらく一三〇七年十二月十日。
- (30) プライセン邦 *Pfalzland*. プライセ川兩岸の、アルテンブルク地域に属する一帯に対する中世の呼称。テューリンゲン東部で、  
 現在のアルテンブルガー・ラント郡に含まれる。首邑はアルテンブルク。
- (31) メランヒトン梨 *Melanchthons-Birnen*. *DSB*三二七および同注参照。
- (32) M・アンドレーアス・ゲヒ *M. Andreas Göch*. 未詳。
- (33) ツェッセン (ツェッシエン) *Zessen (Zoschen)*. 現ザクセン＝アンハルト州ザールロイナ市の一部ツェッシエン。現人口千人ほ  
 ど。まして十六世紀半ばには寒村に過ぎなかつたであらう。そのの牧師さん(カトリック教会の司祭に相当)が君侯の眷顧を得て、  
 一躍、ますます由緒ある都市ベガウの教区監督(カトリック教会の司教に相当)になれたのだから、メランヒトンに深謝し続けた  
 のも当然である。
- (34) ザクセン選帝侯アウグスト *Kurfürst August von Sachsen*. 兄モーリッツの死去に伴い、後を継ぐ。在位一五四三―一八六年。  
 一シヨック *ein Schock*. 六〇。
- (35) 君侯立学校 *Fürstenschule*. 君侯＝領邦領主が設立した学校。特にザクセン選帝侯のそれ。君侯立学校の嚆矢は、ザクセン公にし  
 てザクセン選帝侯モーリッツ(在位一五四一―一五三)により、一五四三年、宗教改革により閉鎖された諸所の修道院を転用して創  
 立された「児童のための邦立学校」*Landesschule für Kinder*である。これに倣い新教諸邦に同種の学校ができた。
- (37) ライスニヒ *Leisnig*. 現ザクセン州ミッテルザクセン郡の都市。フライベルガー・ムルデ川の深く切れ込んだ河谷およびこれを見  
 下ろす位地にある。現人口八千余。
- (38) 脂穴 *Schmalzgrube*. 意味不通。識者のご高教を俟つ。固有名詞なら現ザクセン州エルツゲビルクス郡イエーシユタットの一  
 部。僅かな住民しかいない。かつて稼動していた石造りの溶鉱炉が残っている。
- (39) 子どもに答を惜しまぬ人は、神のお手数省めます *wer seinen Kindern die Ruthe giebt, spart dem lieben Gott eine Mühe*. 原文は  
 上記の通り。
- (40) フライベルク *Freiberg*. 現ザクセン州ミッテルザクセン郡の郡庁所在地。大学都市(フライベルク鉱山学校から発展したフライ  
 ベルク工科大学 *Technische Universität Bergakademie Freiberg*は有名)にして鉱山都市。
- (41) 煖房部屋 *DSB*五六八参照。
- (42) イエナの降誕祭の夜の悲劇 *die Jenaische Christnachttragödie*. *DSB*六〇八参照。

- (43) ザクセン領エルツ山地 *Sächsischer Erzgebirge* エルツ山地は現ザクセン州とボヘミア——現チェコ *Czechy*——の国境となっている中級山地。チェコ語クルシュネー・ホリ *Krusné hory*。ザクセン側の最高峰はフィヒテルベルク *Fichtelberg* (一一二四・七九メートル)。チェコ側の最高峰はクリーン・ベッツ *Klimovec* (一一二四三・七メートル)。
- (44) シュネーベルク *Schneeberg*。現ザクセン州エルツゲビルクス郡の鉱山都市。大刀 *Pallasch*。一般には胸甲騎兵の持つ重い直刀。このこでは警吏の帯剣。
- (46) 己が幸運の鍛冶屋になろう *seines Glückes Schmied werden*。「自分自身で幸運を掴み取ろう」の意。「てんでがてんでの幸運の鍛冶屋」*Jeder ist seines Glückes Schmied*。(運を切り拓くのは自分したごと) という諺がある。
- (47) すぐ跳び伯ルトヴィヒの話 *die Geschichte Ludwig des Ent-Springers*。「跳躍伯」*der Springer* と添え名されたテューリンゲン方伯ルトヴィヒの話は *DSB 四二五*、*DSB 四二六*、*DSB 四二七* にある。ザンガーハウゼンは彼が逃亡した先の町。
- (48) いけずの藪 *der heimische Busch*。ヘビシュタインはしばしば *heimisch* (普通「その土地の」) 意の「気の置けな」意を *hämischt* (「悪意ある」「意地悪な」) の意で用いている。従ってここでは「いけずの(＝意地悪な)藪」と訳語を当てた。
- (49) 帽子小人 *Hütchen*。 *DSB 三二〇* 参照。
- (50) 悪戯妖精 *Kobold*。「ローボルト」*Kobold* といえば、鉱物コバルト *Kobalt* の語源であり、鉱夫に意地悪を働く一面、恩恵を施してくれることもある山の精、人家に棲み着いて、悪戯もするが、あらゆる家事に手を貸してばっばと手際良く片づけ、お家の繁盛・安泰を図ってくれる家精、以上二種が一般的だが、この伝説に登場するのはそのどちらでもない。
- (51) 隠れ頭巾 *Nebelkappe*。「霧頭巾」。妖精や小人の呪具である。被っている内は人間の目に見えない。
- (52) 聖ベンノ *Sankt Benno*。一〇一〇年頃ヒルデスハイム近郊に生まれ、一一〇六年六月十六日(？) ザクセンのマイセンで死去。エルベ河畔およびバルト海沿岸に住むヴェンド人の改宗に献身したので、ヴェンド人の使徒と添え名された。一〇四〇年司祭に叙品され、一〇六六年マイセン司教となる。一〇八五年神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世により罷免されるが、一〇八八年復帰する。この中断を無視すれば確かに彼は四十年間マイセン司教だった。
- (53) マイセン *Meißen*。現ザクセン州マイセン郡庁所在地。現人口二万七千。マイセン陶磁器製造——一七〇八年以降ヨーロッパ最初の陶磁器製造——で国際的に名高い。ドレーステン<sup>1</sup>の北西二五キロ、ライプツィヒの東方七五キロ、フライベルクの北方三〇キロ、エルベ河畔に位置する。九六八年マイセン司教座が置かれ、以後後代司教が君臨したので、ザクセンの文化的発展のため格別な意義を持つ都市となった。大聖堂とアルブレヒツ城がとりわけ美しい。
- (54) マイセン辺境伯オットー *Markgraf Otto zu Meißen*。在位一一五六一—九〇年。この伝説では一一〇七年死去たとされている

- ようだが、前掲注のようにこの年の前年一一〇六年に死去したのは聖ベノである。在世期もまるでずれているが、オットーは一一九〇年一月十八日に死んでいる。享年六十四、五歳なので、当時としては亡くなくても不自然ではない。後世富裕伯と添え名される。銀を産出する鉾山都市フライベルクを創設したのはこの人。オットーはまたライプツィヒの市教会聖ニコライ教会を建立したり、修道院を創設したり、修道院に土地を寄進したりしており、なかなか信心深く、反教権派ではなかったようだが……。
- (55) あの手は壺の中へ落ちたのだ。 Sie ist in den Topf gefallen. in den Topf fallen (壺(ないし鍋)の中へ落ちる) という慣用語は今のところ見当たらない。(存じの向きは是非「高教書。尤も、一八二〇年の文献 (Allgemeine Literatur-Zeitung)」に「ドイツのタウバー川河畔地域では野菜畑を荒らす土籠を捕らえるため、油薬を掛けた深い壺を縁まで地中に埋める」という記事があった。土籠や蜘蛛が暗くなるとやって来て、これに落ち、壺の内側がつるつる滑るので出られなくなり、捕まる由。ベヒシュタインの頭にこうしたことがあったとすれば、辺境伯に「あの坊主の予言はうるついている内に壺の罫に落ちて、こちらへやって来られなくなつたのだ」と言わせたつもりとなる。
- (56) 洗礼済んだら、溺らせちまえ。 erst getauft, dann ersäuft. 原文は上記の通り。
- (57) ノイシュタット・ヴィーゼンタール Neustadt-Wiesenthal. 現ザクセン州エルツゲベルクス郡の町オーバーヴィーゼンタールか。  
 フイヒテルベルク山麓の保養地。
- (58) ボヘミアのルーティツから来た亡命者 ein Exul aus Lutz in Böhmen. 「エクスール」Exul (被追放者・亡命者) とは、十七・八世紀、信仰のためボヘミアやザルツブルクから追放された、ないし亡命して来た新教徒のこと。ルーティツはルーティツLucitzか。
- (59) 甘藍の種 Kapsamen. ベヒシュタインは Kappus, Kohl (カプスは甘藍) と注記している。「カプザーメン」Kapsamenは農民や園芸家の使う言葉らしい。
- (60) 花が咲き、熟した blühen und reifen. キャベツを育てても、収穫せず放置しておく、と、結球が割れ始め、臺が立って、やがて小さく黄色い花が咲く。花が終わると莢ができ、莢が熟し終わる(＝枯れる) と種が中に入っている。これはすぐに採取せず、莢のまま風通しの良いところに一一二週間吊しておき、それから莢を叩いて種を集める。種は黒みがかつた褐色。
- (61) きれいなおねんず (＝念珠) よう Schöne Paterneln (Paternosterkügeln) 主の祈りなど祈禱を捧げる時つまぐる数珠 (ドイツ語「ローゼン克蘭ツ」Rosenkranz) の玉。
- (62) ハウエンシュタイン Haenstein. 今は廃墟となっているが第二次大戦後まで存続したハウエンシュタイン(チェコ語ハウエンシュタイン) 城城主の奥方か。城はエルツ山地の南側、現チェコ領内の自治体クラスニー・レスKránský Lesにある。



- (63) アンナベルク Annaberg. 現ザクセン州エルツゲビルクス郡の都市アンナベルク＝ブーフホルツ Annaberg-Buchholz (一九四九年両市が合併)。中世アンナベルクは銀鉱山業の中心として繁栄し、十六世紀初頭八千の住民を擁してドイツ最大の都市の一つだった。一四九一年近くのシュレツケン山 Schreckenberg (標高六四八・八メートル) に豊かな銀鉱脈が発見され、これが知れ渡るとどつと人が押し寄せ、一四九六年町ができ、一四九七年都市の権利を得た。その翌年にはアンナベルク貨幣鑄造所が設立され、一五五八年まで銀貨アンナベルガー・シュレツケンベルガー (DSB 六二四参照) ——シュレツケンベルガーは他の諸都市でも鑄造された——を発行した。
- (64) ザクセンの紋章を den sächsischen Wappen. この場合「ザクセンの紋章」とは盾型の中に交叉した両刃の大刀。
- (65) 狐が死ねば、皮残す stirbt der Fuchs, so gilt der Balg! 原文は上記の通り。因みに疾風怒濤時代のゲーテにこの題の詩がある。
- (66) 親方ヘンマーリング Meister Hammerling. 「ヘンマーリング」Hammerling の本来の意味は「鎚ハンマーを持つ者、職権の徴として鎚ハンマーを携えている者」。「マイスター・ヘンマーリング」は、悪魔、死刑執行人、道化師、そしてここにあるように山の精の綽名である。
- (67) 年老いた司祭 ein alter Priester. これだけではカトリックの司祭かプロテスタントの牧師か分からない。時代が宗教改革後ならこの辺りは新教地域なのだが、時代は不明である。しかし馭者の呼び掛けが原文では Hochwürdiger Vater. なので、「神父様」と訳し、これに合うよう Priester も「司祭」とした。
- (68) 勢子 Holzleute. 上記訳語を当てたが毛頭自信がない。Holzleute とは木材を扱う業種の人人 (大工、指物師、木樵) や森の精たちせしのこと。狩猟とは関係ないはず。
- (69) クロイツブルクのトレフフルト近くでのヘラーシュタイン騎士ヘルマンみために wie die Ritter Hermann von Hellerstein bei Treiftut in Creuzburg. 二つの固有名詞「ヘラーシュタイン」と「トレフフルト」は入れ替えなければならない。ベヒシュタインの誤り。DSB 四四八で、トレフフルト騎士ヘルマンは酪酩したため巨大なヘラーシュタインの巖上から乗馬もろとも顛落した、とある。
- (70) シュレットタウ Schlettau. 現ザクセン州エルツゲビルクス郡の小都市。東でアンナベルク＝ブーフホルツに接している。
- (71) 分農場 Vorwerk. 莊園の大農場から離れた場所にある農場。この語はDSB 五九八に初めて出る。
- (72) チョパウのせせらぎ Fließchen Zschopau. 「せせらぎ」Fließchen とあるが、水源近くではともかく、全体としては決して小川ではない。エルツ山地中央部フィヒテルベルクの北斜面に発して、ザクセンのフライベルク盆地に注ぐ全長一三〇キロ、流域面積一八四七平方キロに及ぶ河川である。

- (73) ヴォルケンシュタイン Wolkstein. 現ザクセン州エルツゲビルクス郡の都市。この町を見下ろすルネッサンス時代に造営されたヴォルケンシュタインの館は現在もあり、これの前身は中世盛期ここに居を構えたヴァルテンブルクの殿たちの城塞だった。
- (74) アウスイヒ近郊でのフス派との会戦 die Hussiten-Schlacht bei Aussig. ボヘミア王国におけるフス戦争(一四一九—一四三九)。フス派と神聖ローマ帝国およびカトリック教会との戦い(中重要な会戦。一四二六年六月十六日ザクセン・テューリンゲン軍とフス派(のち焚刑に処されたボヘミア人司祭ヤン・フスの首唱した教会改革運動の支持者)が、当時マイセン辺境伯領だったアウスイヒ・アン・デア・エルベ(現チエコ・ウースチー州の都市ウースチー・ナト・ラベム Usi nad Labem) 郊外で行われた。フス派の部隊二万五千がこの町を攻囲したのを救出しようとして来援したマイセン、ザクセン、オーバーラウジッツ、テューリンゲン諸邦の兵からなる公称三万六千の軍隊がフス派と衝突、連合軍中一万二千が斃れ、壊滅的打撃を蒙った。
- (75) 聖杯の兄弟たち die Brüder des Kelchs. フス派のこと。聖杯はフス派の象徴となった。聖杯はミサと聖体拝領の際全ての信者が(パンだけでなく)パンとワイン双方の秘蹟に与るべきだ——ヤン・フスが主張した「二重聖餐」——ということを支持する徴だったのである。
- (76) シヤルフエンベルク城 Burg Scharfenberg. 現ザクセン州マイセン郡の自治体クリップハウゼンに属するシヤルフエンベルクにある。城からはエルベ河谷の素晴らしい眺望を楽しめる。九三八年ザクセン朝ドイツ王国初代国王——ベヒシュタインが記しているように「(神聖ローマ) 皇帝」ではない——ハインリヒ一世(捕鳥王)が築城した、というのは十九世紀の術学的捏造に過ぎず、築城はドイツ人東方殖民時代の一二〇〇年頃、文書に初めて記されたのは一二二七年である。さしあたっては代々のマイゼン司教が所有したが、十五世紀初頭から二十世紀半は近くまでフォン・ミリティッツ家が城主。ベヒシュタインはここで「魔墟」Trummer と記している——なるほど三十年戦争の際スウェーデン軍に占領され、部分的に破壊され、更に一七八三年居館は火災のため魔墟となった——が、三十年戦争後ルネサンス様式で改築され、現在はもとより十九世紀にも人が居住している。
- (77) フィッツトゥーム Vitzthum. テューリンゲンの古い、かつ幾つにも分かれた貴族の家系。フィッツトゥーム・フォン・エックシュテットはその一つ。
- (78) フォン・ミリティッツ von Milwitz. ザクセン・マイセンの古い貴族の家柄。分家の一つミリティッツ男爵家 Baron von Milwitz は現代まで存続している。一四〇三年から一九四一年までこの一族がシヤルフエンベルク城を所有した。
- (79) ミリティッツ家の一員ハウボルト deren einer Hauptold. ハウボルト・フォン・ミリティッツ(一六一三—一九〇)。ザクセン選帝侯国徴税監督官。
- (80) ドレーズデン Dresden. 現ザクセン州州都。人口約五十三万六千。十六世紀半ばまではまだまことにぱっとしない都市だったが、

- (81) ザクセン公国、次いでザクセン選帝侯国、次いでザクセン王国の首都となると、数世紀に亘り文化的・経済的に繁栄するようになる。三十年戦争中でもドレーズデンは一度も掠奪・破壊の憂き目に遭わなかった。ただしベストと飢餓および当時一般的だった経済的不況によって発展は阻害された。三十年戦争後の歴史は極めて変転が激しい。
- 森 Heide. 「曠野」ではない。ここでは「ドレーズナー・ハイデ」Dresner Heide、すなわちドレーズデン管轄下にある大きな森林地帯(現在約六一三三ヘクタール)のこと。現ドイツにおける最大の市有林の一つ。中世から第一次世界大戦まではザクセン宮廷の狩猟場として用いられた。一四八四年以降ドレーズデン山林局が管理。民衆がここへ立ち入って燃料用の木の枝など森林資源を勝手に取ると、市の森番(山林官)にそれを没収されたあげく犯罪として処罰された。
- 柏の実 Eichen. 柏の実(団栗)は、とりわけ秋と春には飼葉の結構な補いになった。馬糧ともしたが、この貧しい女の場合は、僅かに養っている豚や山羊(都市でも飼われていた)の餌だろう。
- ラーデベルク街 ラデベルク街 die Radebergische Straße. ドレーズデンからラーデベルク(現ザクセン州パウツェン郡の都市。ドレーズナー・ハイデの縁にある)へ通じる街道。
- (84) 水無し川 ダス・ヴェアローレネ・ヴァッサー das verlorene Wasser. 「ダス・フェアローレネ・ヴァッサー」das verlorene Wasser なし「フェアローレネス・ヴァッサー」Verlorenes Wasser は一部では固有名詞だが、現ザクセン州のエルベ河谷盆地右端に見られる幾つかの小川を纏めていう俗称でもある。これらはドレーズドナー・ハイデからヘラーを経てレスニッツに至り、更にそこからフリーデヴァルトまで延びるエルベ河谷盆地北縁のほぼ二〇キロに亘る弓形地に存在。深さ三メートル、長さ数百メートルの溝となつているところもあり、形状はまさに水の無い小川である。豪雨の際には水が流れる。
- (85) ハンス・ヤーゲントイフェル ハンス・ヤーゲントイフェル Hans Jagenteufel. 「ヤーゲントイフェル」=「ヤーゲン」jagen(狩る) +「トイフェル」Teufel(悪魔)。「悪魔を狩り立てる」の意か。なにやら恐ろしい感じの姓だが、かつて実在——たとえばルター派の神学者にして教育者ニコラウス・ヤーゲントイフェル(一五二六—一八三)——したし、現代でもある。なお「悪魔の許へ追い立てる」zum Teufel jagenは「根絶する」「追放する」の意。
- (87) (88) 跣足修道士 バートーバー Bartiber. DSB四七〇注参照。
- (88) (87) (86) マイセン辺境伯 ハインリッヒ Heinrich der Erlauchte. Markgraf zu Meißen. DSB四六七注参照。
- (89) 「革」涼鞋 サンダレン Sandalen. 原文は上記の通り。ただし昔のヨーロッパのサンダルは皮革製だったので、「革」を補った。これなら植物製とは違ってカタカタパタパタ鳴る。木靴はもとより石畳や敷石の上では大層賑やかな音を立てる。
- タッシェンベルク タッセンベルク Taschenberg. ドレーズデン中心部に位置し、ベヒシュタイン在世時にはザクセン王国王城の隣の地区。当時

- はタツシエンベルク宮殿(Taschenbergpalais (現在は跡地に大ホテル「タツシエンベルク宮殿ケンピンスキー」が建っている)があった。
- (90) ビルナーイッシエス門に Pirnaischen. ビルナーイッシエス門(ビルナ門)はドレーステンの防禦市壁に配置された六つの市門の一つ。ドレーステン旧市街の南側にあり、ビルナ市の方角に向いていた。一八二〇年市壁撤去の際取り壊された。
- (91) ザクセン選帝侯ヨージハン・ゲオルク四世 Kurfürst Johann Georg IV. zu Dresden. 原文は上記の通り。「ドレーステン選帝侯」Kurfürst zu Dresden とらう呼称はないので訳語の「く」にくにした。在世一六六八―一六九四年。一六九一年以降選帝侯。
- (92) 雨暴風と雪嵐 Regensturm und Schneegestöbere. ベヒシュタインは資料とした年代記からこれらの語をそのまま引用している。古語かつ方言であろう。二語の内後者の合成後半部は「Gestöbere」ではなく「Gepügel」(「鞭打つ」prügeln からの造語)かも知れない(「ト」が転訛で変わることがあるのか、とは思わぬ)。「Gepügel」および「Schneegestöber」の「ン」は「びし」ひしと鞭打つような雪嵐、吹雪」を指す戯言である。
- (93) ザクセン・アイゼナハ公ヨージハン・ゲオルク Herzog Johann Georg zu Sachsen-Eisenach. ヨージハン・ゲオルク二世(一六三四―一六八六)が死んだのは一六八六年九月十九日で、場所はテューリンゲンのヴァイルヘルムスタール近傍の狩猟館である。
- (94) エルベ河畔のビルナ Prima an der Elbe. 現ザクセン州ゼクスイッシエ・シュヴァイツ・オストエルツゲビルゲ郡の都市。北で州都ドレーステンに接している。さて、この伝説の内容自体にはほっとさせられるが、遺憾ながら、この僅か五年後の一六三九年四月末、市はスウェーデン軍に襲われ、五箇月に及んだ抗戦も結局無益で、ひどい掠奪を蒙り、荒廃した。
- (95) 免罪符売りヨハンネス・テッツェル der Abblaprediger Johannes Tezel. Tezel は Tezel の誤記ないし誤植なので、片仮名表記は「テッツェル」とした。DSB三三三三注参照。
- (96) ルートヴィヒ・温良方伯 Ludwig der Milde. 第三代テューリンゲン方伯。フリードリヒ赤髭王・帝(神聖ローマ皇帝)を総司令官とする第三次十字軍に参加したが、病に冒され帰国する際、キプロス島への航海中死んだ。DSB四五六六注参照。
- (97) 配下の皇帝の封臣 sein kaiserlicher Lehnsherr. 訳者にはベヒシュタインがだれを指しているか類推できない。
- (98) ブーフホルツ Buchholz. 現ザクセン州エルツゲビルクス郡の都市アンナベルク・ブーフホルツ Annaberg-Buchholz (一九四九年両市が合併)。アンナベルクについてはDSB六二二三注参照。
- (99) ラウジッツ地方 現ブランデンブルク州南部から現ザクセン州東部に掛けての歴史的名称。
- (100) ラウバン Lauban. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県(かつての下シレージエン)の都市ルバン Luban.
- (101) ゲルリッツ Görlitz. 現ザクセン州ゲルリッツ郡郡庁所在地。上ラウジッツ最大の都市。ラウバン(ルバン)の西方二十四キロに

- ある。
- (102) バトラー指揮下の龍騎兵一個連隊 ein Regiment Butlerischer Dragoner. バトラーとは多分リチャード・ウォルター・バトラー Richard Walter Butler (一六〇〇頃—三四)。来歴は一六三〇年代初めまで不明。親戚の縁故で神聖ローマ帝国アイルランド軍団die Irische Legionの將校となつたのを振り出しに、軍総司令官アルブレヒト・フォン・ヴァレンシュタイン(一五八三—一六三四)により龍騎兵連隊長(「大佐」)に任じられたアイルランド人。しかしまた、皇帝フェルディナント二世の密命によりヴァレンシュタインを暗殺した(一六三四年二月二十五日)將校の一人でもある。皇帝からポヘミアの伯爵位を受けたが、暗殺遂行の十箇月後の十二月二十五日に戦死。なお、三十年戦争当時の龍騎兵は騎銃ないし小型マスケット(銃)と長剣で武装した乗馬歩兵だと思われる。もとより全員すれつからしの傭兵ともて掠奪に慣れた乱暴者揃い。
- (104) (103) 筒長靴 Kanonen. 胴の部分が長い、大抵は上部に折り返しが付いた乗馬用長靴。「カノーネンシュテューフェル」Kanonenstiefel。斬撃剣 Haudegen. 十六世紀イスパニアとイタリアで考案され、ヨーロッパに広まった重い直剣。歴史的な剣は両刃だが、これは片刃。ただし先端二十センチほどは両刃で、剣先まで左右対称になっていた。騎馬部隊の武器として採用された。こうした部隊の兵員には巧みな剣術よりも単純な刺衝・斬撃の方が重要だったからである。
- (106) (105) シュレッケンベルガー銀貨 Schreckenberger. DSB六二四注参照。
- (106) (105) リュッツェンの会戦 die Schlacht bei Lützen. 一六三二年十一月六日および十一日ライプツィヒ南西リュッツェン近郊で行われた戦い。三十年戦争の際新教徒派の大立て者だったスウェーデン王グスタヴ(ドイツ語読みではグスタフ)二世アドルフ(一五九四—一六三二)と大元帥(「將軍中の將軍」の意)ヴァレンシュタイン率いる神聖ローマ皇帝軍との戦い。前者はこの時戦死。ただし指揮を引き継いだ極めて有能な傭兵隊長ベルンハルト・フォン・ザクセン＝ヴァイマル(DSB二八本文およびDSB六〇五注参照)のお蔭で新教徒側が勝利を収めた。王の死後、スウェーデン軍は幾つもの兵団に分かれ、ドイツ各地を転戦、掠奪を働いた。その名も高き不滅のハンス・フォン・リップパッハ殿 der bekannte unsterbliche Herr Hans von dort. dortは直前の Rippach) を受ける。この部分はベヒシュタインが挿入したおふざけである。「ハンス・フォン・リップパッハ」とはかつてザクセンで武骨な田舎地主を指した呼称である。リップパッハはナウムブルクからライプツィヒに至る昔の郵便馬車街道の最後の宿駅で、滑稽な田紳が少なくなかったようだ。十九世紀の九十年代でもまだこの表現はライプツィヒで使われていた。ゲーテは『ファウスト』第一部二二八九—二二九四行でこれを踏まえ、メフィストフェレスとファウストをからかおうとした大学生とうまくやり返したメフィストの問答としている。
- (108) シュタインベルク Steinberg. ラウバン(ルバン)の町の傍に聳える山。現在その麓は公園。

- (109) ツィッタウ Zittau. 現ザクセン州ゲルリッツ郡の都市。人口はゲルリッツに次ぐ。ザクセン州の最東南端にあり、チェコ、ポーランドと国境を接している。
- (110) 静かな人たち das stille Volk. 民衆は小人族を憚ってこのように婉曲に呼ぶことがあった。「小さな人たち」das kleine Volk とも。
- (111) 田吾作どん Peterbauer. 原文は上記の通り。直訳「農夫ペーター」。
- (112) 拳骨羹汁 Prügelsuppe. 原文は上記の通り。ひどい打撃を指す戯語。
- (113) リューベツマル Rubezahl. DSB六四〇注参照。
- (114) オルバースドルフ Obersdorf. 現ザクセン州ゲルリッツ郡の自治体。ツィッタウ南方ツィッタウ山地の麓にある。
- (115) ハイネヴァルデ Hainewalde. 現ザクセン州ゲルリッツ郡の自治体。ドイツとチェコ国境のすぐ近くにある。
- (116) オイビン Oybin. ツィッタウの上手、ツィッタウ山地のごくしい巖山(標高五一四メートル)。山上には神聖ローマ皇帝カール四世(在位一三五五―七八)・ボヘミア王カレル一世(在位一三四六―七八)が隠居所として築いた城郭と一三六九年創建のケレスティン会派修道院の廃墟がある。山麓には小さな自治体オイビンがあり、この村の歴史は山上の城と密接に結び付いている。
- (117) それからこれを測った狐が更に付け加えた分 und was der Fuchs, der sie gemessen, noch drein gegeben. は、なんのソウや。皇帝の寝台 皇帝の椅子 den Kaiserbette und den Kaiserstuhl. 原文は上記の通り。
- (118) 仔羊胴 Lammstäuche. 「ラムスバオホ」Lammstauchは永代借地料としての貢租の一つである内蔵を抜いた仔羊。たとえば、クンネベルクヒレームビルト伯爵家記録集時代別文書目録 Regesten des Archivs der Grafen von Henneberg-Römhild Nr. 323 (1375. Juni 9)にはチーズの塊ごと共に再再貢納の記述がある。
- (120) ミカエル鶏 Michelshühner. 原文は上記の通り。「ミヒャエリスフーン」Michelshuhn は四半期間始日 Quaterberの一つである大天使ミカエルの祝日 St. Michaelstag (九月二十九日)に貢租として支払う鶏。
- (121) アルンシユタット近郊の乙女の跳躍 Jungfernsprung bei Arnstadt. DSB五八六参照。
- (122) ヘルムスドルフ Hemsdorf. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の都市イエレニャ・グラJelenia Góra(ドイツ名ヒルシユベルクHirschberg)の一部ソビエスゾフ Sobieszów。
- (123) ヴアルムブルン Warmbrunn. バート・ヴァアルムブルン Bad Warmbrunn。現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の都市イエレニャ・グラの一部チュエプリツェ・シロンスキエニスドルイ Cieplce Śląskie Zdrój。リーゼンゲビルゲの麓にあり、十三世紀以来温泉療養地として知られている。熱い硫黄温泉。
- (124) キュナスト城 der Burg Kynast. ポーランド語ザメク・ホイニク Zamek Chojnik。十三世紀後半にピヤスト家のポレスワフ二世公

が築城した山城。一三六〇年から一九四五年までシャッフゴツチュ家(後掲注参照)の所有。改築、再建などを経たが、一六七五年落雷により完全に焼失して廃墟(主塔や城壁は残っている)となった。一九六〇年以降北稜堡が改築され、山荘となった。ホイニク(キユナスト)山(標高六二七メートル)——南東部はいわゆる奈落谷を見下ろす一五〇メートルの切り立った絶壁——山頂にある。美姫クニグンデの物語は極めて有名。

(125) アルバート Albert. 原文は上記の通り。しかしながら向こう見ず方伯フリードリヒ Friedrich der Freidige (楽天方伯) der Freidige ではなく。ベヒシュタインは一貫して間違えている。DSB四六八本文および注参照)の父親なら、アルバートではなく、ろくでなし方伯アルブレヒト Albrecht der Entartete (DSB四六八本文および注参照)である。

(126) テオドーア・ケルナー Theodor Körner. 一七九一—一八一三年。文人、劇作家。リュッツォウ少佐の指揮するリュッツォウ義勇兵団 Litzkowsches Freikorps (ナポレオンの支配に抗する解放戦争の一翼を担った)の副官として戦傷死。

フリードリヒ・リュツカート Friedrich Rückert. 一七八八—一八六六年。文人、言語学者、ドイツ東洋学の創始者。

(128) (127) シャーフゴツチュ伯ヨーハン・ウルリヒ Johann Ulrich Graf von Schaafgotsch. シャッフゴツチュ Schafgotsch 家はシレジアとポヘミアの古い貴族一門(カトリック)。男爵(一五九二年以降)。伯爵(一六五四年以降)。帝国直属伯爵(一七〇八年以降)。

一三六〇年騎士ゴツチュ(ゴットハルト Gotthard)・シャッフ——シャッフゴツチュ家の創始者——がキユナスト城を与えられ、シュヴァイドニッツ公領の封臣となった。以降一九四五年までこの家系が城主。なお一六三五年に処刑されたのはトラッヘンベルク男爵ハンス・ウルリヒ・シャッフゴツチュ(一五九五—一六三五)。誕生日は八月二十八日。彼は神聖ローマ皇帝軍の將軍で皇帝軍総司令官ヴァレンシュタインの側近だった。ヴァレンシュタインと個人的に密接な関係があったことから皇帝フェルディナント二世の不興と疑惑を買い、ヴァレンシュタインが皇帝の密命により暗殺される一日前——一六三四年二月二十四日逮捕され、一六三五年七月二十三日レーゲンスブルク(現バイエルン州。帝国議会がここで何度も開催されている)の中央広場ハイドブラッツで斬首された。因みに「シャッフ」はドイツ語「シャーフ」Schaf(羊)に由来する。この伝説では、狼が羊を喰ったこともシャッフゴツチュ將軍横死の駄目押しの子兆とされているわけ。

(129) ヨーハン・アンドレアス・ティーマ Johann Andreas Thieme. 十七世紀前半キユナスト城支配下の上ギーアス村で聖職に就いていた由。彼は、誕生時さえ示されれば、その時の星辰の位地から人の運命を予言することができたとか。

(130) イザヤ書が主の来たる日をこう予言しているように。すなわち、天の諸の星とはしの宿は光をはなはず日はいでてくらく月はその光をかがやかむかるべし。ヤ wie Jesajas weissaget vom kommenden Tage des Herrn: die Sterne am Himmel und sein Orion scheinen nicht helle, die Sonne gehet finster auf und der Mond scheint dunkel. 原文は上記の通り。現行ルター訳ドイツ語聖書と

- (131) は僅かながら綴りの違いがある。「視よエホバの日(中略) 来り(中略) 天の諸の星とはしの宿は光をはなたず日はいでてくらく月はその光をかやかさざるべし」(旧約聖書イザヤ書十三章九—十節)。
- (132) 例の慣れた狼の前脚に串の回転を委せ gab ..... den zahnen Wolf den Spiß zum Drehen in die Pote. 料理用炉前面の切り込みは横たえられた焼き串(先の尖った金属の棒)に刺さった大きな肉塊は絶えず串を回転させて均一に火に当てなければならなかった。串の一端に取り付けられている把手なしの回転輪を下働きの男の子など(「焼き肉回し」と呼ばれた)が回すのが普通だったが、串を軸とした、あるいは何らかの工夫で回転を串に連繋させた大きな中空の車輪状のものを犬を入れ、犬が輪の内側の段に前脚を掛けて歩き続けることにより輪が回り、焼き串が回るという仕掛けもあった。因みに、焼き串を回すように仕込まれた犬は、ドイツ語では Bratenwenderhund、英語では turnspit dog といひ、しばしば火からそう遠くないところで長い間歩き続ける難行苦行を強いられた。歩きくたひれて脚を留めるとひびたかれもした。
- (133) でなくとも長いこと新鮮な肉を賞味したことがなかった der wohl ohnehin lange kein frisches Fleisch geschmeckt hatte. 中近世のヨーロッパでは、長い冬の間、秋に拵えた塩漬け肉や燻製肉で凌がなければならなかった。この物語のように三月初めならこうした加工肉は既にかなり臭く、かつ堅くなって、不味だったことだろう。
- (134) 焼き肉回し Bratenwender: 焼き串を回す者、あるいはそのための器具(ぜんまい仕掛けなど)。英語では roasting jack という。リーゼンゲビルゲ Riesengebirge. 現ポーランド南西部から現チェコ北東部に抜がるシレジア地方(ドイツ語シュレージエン Schlesien、ポーランド語シロンスク Śląsk、チェコ語スレスコ Slezsko)——詳しくはDSB六四五注参照——とチェコのボヘミア地方にまたがる中級山地スデーテン Sudeten (ポーランド語・チェコ語スデーティ Sudety)——長×三二〇キロ、幅三〇—五〇キロ——の最高部分。長さ四〇キロに及ぶ。直訳すれば「巨人山地」。ポーランド語カルコノシエ Karpaty、チェコ語クルコノシエ Krkonose も「巨大な山」の意。現ポーランドと現チェコの国境地帯で最も高い山山の連なり。とは申せ最高峰ドイツ語シュネーコッペ(後掲) Schneekoppe = ポーランド語シュニエジュカ Śnieżka = チェコ語スニエジュカ Sněžka は標高一六〇三メートルに過ぎない。古い文献では「山地」Gebirge、「雪の山地」Schneegebirge、あるいは「ボヘミア山地」Böhmisches Gebirge と記されているに過ぎないが、この名が「リーゼンゲビルクス協会」Riesengebirgsverein によって十九世紀末に広まった。「ゲビルゲ」は「山脈」とも訳せるが、日本の巍峨たる山脈の語感と異なり、かなり低いなだらかな山並みである。
- (135) 神よ、御心のままに Gott walt's! 原文は上記の通り。
- (136) 御心のままに、神よ Walt's Gott! 原文は上記の通り。この唱え詞でも前掲の詞と意味は同じはずだが……。
- (137) リューベツァール Rubezahl. 名のみDSB六三五に初出。スデーテン山地の最高部分リーゼンゲビルゲをしろしめしていた山の



精。シレジアにたくさんのドイツ人が定住するようになってから、ドイツ語圏の山の精として大いに人気を博した。この山の精、実は太古からリーゼンゲビルゲに棲み着いていたわけではない。既に一二五〇年頃、ヘッセン地方の町フルダや、フランケン地方の町ヴェルツブルクの辺りにこの名のコーボルト（家の精のコーボルトではなく、高山の頂きや鉱山の坑道に出没する山の精）が存在、ティロル地方（元来全てオーストリア領。第一次大戦後南ティロルはイタリア領となる）の一六一九年の年代記にもリユーブツァーゲル *Rubzager* という名称が出て来る。リーゼンゲビルゲには中世、ハルツやヘッセンから金や錫の鉱床を求めて多くの鉱夫が移り住み、この傾向は十六—十七世紀のティロル、特にツィラー谷からの殖民によって強められたので、リユーベツァールはドイツ系の人人が自分たちの新たな定住地に持ち込んだ鉱山の精と思われる。とは言うものの、一度土着すると、その性格は変転する。昔日の金や錫の鉱石層が涸渇して鉱山業が振るわなくなり、代わりに木材伐採と牧畜が広まり出すと、空模様を気にしながら山仕事をする者たちは、リユーベツァールを、天候の精だ、と考えるようになる。また、一攫千金を夢見てこの地方に入り込む山師どもにとつては、あらゆる自然の目眩まし——鬼火、濃霧、大雷雨など——を用いて山に隠された宝を守護する精霊となり、一方、家畜の餌にする木の葉、燃料にする柴、薬用の草根木皮などを求めて彼の縄張り内を彷徨う慎ましい庶民には、なるほど時折荒っぽくからかいはするが、親切に山案内をしてくれることもある人間の形をした存在というイメージとなった。

(138) シュライバースアウ Schreibersau. ベヒシュタイン在世当時はプロイセン王国シュレージエン州。現ポーランド南部オポーレ県ウチェハ Uciecha。オポーレ県はポーランド十六県の中最もドイツ系住民の数が多し。

(139) 大 ラート山 <sup>グズクロー</sup> das große Rad. 原文は上記の通り。しかし「高ラート山」<sup>グズクロー</sup> das hohe Rad であろう。これはリーゼンゲビルゲで四番目に高さ山（標高一五〇九メートル）。

(140) コッペ山 Koppe. 「シュネーコッペ」Schneekoppe（標高一六〇三メートル。リーゼンゲビルゲ最高峰）か、「小コッペ」<sup>クラウゼ</sup> Kleine Koppe（シュネーコッペの北の側峰）か。

(141) その球 <sup>グロ</sup> sein Ball. 十七世紀、リユーベツァール伝説を集めて出版したヨハンネス・プレトリウス編著「しれじあナルりゅうべつああるノ魔物譚」——*Johannes Praetorius: Daemonologia Rubinzahii Silesii*. Leipzig. Arnstadt. Rudolfstadt. 1662-73. これはタイトルはラテン語だが、ドイツ語で書かれ、タイトルには更に極めて長いドイツ語の副題が付いている——を基にして、後世、幾つかのリユーベツァール話を加えて編集された「怪奇にして世にも名高き精霊リユーベツァールの既知および未知の物語」*Bezaunte und unbekante Historien von dem abenteuerlichen und weltberühmten Gespenste dem Rubenzahl*.——刊本としては Insel-Verlag. Leipzig 1920. およそこれを基にした Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1983. 版がある——中に「リユーベツァールが球戯をする」71. *Rubenzahl schlägt den Ball*. が見える。なお、ヨハンネス・プレトリウス修士<sup>ドクトル</sup>——本名ハンス・シユ

- ルツェ Hans Schultze——(一六三〇—一八〇)は幼少時三十年戦争を体験したドイツ(現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク郡サルツヴェーデルの都市カルベの一部となっているツェトリンゲン Zehringen 生まれ)の文人・博識家・編纂者。伝説、民話を収集、編纂、出版した。それらは時代好尚を反映して、荒削り、武骨、粗野で、今日の嗜好には概して適合しないが、当時のドイツの民衆の感覚、習俗を知ることができる。
- (142) プロテウスの存在 ein Proteus. ギリシア神話に登場する海神。変幻自在。
- (143) コーボルト的性格 Koboldnatur. コーボルトには鉱山の坑道などに出没する山の精と人家に棲み着いている家の精があるが、ここではベヒシュタインは前者を指しているであろう。
- (144) この精はリューベツァールなる名を我慢でせず dieser Geist den Namen Rübzahl nicht leiden konnte. リューベツァールの原型はリーベツァーゲル(Riebezegel)で rübe は古高ドイツ語の hrib = rauh(荒荒しい)、zagei は中高ドイツ語で「尻尾」「端っこ」を指す、という説があるが、要するによく分からない。「蕪」Rübe + 「数える」zahlen、すなわち「蕪数え」である、とこじつめたのは民間語源学で、この解釈が更に物語を創造した。その話ではさしも偉大な山の精が、片想いした上誘拐して来たシレジア王のお姫様エンマに、物の見事に満くらかされて逃げられたので、付けられた罅名となっている。エンマは女の武器である手練手管を巧みに使い、山の精に栽培している蕪を正確に数えることを要求、惚れた弱みで精が何度も何度も数え直している間に、リーゼンゲビルゲの域外に逃げ延びて、無事恋人に保護された。由来が由来だから、以来こう呼ばれると——尤も至極だが——誇り高き山の精は激怒するわけ。罅名が付いた詳しい経緯、罅名で呼んで莫迦にした人間への仕返し、また気に入った人間に施した親切については、ベヒシュタインが私淑した郷土テューリンゲンの大先輩 J・K・A・ムゼーウスが「リューベツァールの伝説」Legenden von Rübzahl と題して頗る面白い話を書き、『ドイツ人の民話』Die Volksmärchen der Deutschen 全三巻の一冊「リューベツァールの物語」ドイツ人の民話(国書刊行会、平成十五年)として鈴木が訳出している。
- (145) ヨハンネスのご主人様 Dominus Johannes. 葉草類は洗礼者聖ヨハネの祝日(六月二十四日)当日やその前後に採取すると最も薬効がある、と民間伝承で言われる。葉草採集した者が標記のように唱えて崇めたとすれば、「ヨハンネス」は祝日名から来ているのかも知れない。
- (146) スイスのピラトゥス湖 der Pilatus-See in der Schweiz. スイスのピラトゥス山とその山麓にある湖に纏わる伝説については DS B 一〇参照。
- (147) 植物採集をしていた医学生いびの頸根くびっこをへし折った einem botanisirenden Mediziner brach er Genick. この話は前掲書(前掲注 14 参照)中の「リューベツァールが男の頸を捻る」21. Rübzahl drehet einem das Genick umb. である。なお、以下「前掲書」と

- 記す場合は、J・ブレトリウス編著「リユーベツァールの既知および未知の物語」Johannes Praetorius: *Bekante und unbekante Historien von Rübezahl*. Insel-Verlag, Leipzig 1920. を基にした Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1983. 版を指す。
- (148) かの黄金の驢馬<sup>カウツク</sup>の des güldenen Esels. 「黄金の驢馬」とはローマ文学中唯一完全な形で伝わる二世紀の人アプレイウス作『変身譚』あるいは別名「黄金の驢馬」Apuleius: *Metamorphoses* / *Asinus aureus*. の主人公、鼻に化けようとして哀れや驢馬になつてしまつた青年ルキウスのこと。驢馬の耳は長い。この話は前掲書中の「リユーベツァールが男を驢馬の耳にする」26. Rübezahl bildet einem Eselsohren ein. である。
- (149) 天狗鼻<sup>ナゲノビ</sup> Nasenkönig. 「鼻の王様」といえば、長い鉤鼻をした王様の絵（一六六〇）もあるし、とてつもなく鼻の長い少年を主人公とした現代の絵本のタイトルでもあるが、この語自体はリユーベツァール譚には見当たらない。この話は前掲書中の「リユーベツァールが男に長鼻をくっつける」24. Rübezahl setzt einem eine lange Nase an. である。
- (150) 手巾<sup>ハンカチ</sup> Fanzettlein. 原文は上記の通り。直訳すれば「ちごぢやな手巾」。
- (151) 草刈り娘<sup>カサキリメ</sup> Grasemagd. 民間ではこのように「グラゼマークト」と呼ばれた。「グラスマークト（草+娘・女中）Grasemagd のこと。厩の牝牛のために牧草を鎌で刈り、運び帰る娘・女中。この話は前掲書中の「リユーベツァールが娘に山羊の髯を生やす」25. Rübezahl macht einer Magd einen Ziegenbart. である。
- (152) 穀<sup>カ</sup>棒<sup>カサ</sup>を穀物<sup>カサモノ</sup>にはなくお互いの頭や背中に打ち下ろしてしまふ unwillkürlich die Flegel nicht aufs Getraide, sondern auf ihre Köpfe und Büchel. この話は前掲書中の「リユーベツァールが何本かの穀棒に化ける」27. Rübezahl nimmt eine Gestalt etlicher Flegel. である。
- (153) 山林<sup>ヤマノ</sup>橋<sup>ハシ</sup> Holzapfel. 小なくて、酸っぱいヨーロッパ産野生種林橋。秋に果実を付ける。
- (154) 自分の庭園<sup>ツボミ</sup> in seinen Garten. つまり「リユーベツァールの庭園」Rübezahlgarten である（DSB六四〇参照）。
- (155) ……女は走り戻り、捨つてしまつた葉を探さうとしたが無駄だった。 Vergebens rannte sie zurück, die weggeworlenen Blätter zu suchen. この話は前掲書中の「リユーベツァールが葉っぱをドゥッカーテン金貨に変える」56. Rübezahl verwandelt Blätter in Dukaten. である。
- (156) ハーネブツテ<sup>ハネブツテ</sup> Hanebutte. 「ハーゲブツテ」Hagebutte のこと。他にも名はいろいろある。英語「ローズ・ヒップ」rose hip。さまじまの薔薇科の植物（犬薔薇 Hunds-Rose。玫瑰 Japan-Rose. Kartoffel-Rose もこれに数えられる）の果の総称。小さい種——これは一緒に食べない方がよい——がたくさん入っているが、果肉は甘酸っぱく、ビタミン類、特にビタミンCに富む。シロップあるいはジャムに用いられる。

- (157) 葡萄酒羹汁 Weinsuppe. 酸塊すくもや木苺など漿果を使う場合、ワインスープレのレシピはこんなところか。漿果を搗り潰す。砂糖、サワークリーム、辛口赤ワイン、水と混ぜ、弱火で三、四十分煮る。熱くしてあるいは冷やして、前菜ないしデザートとして供する。
- (158) 接骨木の実 Hollunderbeeren. 西洋接骨木 (ドイツ語ホルンターHollunder、英語エルダーelder、フランス語スユローsureau) の実は初めは赤く、完熟すると黒くなり、シロップあるいはジャムに用いられる。果肉は甘酸っぱく、ヴィタミンCを含む。
- (159) 三プフェニヒ銀貨 Dreier. 一般に「ドライヤー」は低価値の銅貨として知られており、その場合は三ヘラーに過ぎないが、これはプフェニヒ貨がまだ銀貨だった時代のものではあろうか。
- (160) お伽話のルンベルシュティルツヒェン Rumpelstüchchen im Kindermärchen. KHM五五「ルンベルシュティルツヒェン」に登場する小妖魔は、ある娘を援助して王妃にしてやるが、その報酬は王妃の初子はつこ。ただし、おれ様の名——すなわちルンベルシュティルツヒェン——を言い当てたら、子どもはよこさないでいい、と言う。王妃は偶然妖魔の名を聞き知り、面と向かって告げる。当てが外れた妖魔はかんかんになり狂って、自分の左足を両手で持ち、体を真二つに引き裂いてしまう。
- (161) ……できると、乾酪チーズは純金だった。aber als dieß endlich geschah, waren die Käse pures Gold. この話は前掲書中の「リユーベツァールは凝乳を黄金に仕立てる」ことがてき。57. Rübzahl kann aus Quarz Gold künstl. べた。
- (162) 古いボヘミア・グロッシェン銀貨が二枚 zwei alte böhmische Groschen. 「ブラハ・グロッシェン」Prager Groschenのこと。初めて製造されたのはボヘミア王ヴァーツラフ二世 (ポーランド王としてはヴァツワフ二世) 治世下の一二〇〇年頃、銀を豊富に産出したクトナー・ホラKutna Hora (ドイツ名クッテンベルクKuttenberg。DS—に登場) において。極めて高品位の銀貨。
- (163) 雪隠黄金虫 Mistkäfer. 馬糞黄金虫。牛糞・馬糞、便所、堆肥などに見られる、糞や腐肉を餌にする甲虫類の一種。
- ……けれどもこの僅かなやつが、家に戻ってみると、金貨に変わっていたのである。Aber diese wenige waren, als der Mann nach Hause kam, in Gold verwandelt. この話は前掲書中の「リユーベツァールが雪隠黄金虫をトゥッカーテン金貨にする」58. Rübzahl machet Dukaten aus Mistkäfer. べた。
- (165) 失札ノホドオ許シヤレ s. v. 原文は上記の通り。s. v. はラテン語 salva venia の略語。心ならずも卑語を言ったり、記したりする場合に添える。
- (166) 脚部痛風患者 Podagrast. 「脚部痛風」Podagra (足痛風) の症状が出ている人。血液中の尿酸値が高くなると、四肢の関節部、たとえば手首足首、あるいは足指 (とりわけ親指) などに尿酸が結晶となって析出、神経を刺激、劇痛を与える。痛風、すなわち尿酸性関節炎Gichtである。足首や足指にこの症状がひどく出たら、痛くて痛くて、松葉杖でも使わないことには到底歩けない。
- (167) ちよこちよこさん Zipperlein. 最初は足痛風を指した中世以来のドイツ語俗語。足痛風を患う者のおぼつかない歩き振りを揶揄

- したのだが、後には痛風一般をいうようになった。
- (168) 根( ) Wurzel. この植物は岩三( )葉 Giersch (学名 *Aegopodium podagraria*) であろう。中近世、数世紀に亘り、リユーマチや痛風の痛みを和らげるための民間薬として使用された。若い葉はカリウム、ビタミンC、カロチン、鉄分を含み、ほうれん草に似た食感で、生食・煮食いずれにも適した味の良い野草である。
- (169) ……患者はそれつきりちよこちよこどんと縁が切れた。Er war vom Zipperlein befreit auf immerdar. への話は前掲書中の「リユーベツァールが根( )この代わりに蛇を与える」19. Rubezahl gibt Schlangen für Wurzel. である。
- (170) リーベタル Liebethal. 「リーベントール」Liebenthalの誤り。現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ) シロンスク県の小さな町ルボニェルズ Lubonierz。
- (171) 田紳 Landjunker. 田舎住まいの下級貴族。田舎郷士。
- (172) 「裁ち台の下」端切れ入れ Holle. 仕立屋は服地を裁断しながら端切れをここに落とす。こうした端切れを役得として、客に返却することなくすねてしまうのが——他の稼業のやつかみによる誹謗もあるが——仕立屋の常習である、とされた。
- (173) ……「親方、親方」と詰問しているかのように思われたからである。Als riefte ihn da eine Stimme warnend zu: Meister! Meister! この話は前掲書中の「リユーベツァールが服を「着作らせる」96. Rubezahl läßt ein Kleid machen. である。
- (174) 田舎郷士 Krautjunker. 英国の 'country squire' (田舎住まいの紳士階級) に当たる。
- (175) ライヒスターラー銀貨 Reichstaler. 十六世紀から十九世紀まで神聖ローマ帝国に流布した大きく重い銀貨。
- (176) ……けれども翌日陶片はライヒスターラーに変わっていた。Am andern Tage aber waren die Scheiben wieder in Reichstaler verwandelt. への話は前掲書中の「リユーベツァールが何人かの織物商人を誑かす」95. Rubezahl verblendet eiliche Tuchhändler. である。
- (177) 火蛙 Feuerkröte. 「火蛙」という和名はない。ドイツ語を直訳しただけである。「赤腹蟾蛙」Rotbauchunke = 「ヨーロッパ鈴蛙」(学名 *Bombina orientalis*) のこと。外敵に襲われると引く繰り返して不規則な真つ赤な斑点(警戒色)の出た腹を見せる。皮膚から毒液を分泌する。触れたらよく手を洗わなくてはいいけない。
- (178) 好いやつ eine gute Haut. 'Haut' は「皮膚」だが、こういって言い回しにも使われる。ペヒシュタインは掛詞を使ってふざけているのだが、訳者としては好い迷惑である。
- (179) ……材料の布と革は山の牧場で集められた代物、革の製造元は牝牛( )どもだった。Und das Tuch und Leder dazu auf den Bergwiesen gesammelt war, und die Kühe die Fabrikanten forthanen Leders waren. 牧草と牛糞が素材だった。への話は

- (180) 前掲書中の「リューベツアールが短靴と長靴を売る」105. Rübzahl hat Schuhe und Stiefel feil. ではや。  
 この原料、昔薬局で白龍胆しろりゅうたんの名で取り引きされたが、この名の薬草の根とは全くの別物のあれだった。der sonst in den Apotheken unter dem Namen weißer Enzian gehalten und geführt wurde, aber nichts weniger war, als die Wurzel der unter diesem Namen officinellen Pflanze. 訳者にはなかなか訳が分かりません。識者ししの「高教を俟つたのです。花が咲いていない状態では「エンツィアン」と取り違えられる強毒の「梅蕙草」ばいけいそう weißer Germer、学名Veratrum albumのことか。これは古代には毒殺にも矢毒にも使われたし、近世には風駆除剤ともなった。なお、「エンツィアン」Enzian はラテン語「ゲンツィアナ」gentiana——龍胆属の植物——であり、アルプスなどの山地に生育するこの種の根は極めて苦く、健胃作用があり、これを混入した火酒「エンツィアン」gentiana「ゲビルクスエンツィアン」が販売されている。
- (181) ヴァルムブルン Warmbrunn. DSB六三三七に既出。
- (182) 理髮師 Hartkräusler. 直訳すれば「髪を縮らす人」。整髪の一つとして熱した鏡かがみを使って綺麗な巻き毛にする技術があった。ヨーロッパ人でも自然の巻き毛は多くない。
- (183) 鬘台 Perückenstock. 寝台の脇に置き、就寝前に脱いだ鬘まげを載せる台。  
 ……その他いろんな動物の巣を見つけた。oder von sonstigen Geniste. この話は前掲書中の「リューベツアールが色色な鬘まげを売る」106. Rübzahl hat Barücken feil. ではや。
- (185) 紅苔 Purpurflechte. 「紅苔」という和名はない。リトマス苔。英語「オルシン」orcein、フランス語「オルセイユ」orseille。地中海沿岸地方、西アフリカの海岸の岩石上に生える地衣類。古代ローマでは悪鬼あくま鬼おにの一種ヨーロッパチヂミボラなどと共に深紅色の染料を得る原料とされた。
- (186) 蕨巖 Veichenstein. リーゼンゲビルゲ主要尾根の西側部分。現ポーランドとチェコの国境にある。巖が香りを付けるわけではない。  
 ヒルシュベルク Hirschberg. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の歴史ある都市イェレニャ・グラJelenia Góra(現人口八万五千弱)。ドイツ名もポーランド名も「鹿の山」の意。リーゼンゲビルゲの麓、チェコとの国境に位置する。
- (188) 棚 Klatzer. 薪の量としては三立方メートル。
- (189) クルムヒューベル Krummhübel. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の都市カルパチKarpacz。  
 豚を潰つぶしたかったところだった schlachten wollte. 中近世のドイツでは、秋が深まると飼っている豚を処分して、ベーコン、ハム、ソーセージ——これらは冬中の食糧として極めて大切——などに加工するのが習わしだった。豚を殺して、血を抜き、解体——以上には専門の技術者を頼む——し、一家総出で加工作業をするわけだが、ただ茹でただけの肉や出来立てのフレッシユソー

- (191) セージなどを当日食べるのはこれに参加した人たちの大いなる愉しみだった。  
 腸詰め Wurst. これは細い、小さなソーセージであるヴェルストヒェン Würstchen ではない。大人の二の腕ほどの太さ、長さのものか。なおソーセージはほとんど全種類燻製室に入れて燻煙し、保存が利くように処置する。
- (192) 穀物を碾す牛に口籠をかく可らず du sollst dem Ochsen, der da drischt, nicht das Maul verbinden. である。ヘビシユタインの誤記、あるいは誤植か。旧  
 ター訳では、du sollst dem Ochsen, der da drischt, nicht das Maul verbinden. である。ヘビシユタインの誤記、あるいは誤植か。旧  
 約聖書申命記二十五章四節。つまり、好きなだけ喰わしてやっても、どうって量じゃあるまいから、鷹揚に喰わしてやるう、とお  
 百姓は考えたわけ。
- (193) あるスウェーデンの副連隊長 einem schwedischen Obristleutnant. 三十年戦争におけるスウェーデン軍については、たとえば D  
 SB六三四注「リュッツェンの会戦」参照。
- (194) 鑿岩 Kingstein. 緻密な火山岩の一種で、叩くと独特な音響を発する。
- (195) 周知の「蕪敷え」に関する言ひ伝え Die allbekannte Sage vom Rubenzählen. DSB六四〇本文および注参照。
- (196) シレジア Schlesien. 現ポーランド南西部からチェコ北東部に及ぶ地域の歴史的名称。ドイツ語シュレージエン。ポーランド語シ  
 ロンスク Śląsk. チェコ名スレスロ Slezsko。一三三八年ポーランド王国の五主要地域の一つとしてシロンスク公国が創設された。  
 しかしすぐに小公国群に分裂する。十四世紀初めボヘミア王国に帰属。神聖ローマ帝国の領邦となる。しかしポーランド古王家の  
 末裔シロンスク・ピヤスト家が分裂しながらも連綿として領主だったが、十五―十六世紀の間にこの家系は消えて行き、一六七五  
 年レグニツァ（ドイツ語リーゲニッツ）公・ブジェク（ドイツ語ブリーク）公イェジ（ゲオルク）・ヴィルヘルムが嗣子を残さず  
 に亡くなると、ポーランド系正嫡は終わり、ハプスブルク家が結婚により相続し、オーストリア領となる。後オーストリア継承戦  
 争（一七四〇―四八）・七年戦争（一七五六―六三）により大半がプロイセン王国に併合され、同王国シュレージエン州となり、  
 一九四五年までドイツ領。オーストリア領シュレージエンは一九一八年まで継続。
- (197) 彼らはやはり長靴片っぱ丸丸でもへいちゃらだった die einen guten Stiefel vertragen konnten. einen guten Stiefel vertragen  
 können は「大量のアルコールに耐えることができる」の意の慣用句。DSB八〇本文および注参照。
- (198) シュヴァインハウス Schweinhans. 「豚・猪の家」の意。現ポーランド・ドルヌイ（ドルノ）シロンスク県の小さな町ポルクフの  
 外れにあり、シュヴァイニイ村を見下ろすシュヴァイニイ Sviný 城。現在一部は修理されているが廃墟。貴族シュヴァイニヒェン一族  
 の根城だった。
- (199) シュヴァイニヒェンの殿たち Herren von Schweinichen. 「豚」Schwein・「猪」Wildschwein から出た名称。現ポーランド・ドル

- (200) スイ(ドルノ) シロンスク地方、すなわちかつての下シユレージエン地方の極めて古い貴族一門の一つ。おそらくスラヴ系。家系の分かれは現存。シユヴァイニヒエン一族の家門伝承によれば、ボヘミアの騎士ビヴォイBivoy は兇暴な牡猪を素手で殺し(あるいは、生きたまま捕らえ)、伝説的なボヘミアの女君主リプッサLibussa(チエコ語リプシエLibuse)の足許に投げ落とした。その報償として彼は女君主の姉Schwester —— Schwester は姉妹いずれでもよいわけだが、こゝから「姉」としたことになる。DSB六五六の後掲注参照——カーシヤの手と所領と今日のシユヴァインハウス城を授かった。これは七六〇年頃のことだそう。アナクの子 Enacksohn. カナンの地の住民で巨人。旧約聖書民数紀略十三章二十八節、三十三節。荒野を彷徨う貧しい遊牧民だったイスラエルの民から見れば、豊かなカナンの地に定住して農牧畜業や商業を行っていたその住民は素晴らしい体格と思えたのであろうか。
- (201) ニムロド Nimrod. ノアの曾孫。勇敢な獵人。旧約聖書創世記十章八―九節。
- (202) ボヘミアの女王リプッサ Bohmenkonigin Libussa. DSB六七二で詳しく扱われるので注はそちらを参照されたい。
- (203) その父親たちなりしロイブス城およびグリユッサウ城の酒蔵主任にのみ nur denen patribus Kellernmeistern zu Leubus und Grüssau. 「父親たち」とは実父と舅を指すのであろうか。
- (204) カンネ Kanne. 約一リットル。
- (205) ひたすらに名譽をため我が族 ich will daz die minen / vf ere sich bienen. 原文は上記の通り。直訳「我は我が一族が名譽を積みせんことを欲する」。
- (206) 古い豚館 alen Säuhausel. 「ザウ」Sau は「牝豚」、また方言で「豚」の意。
- (207) ヴォーラウ Wohlau. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ) シロンスク県の都市ヴォウフ Wolow。
- (208) ポラック Polack. ポーランド人を指す俗称、蔑称。
- (209) トカイ Tokayer. 普通 Tokajer と綴る。ハンガリア北東部トカイ Tokajとその周辺地域から成るトカイ・ワイン地区で作られる極上の貴腐ワイン。大層甘く芳醇で黄金色に輝く白ワインである。
- (210) 昔彼らは驢馬喰いと言われた sie hießen sonst Eeßstreser. この綽名は人文主義時代に初めて現れる——たとえばカスパー・ゾンマーの論文「しれじあノ驢馬喰イニツイテ」Casper Sommers Dissertation: De Onophagia Silesiorum. 1877. が挙げられる——が、とにかく事実である。ただし、まだになぜそう呼ばれたのかはつきりした説明は付かない。異教時代のドイツ人が馬や驢馬を喰ったことと関係はないし、鉾山の坑道に「黄金の驢馬」という名があったなどということも同様無関係である。——以上はL・レーリヒ『諺風慣用句事典』Lutz Röhrich: *Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten*. に拠る。



- (211) でつかい兎と für einen großen Hasen. 驢馬には日本でも兎馬(ウサギウマ)という異名があった。耳が長く大きいから。
- (212) オーター河畔のブリーク Brieg an der Oder. 現ポーランド・オポーレ県の都市ブゼーク Brzeg。
- (213) スウェーデン軍の一連隊長 ein schwedischer Feldobrist. 三十年戦争におけるスウェーデン軍については、たとえば D S B 六三四注「リユッツェンの会戦」参照。
- (214) 黄金の驢馬でなければならぬのが残念だ。 Schade, daß es ein goldner Esel sein muß. 訳者にはベビシュタインが何を言いたいのか分かりません。識者のご高教を俟つたいです。
- (215) 最愛のイエスよ、我ら(ワウ)に集って Liebster Jesu wir sind hier. 原文は上記の通り。
- (216) 時は確かに至れり Es ist gewißlich an der Zeit. 原文は上記の通り。
- (217) 悲しむなかれ、イエスがそなたを愛する限り Nur nicht betrüb, so lang dich Jesus liebt. 原文は上記の通り。
- (218) シュヴァイドニッツ Schweidnitz. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の歴史ある都市シュヴァイドニッツ Swidnica。ツォプテン山 Zopfenberg. 現ポーランド語シュレンジャ Szeja' あるいはソプトカ Sobotka. 標高七一八メートルでツォプテン山塊の最高峰。なだらかながら孤立峰である。山頂には先史時代——おそらく青銅器時代——からの祭祀場があったし、五世紀以降ケルト人やゲルマン人の聖地として「シレジアの聖なる山」だった。山頂の周りには謎めいた異教の彫刻がある。魚を持った乙女熊、牡猪で、いずれも太陽光の象徴である逆祀(ウサカ)を帯びている。十三世紀中頃山頂には山城があったが、一二九六年以降盗賊の巢窟として取り壊された。一三五〇年頃同じ場所に小さな防塞が築かれたが、一四七一年同じ理由でプレスラウ市によって破却された。
- (219) 小型風琴 Positive. 小さな、持ち運びの容易なオルガン。音栓は僅かで、通常鍵盤は一組であり、ペダルはない。中世の携帯用小オルガン「ポルトティーフ」Portativ の後身。
- (220) アナタガタニ平安アランコトヲ pax vobis. 原文は上記の通り。ラテン語。
- (221) ココニ全ク平安無シ hic nulla pax. 原文は上記の通り。ラテン語。
- (222) 主ノ御名ニオイテアナタガタニ平安アランコトヲ pax vobis in nomine domini. 原文は上記の通り。ラテン語。
- (223) ココニ平安無シ hic non pax. 原文は上記の通り。ラテン語。
- (224) 主ナル我ラガいええず・くりすとうすノ御名ニオイテアナタガタニ平安アランコトヲ pax vobis in nomine domini nostri Jesu Christi. 原文は上記の通り。ラテン語。
- (225) 鴉 Dohle. 正確には西黒丸鴉。学名 Corvus monedula。鴉属では最小の種の一つ。
- (226) 都市ライヒェンバッハ die Stadt Reichenbach. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の古い都市ジェルジョヌフ

- Dzierzoniow。  
 (228) スヴァンテヴィット Swanlewit. 「スヴァントヴィット」Swantwitとも。その他幾つもの呼称がある。戦神。リューゲン島のラーネン族やエルベ河畔、北海沿岸居住のスラヴ人の最高神。その石像は四つの頭を持ち、頭のそれぞれが東西南北を見ている。  
 (229) フン族の徒党 Hunenholde. ベビシュタインはハンガリア(マジャル)人を指している。  
 (230) メルゼブルクの勝利の会戦 die Mersesburger Siegeschlacht. 九三三年三月十五日メルゼブルク(リアーデRadeとも)近郊における東フランク王ハインリヒ一世に召集された軍勢とより大軍のハンガリア(マジャル)人との戦い。王の優れた戦術によって後者は打ち破られた。  
 (231) アスカニアのドゥーノ Duno von Askaniem. この話でその名が伝えられているだけである。  
 (232) リンゲルハイムのジークフリート Siegfried von Ringelheim. 初代ブレンネンブルク(今日のブランデンブルク)辺境伯(在位九二七?九二八?—一三七)。東フランク王ハインリヒ一世に任命された。ヴェンド人との戦いの後、嗣子のないまま死んだ。  
 (233) 皇帝ハインリヒ一世 Kaiser Heinrich I. DSBにこれまで再登場。ザクセン公、東フランク王。添え名は捕鳥王(ハインリヒ)der Finkler。歴史的にはザクセン朝ドイツ王国初代国王。しかし神聖ローマ皇帝ではない。  
 (234) 聖ファイトの踊りとか聖ヨハンニスヨハニスの踊り St. Veits- und St. Johannis-Tanz. 原文は上記の通り。  
 (235) ある牧師 ein Pfarrer. 聖職者。新教(プロテスタント)の牧師とも旧教(カトリック)の司祭とも取れる。シレジアでは十六世紀から住民の約九割が新教を信仰していたから、この聖職者も牧師であろうと考え、そう訳した。  
 (236) シュトレレーレン Strehlen. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の都市スチェリリンStrzelin。  
 (237) ヴァンゼン Wanssen. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の町ウイオンスフWiązów。  
 (238) オーラウ川 Ohlau. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の川オウヴァOława。オドラ(ドイツ語オーダー)川の支流の一つ。同名の都市がオドラ川とこの川の間にある。  
 (239) リークニッツ Liegnitz. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の都市レクニツァLegnica。  
 (240) プレスラウ Breslau. 現ポーランド・ドルヌイ(ドルノ)シロンスク県の大都市(現人口六十三万余でポーランド第四位)ヴロツワフWrocław。  
 (241) 栓 Zapfen. 溶けた金属が入っている炉の底の栓。中世の鑄造過程では、鉄の棒でこれを抜くと、どろどろの金属が粘土を塗った木製の桶を通して粘土で作られた鑄型に流れ込む。  
 (242) 皇帝ハインリヒ五世 Kaiser Heinrich V. ザーリアー朝最後のドイツ王(在位一一〇六—一一二五)、神聖ローマ皇帝(在位

- 一一一一一（二五）。
- (243) ポーランド王ボレスラウス Polenkonig Boleslaus. ポーランド大公ボレスワフ Boleslaw 三世（在位一一〇二—一一三八）。
- (244) スカルピク伯 Graf Skarplik. ベシユェタインは上記の（一）とく綴っているが、現在は普通「スカルベク」Skarpeck. 同家はポーランドのごく古い貴族の一つ。既に十一世紀に名が挙げられている。
- (245) 黄金ハ黄金<sup>アウロム・アット</sup>ノ許<sup>キアト</sup>ニ置カレテ<sup>アウ</sup>コ<sup>ウ</sup>。aurum adiciatur auro. 原文は上記の通り。ラテン語。ポーランド人はかつてそのかなりがラテン語に堪能だった。今でもラテン語はポーランドの第二の国語とも言われるそう。
- (246) ボーバー Bober. オドラ川の左の支流でポーランド南西部を流れるププル Bohr 川。
- (247) ザガン Sagan. 現ポーランド・ルブシュ県の都市ザガン Zagan.
- (248) ザガン公爵家 eigene Herzoge. 直訳「自己の公爵家」。ザガン公爵領は一二七四年グロガウ公爵領（一二五一年シレジア公国が分割されて成立）から分かれた。
- (249) グロガウ Glogau. 現ポーランド・ドルヌイ（ドルノ）シロンスク県の都市グウオグフ Glogow。
- (250) グラーツ Glatz. 現ポーランド・ドルヌイ（ドルノ）シロンスク県の都市クウオツコ Kłodzko（現人口約二万八千）。ヴロツワフの南西約八〇キロ。十六世紀半ばから十九世紀に至るまでグラーツ伯爵領の首邑だった。なおクウオツコのドイツ語名グラーツ（グラーツと発音表記できえうだがそうではない）は現オーストリア第一の都市（現人口約二十五万）グラーツ Graz と片仮名表記が同じになる。
- (251) その姉カーシャあるいはテトカ deren Schwester Kasha oder Tetka. DSB 六七一「クロクとその娘たち」でもカーシャ、テトカ、リブツサ（リブシヤ）の順である。また、J・K・A・ムゼーウスの『ドイツ人の民話』Johann Karl August Musäus: *Volksmärchen der Deutschen*. (一七八二—一八六) の第三部に収録されている「リブツサ」——鈴木満訳「沈黙の恋 ドイツ人の民話」（国書刊行会、平成十九年）所収——でもやはり、リブツサは三姉妹の末娘、とある。ただしムゼーウスはこの姉たちの名を「ベラ」Bela および「テルバ」Therba と表記している。尤も「カジ」Kaj および「テタ」Teta としているチェコ人の記事もある。リブツサ（チェコ語片仮名表記では「リブシエ」が近似値）についてはDSB 六七一—DSB 六七六を参照。
- (252) ポーランドの女性支配者ヴァンダ Wanda die Polenregentin. 伝説によればクラクフ公にしてクラクフの建設者クラクスの娘ないう孫で、七〇〇年頃ポーランド人を支配した。クラクフ司教にしてポーランド年代記を著したヴィンセンティ・カドウベク Wincenty Kadłubek（一一五〇頃—一二三三）が初めて記している。歴史家たちは、カドウベクがこの伝説を捏造した、と考えて

- (253) ボヘミアの乙女戦争 *der böhmische Mägdekrieg*. 「アマゾンズ戦争」とも。チェコ語「ディーヴチー・ヴァールカ(乙女の戦争)」*Dívčí válka*。ボヘミアの支配権を巡る伝説上の女性と男性の戦争。最古の文献は十二世紀初頭ブラハのコスマスがラテン語で著した「ボヘミア年代記」*Kosmas z Pádu: Chronica Bohemorum* である。それによればボヘミアの乙女たちは女君主リプシエの死後、さながらギリシア神話に登場する戦闘女人族のように暮らし、女統率者を選び、男のような装いをして、森で狩りをし、自分の夫は自分で探そうとした。自分たち自身の城「城デヴィーン(乙女城)」*hrad Devín* すら築いた。男たちはその近く——後にヴィシエフラト *Vyšehrad* (DSB六七五注参照) が築城された場所——にフラステン *Christen* なる名の第二の城を築き、両性間に戦争が勃発した。やがて和議のために三日間の祝宴が催されることになったが、もうその最初の夜に男どもはそれぞれ自分の妻とする乙女を誘拐した。以来女性性は男性の優越に甘んじているのだ、と。
- (254) ヴラスカ *Waska*. *Waska* とも綴られる。「ヴラスタ」*Wasta* と記した文学作品もある。
- (255) シナイ山の高きその他もろもろの類例と同様 *wie mit der Höhe des Berges Sinai und vielen andern Dingen der gleiche Fall*. 教員資格認定試験で受験生に旧約にあるシナイ山の高さを問うた教育界のさるお偉方がすく、わしにも分からないがね、と率直に認めたと、という笑い話を踏まえている。
- (256) 巫女 *Sibylle*. 本来は古代地中海世界において神託を伝える巫女のこと。ここでは「予言をする女性」の意味で用いられているであらう。
- (257) この科の木の上に巫女が住んでいて *auf dieser Linde saß die Sibylle*. 実際ヨーロッパの科の木や柏は大層な巨木になるので、樹上にまあまあ人が寝られる小さな家が造れるのである。
- (258) 環 *Rink*. ベヒシュタインは上記のように綴っているが「リング」*Ring*。現グラーツ旧市街にある歴史的広場。
- (259) グロムツィ *Glomuzi*. 未詳。ただし現ザクセン州マイセン郡の小都市ロマツチュ *Lommatzsch* 北方2キロ余のところ、に西スラヴ系民族の聖地だったグロムチ *Glomuci* なる泉がある。
- (260) 古ロムニッツ *Lomnitz*. ボヘミア王国(現チェコの西部・中部)の村スタラー・ロムニチ *Stará Lomnice*。現チェコにおける名称は未詳。
- (261) エルベータイニッツ *Elbe-Teinitz*. ボヘミア王国の村。現チェコにおける名称は不明。
- (262) フルメッツ市 *die Stadt Chlumetz*. 現チェコ・ブラデツ・クラロロヴェー州ブラデツ・クラロロヴェー郡の都市(十八世紀に都市権を獲得)フルメッツ・ナト・チドリノウ *Chlumec nad Cidlinou*。ドイツ語フルメッツ・アン・デア・チドリナ(チドリナ河畔のフルメツ) *Chlumetz an der Cidlina*。

- (263) ベルカ・フォン・ドゥクスおよびライパ Berka von Dux und Leipa. ベルカ・フォン・ドゥバおよびリパ Berka von Duba und Lipa であろう。ボヘミア貴族。
- (264) フルメッツのオットー・ベルカ・フォン・トロスキイ Otto Berka von Trosky auf Chlumec. ボヘミアの貴族だが未詳。ボヘミア王（在位一三七八—一四一九）ヴァーツラフ四世 Václav IV.——神聖ローマ皇帝（在位一三七六—一四〇〇）としてはヴェンツェル Wenzel——からトロスキイ城を買い取ったオットー・フォン・ベルゴウ（大）Otto von Bergow (der Ältere) か。
- (265) トロスキイ Trosky. 現チェコ・リベッツ州セミリ郡の都市ロヴェンスコ・ポト・トロスカニ Rovensko pod Troskami 近郊にある城トロスキhrad Trosky（現在は廃墟）。二つのまことにごつしい巖角の上にそれぞれ塔が建てられ、間は城壁で結ばれている。十四世紀後半に築かれたと思われる。アレクサンダー・フォン・フンボルトはトロスキイ城を「世界の八番目の奇蹟」Achtes Weltwunderと書いた。
- (266) より高いのはバーバ（母さん）、もう片方はパンナ（嬢ちゃん）と呼ばれている die höhere heißt Baba (Mutter) und die andere Panna (Jungfrau). ベヒシュタインは上記のごとく括弧してドイツ語の注を付けているが、ロシア語 gata を始めとするスラヴ系の言語における「バーバ」は「老婆」「おっかあ」「おばちゃん」等であろう。この場合は「バーバ（婆さん）」Baba (altes Weib) ともすべきだったか……。
- (267) トロスコヴィッツ Troskowitz. 現チェコ・リベッツ州セミリ郡の小村トロスコヴィツェ Troskovice。

### 結びの一言。

DSB六四五「シレジアの酒豪」に出て来る酒杯の銘（中世高地ドイツ語）の一部 *ds* が分からなかったのですが、従属接続詞 *als* である、との明確な回答をくださった。新田さん、いつもまことにありがとうございます。お蔭様で拙訳がらなにかつじつまを合わせることができました。